

は  
**羽**  
ほう  
方

ば  
**場**  
ばく  
角

あけぼの  
**曙**  
ひがし  
東

い  
**遺**  
い  
遺

せき  
**跡**  
せき  
跡

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

は  
羽  
方

ば  
場  
角

あけぼの  
曙  
東

い  
遺  
遺

せき  
跡  
跡

2003年3月

長野県飯田市教育委員会

## 序

私たちの飯田市は、美しい自然に恵まれ、長い歴史と尊い伝統文化につつまれた人情豊かなまちとして知られており、市民憲章では「伝統を生かし、文化の香り高い飯田市をつくります」と宣言しています。丸山・羽場地区は飯田城下の西側に位置し、飯田の象徴－風越山を間近に仰ぎ、名水百選にも選ばれた猿庫の泉に多くの人々が訪れるなど、豊かな自然に恵まれたところです。また、重要文化財白山社奥社本殿や白山社隨身門をはじめ多くの文化財に恵まれ、文化的な息吹きを感じられます。

多くの地方都市にみられるように、飯田市でも近年主要幹線道路の整備とともに市街地が拡大し、店舗・事業所が郊外に移転するなど、市中心街地の空洞化が深刻な問題となっています。丸山・羽場地区もこうした市街地化の波に早くから影響を受けた地域の一つで、道路や下水道などのインフラの整備が求められてきました。昭和62年度からの土地区画整理事業（丸山・羽場第1地区）に引き続き、今回第2地区的工事が計画されたわけですが、区画整理事業を通じてより良い住環境の実現を図るもので、その事業実施はやむを得ないものと考えられます。

今回工事が計画されましたところは、埋蔵文化財包蔵地の羽場曙遺跡・方角東遺跡の一画にあたります。これまでに具体的な調査は行われていなかったところですが、近くでは中央自動車道建設に先立って櫛現堂前遺跡・さつみ遺跡の発掘調査が実施されています。その結果、今から1,800年ほど前の弥生時代の住居やお墓といったムラのあとや、中・近世のお墓のあとが見つかっています。また、第1地区内においても弥生時代から古墳時代にかけてのムラの一画が調査されています。今回の事業地の中でもこうした文化財の存在が推定され、現状のまま後世に残し伝えるべく手を尽しましたが、やむを得ず記録保存の道をとることになりました。結果は本書の内容のとおり、弥生時代と中・近世のムラの姿や生活の様子が明らかになりました。

たゆみない文化財保護活動により、このような地域の歴史が次第に明らかになりつつありますが、調査記録をとどめた本報告書が活用されてはじめて、地区および市域の方々の財産として生命を与えられることになります。そうなることを切に望む次第です。

最後になりましたが、文化財保護の本旨にご理解を賜りご協力いただきました地元関係者の皆様、ならびに発掘調査に従事された方々に深甚なる感謝を捧げまして発刊の辞といたします。

平成15年3月

飯田市教育委員会

教育長 富田恭啓

## 例　言

1. 本書は土地区画整理事業（丸山・羽場第2地区）に先立って実施された、長野県飯田市羽場町・羽場権現所在の羽場曙遺跡・方角東遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は飯田市建設部都市計画課（平成8年7月から都市整備課）の委託を受け、飯田市教育委員会が直営実施した。
3. 調査は、平成4～14年度に現地作業、同7～14年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・空中写真撮影・空中写真測量を株式会社ジャステックに委託した。
5. 発掘作業・整理作業にあたり、遺跡略号として羽場曙遺跡はHBA、方角東遺跡はHGHとした。地番を付して用いた。
6. 本報告書では以下の遺構略号を使用している。  
　竪穴住居址・竪穴-SB、据立柱建物址-ST、方形周溝墓-SM、櫛列・一本柱列-SA、  
　土坑・土葬墓・地下室-SK、溝址・溝状址-SD、集石-SI、水田址-SX
7. 本書の記載順は地点別とし、遺構別を優先して遺構図は挿図とした。
8. 土層の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により馬場保之が行なった。
10. 本書の執筆と編集は馬場が行なった。
11. 遺構・遺物の調査・記述・表現方法については、『飯田城下町遺跡』（飯田市教委 2001）・『開善寺境内遺跡』（同 2002a）に準拠した。
12. 本書に関連した出土遺物および図面・写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館・飯田市上郷考古博物館に保管している。

# 本文目次

序  
例言  
目次

第Ⅰ章 経過 .....	1	(1)方形周溝墓 .....	43
第1節 調査に至るまでの経過.....	1	(2)水田址 .....	47
第2節 調査の経過 .....	1	(3)溝址・溝状址 .....	47
第3節 調査組織 .....	6	(4)周辺柱穴 .....	51
第Ⅱ章 遺跡の環境 .....	9	(5)遺構外出土遺物 .....	51
第1節 自然環境 .....	9	第6節 第VII地点 .....	51
第2節 歴史環境 .....	9	(1)地下室 .....	51
第Ⅲ章 羽場曙遺跡 .....	13	(2)溝址・溝状址 .....	51
第1節 調査区の設定 .....	13	(3)遺構外出土遺物 .....	54
第2節 基本層序 .....	13	第7節 試掘・立会・確認調査結果 .....	54
第3節 第I地点 .....	15	第8節 総括 .....	56
(1)竪穴住居址 .....	15	(1)縄文時代 .....	56
(2)掘立柱建物址 .....	17	(2)弥生時代 .....	56
(3)方形周溝墓 .....	21	(3)中・近世 .....	56
(4)竪穴 .....	29	第IV章 方角東遺跡 .....	61
(5)土坑・土葬墓 .....	29	第1節 調査区の設定 .....	61
(6)溝址・溝状址 .....	29	第2節 基本層序 .....	61
(7)集石 .....	34	第3節 市道6-27・6-28号線	
(8)周辺柱穴 .....	34	本調査地点 .....	61
(9)遺構外出土遺物 .....	34	(1)方形周溝墓 .....	61
第4節 第III地点 .....	35	(2)土坑・土葬墓 .....	66
(1)掘立柱建物址 .....	35	(3)タキ状部分 .....	66
(2)方形周溝墓 .....	35	(4)周辺柱穴 .....	66
(3)壠列・一本柱列 .....	38	(5)遺構外出土遺物 .....	66
(4)竪穴 .....	39	第4節 市道6-14号線立会	
(5)土坑・土葬墓 .....	39	調査地点 .....	66
(6)溝址・溝状址 .....	39	(1)方形周溝墓 .....	67
(7)周辺柱穴 .....	43	(2)土坑 .....	67
(8)遺構外出土遺物 .....	43	(3)溝址・溝状址 .....	68
第5節 第V地点 .....	43	(4)遺構外出土遺物 .....	68

第5節 試掘・立会・確認調査結果	68	第2節 弥生時代の集落について	73
第6節 総括	72	第3節 中位段丘上の開発について	74
(1)縄文時代	72	第4節 中世から近世にかけての墳墓群	
(2)弥生時代	72	について	75
(3)平安時代以降	72	引用参考文献	77
第V章 まとめ	73	報告書抄録	
第1節 両遺跡の被った災害	73		

## 挿 図 目 次

挿図1	調査遺跡および周辺遺跡位置図	2	挿図23	S K18~20	39
挿図2	事業地位置図	3	挿図24	S D05~07	40
挿図3	調査の経過	5	挿図25	周辺柱穴平面図(5)	41
挿図4	基準メッシュ図区画調査位置	12	挿図26	第V地点遺構全体図	42
挿図5	第I地点の基本層序	13	挿図27	S M08・09	44
挿図6	第I地点遺構全体図	14	挿図28	S X01・02、S D08~11	45・46
挿図7	S B01~04	16	挿図29	S D12	48
挿図8	S T01・02・04~06	18	挿図30	周辺柱穴平面図(6)	49
挿図9	S M01	19・20	挿図31	第VI地点遺構全体図、S K21	50
挿図10	S M02	22	挿図32	S D13・14	52
挿図11	S M03	23	挿図33	S D15	53
挿図12	S K01~05	24	挿図34	市道6-11号線試掘	55
挿図13	S K06~11	25	挿図35	羽場曙遺跡遺構配置	57・58
挿図14	S K12~17、S I01	26	挿図36	方角東遺跡調査位置図	60
挿図15	S D01~04	27・28	挿図37	市道6-27・6-28号線調査区 遺構全体図、基本層序	62
挿図16	周辺柱穴平面図(1)	30	挿図38	S M03、S K41~47・56	63
挿図17	周辺柱穴平面図(2)	31	挿図39	S K48~55・57・58	64
挿図18	周辺柱穴平面図(3)	32	挿図40	S K59、周辺柱穴平面図 (?)	65
挿図19	周辺柱穴平面図(4)	33	挿図41	市道6-14号線・4-6号線 立会	67
挿図20	第III地点遺構全体図	34	挿図42	市道3・6・38号線試掘	70
挿図21	S B05、S T03、S A01、 S M04	36			
挿図22	S M05~07	37			

## 図版目次

第1図	羽場曙遺跡出土遺物（1）	83
第2図	羽場曙遺跡出土遺物（2）	84
第3図	羽場曙遺跡出土遺物（3）	85
第4図	羽場曙遺跡出土遺物（4）	86
第5図	羽場曙遺跡出土遺物（5）	87
第6図	方角東遺跡出土遺物	88

## 写真図版目次

図版1	羽場曙遺跡第I地点とその周辺
	第I地点北西半
図版2	第I地点南東半
図版3	S B01 同炉址
図版4	S B02 S B03 S T01
図版5	S M01・S T05 S M01・S D03 S M02
図版6	S M03 土葬墓群 S I01
図版7	S D02（南西から・北東から） S D01（南東から） 基準点測量
図版8	重機表土剥ぎ 遺構検出作業 同振り下げ作業
図版9	羽場曙遺跡第III地点全景 同（北東から）
図版10	S T03 S M04 S B05・S D07
図版11	S K19 重機表土剥ぎ 遺構振り下げ作業

図版12	羽場曙遺跡第V地点全景（南西から） S M08 S M09
図版13	S D12 S D10・11、S X02（北東から） 重機表土剥ぎ
図版14	遺構振り下げ作業 羽場曙遺跡第VI地点 S K21 遺構検出作業
図版15	方角東遺跡6-27号線本調査（南東から ・北西から） S M03
図版16	S M03周溝（南東側） S K42他 S K45
図版17	S K49 S K50 S K51
図版18	S K52 S K53 S K54
図版19	市道6-28号線 S K59 重機表土剥ぎ 遺構検出作業
図版20	羽場曙遺跡第I地点 S B01出土土器 同第III地点 A K23 P1出土土器

## 表目次

第1表	羽場曙遺跡遺構属性表（1）
第2表	羽場曙遺跡遺構属性表（2）

第3表	方角東遺跡遺構属性表
第4表	陶磁器観察表

# 第Ⅰ章 調査の経過

## 第1節 調査に至るまでの経過（挿図1・2）

平成2年11月2日、飯田市長 田中秀典より飯田市羽場町における土地区画整理事業（丸山・羽場第2地区）の計画が提示され、開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が提出された。事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地羽場曙遺跡・方角東遺跡にかかり、事業主体である飯田市建設部・長野県教育委員会・飯田市教育委員会の三者が、平成2年12月14日現地協議を実施した。この際、飯田市教育委員会が平成2年度に市内遺跡詳細分布調査（旧市）を予定していたため、平成3年5月28日、調査結果に基づいて改めて協議した。その結果、年度毎の施工箇所について、その計画年度の前年度に試掘調査を行い、試掘結果に基づいて再協議することとなった。

## 第2節 調査の経過（挿図3）

諸協議に基づいて、事業の年次計画に従い、以下のとおり試掘・本発掘調査、立会・確認調査、整理作業を実施した。

### 1) 平成4年度

方角東遺跡について、平成5年1月19日に3.4.15号線・3.6.38号線の試掘調査を実施した。

### 2) 平成5年度

羽場曙遺跡は平成6年2月14・15日に3.6.38号線について試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期の方形周溝墓等が確認され、本発掘調査の実施が不可欠と判断された。

### 3) 平成6年度

羽場曙遺跡3.6.38号線部分については、前年度の試掘調査結果を受けて、平成6年7月18日、飯田市建設部長 井川弘志と飯田市教育委員会教育次長 松下赳人との間で委受託費負担の協定を締結し、発掘調査を飯田市教育委員会が受託実施することとなった。同日、重機を入れて表土を除去し、7月20日作業員による作業を開始した。弥生時代の方形周溝墓や中世の溝跡等を確認し、掘り下げて精査した。写真撮影・測量作業実施後、8月2日から排土下部分の調査のため、再度重機を入れた。引き続き、人力により方形周溝墓・溝跡・土葬墓等の遺構を確認して掘り下げを行い、記録等行った後、8月30日現地作業を終了した。

また、12月12日に9-1号線について試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期および中世の遺構・遺物が確認され、本発掘調査の実施が不可欠と判断された。そこで、12月20日、委受託費負担の協定を締結し、本発掘調査に着手した。12月26日より重機を入れて表土を除去し、平成7年1月10日作業員による作業を開始した。弥生時代の方形周溝墓や中世の溝跡・土壙墓等を確認し、引き続き掘り下げて精査し、1月23日現地における作業を終了した。



1. 羽場曙遺跡
2. 方角東遺跡
3. 飯田城遺跡
4. 権現堂前（湯渡）遺跡
5. 正永寺原遺跡
6. 押洞遺跡
7. 大門町遺跡
8. 飯田城下町遺跡
9. さつみ遺跡
10. 古屋垣外遺跡
11. 丸山遺跡
12. 木戸脇遺跡
13. 枢が塚古墳
14. 三臺湖遺跡
15. 上の金谷遺跡
16. 小垣外遺跡
17. 八幡面遺跡
18. 中村中平遺跡
19. 中島平遺跡
20. 六反田遺跡
21. 酒屋前遺跡
22. 公文所前遺跡
23. 厳原遺跡
24. 中川遺跡
25. 三日市場大原遺跡
26. 愛宕城跡
27. 城山城跡
28. 虚空蔵岩跡
29. 伝馬町地点
30. 風越窯跡

挿図1 調査遺跡および周辺遺跡位置図



挿図2 事業地位置

この他、11月30日に市道3.6.38号線（東西線）と6-10号線（東端）の試掘調査を実施した。

#### 4) 平成7年度

羽場曙遺跡では、平成7年9月8日に6-10号線（中央、飯田市羽場町680-1他）について試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期の方形周溝墓1基・中世の溝址1条・時期不明の溝址1条や、中世の陶器等が確認され、本発掘調査の実施が不可欠と判断された。そこで9月11日飯田市建設部長 井川弘志と飯田市教育委員会教育次長 亀割正夫との間で委受託費負担の協定を締結し、発掘調査を飯田市教育委員会が受託実施することとなった。9月12日、本発掘調査に着手した。重機を入れて表土剥ぎを行い、統いて9月18日作業員による作業を開始した。遺構検出・掘り下げ作業、写真撮影・測量作業を実施後、9月22日再度重機を入れて土の返しを行った。引き続き、人力により遺構検出・精査し、写真撮影・測量作業を経て、10月23日現地作業を終了した。

また、平成6年度発掘調査実施の9-1号線に隣接する6-7-2号線（飯田市羽場町668-2他）について、前年の調査結果から本調査が必要と判断され、11月21日委受託費負担の協定書を締結した。11月29日本調査に着手し、重機を入れて表土剥ぎを行い、統いて作業員による作業を開始した。遺構検出・掘り下げ作業、写真撮影・測量作業を実施後、再度重機を入れて土の返しを行った。引き続き、人力により遺構検出・精査し、写真撮影・測量作業を経て、12月8日重機で埋め戻しを行い、現地作業を終了した。

さらに、6-10号線（東側）と6-8号線について試掘調査を実施した。

なお、平成6年度発掘調査を実施した分については、4月3日委受託費負担の協定書を締結し、飯田市考古資料館において整理作業を実施した。

#### 5) 平成8年度

方角東遺跡について7月19日・10月30日・12月18日に3.6.38号線の、10月30日に羽場公会堂の試掘調査を実施した。また、平成7年度に発掘調査を実施した部分についての整理作業を飯田市考古資料館において実施した。

#### 6) 平成9年度

羽場曙遺跡は平成9年11月15日に6-9号線の試掘調査、さらに6-11号線の試掘調査を実施した。

方角東遺跡は同日6-20号線（中央）、12月9日に6-17号線・6-20号線（北側）、平成10年2月27日～3月2日に6-11号線の試掘調査を実施した。

また、平成8年度に引き続き、飯田市考古資料館で整理作業を実施した。

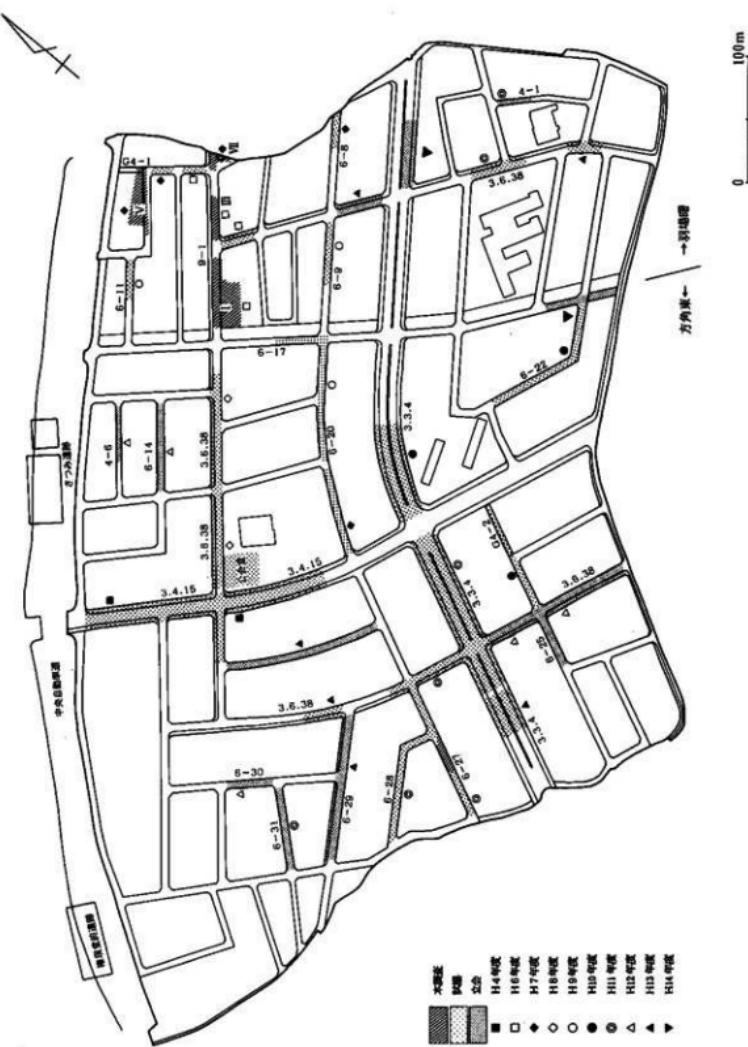
#### 7) 平成10年度

平成10年8月24日付10飯管第646号にて、飯田市建設部より計画書および予算書の提出依頼があり、同27日付10飯教博第124号にて、計画書・予算書提出を行い、現地での試掘調査に着手した。今年度は方角東遺跡のみで、9月25日に6-22号線、10月29日に3.3.4号線、11月13日に6-24・G4-2号線の試掘調査を実施した。重機により用地内に幅2m程のトレーナーを振り、必要に応じて作業員による検出作業を行った。そして遺構の有無を確認した後、写真撮影を行い、重機により埋め戻して現地での作業を終了した。

#### 8) 平成11年度

平成11年9月13日付11飯管第615号にて、飯田市建設部より計画書および見積書の提出依頼があり、9

図3 調査の経路



月17日付11飯教博第171号にて、計画書・見積書提出および委託費負担協定締結を行い、現地での試掘調査に着手した。

羽場曙遺跡では3.6.38号線の試掘調査、4-1号線の立会調査を実施した。

方角東遺跡は10月18~20日に3.3.4号線・3.6.38号線の試掘調査、12月2日に6-27号線の試掘調査、12月24日に6-28号線の試掘調査を実施した。6-27号線の一部については方形周溝墓・土坑が確認され、本発掘調査の実施が不可欠と判断された。12月13日に調査に着手した。まず、重機により表土剥ぎを行い、続いて作業員を入れて遺構の検出・掘り下げ・精査を行った。これらについて写真撮影・図面作成を行い、12月17日に現地での作業を終了した。

他に、6-31号線、平成12年2月22日に3.6.38号線(平成4年度試掘箇所)、3月23~25日に6-14号線の立会調査を実施した。6-14号線部分では断面および平面で遺構が確認され、検出位置・断面等の記録保存を行った。

#### 9) 平成12年度

平成12年度は、4月10日に昨年度立会調査した6-14号線先線部分、5月15日に4-6号線、9月7・27日に3.6.38-1号線、12月14日に6-25号線、12月21日に6-30号線の立会確認調査を実施した。4-6号線では断面および平面で遺構が確認され、検出位置・断面等の記録保存を行った。

#### 10) 平成13年度

平成13年7月2日、飯田市建設部長 藤本照之と飯田市教育委員会教育次長 久保田裕久との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託費負担協定を締結した。

羽場曙遺跡は12月12日に3.6.38-4号線の試掘調査を実施した。その結果、遺構が確認され、検出位置・断面等の記録保存を行った。記録後すみやかに埋め戻しを行い、現地作業を終了した。また、平成14年2月18・22日に3.6.38-3号線の立会調査を実施した。

方角東遺跡は7月10日に3.6.38号線、平成14年1月10日に3.3.4号線について試掘調査を実施した。路線内に重機でトレンチを掘削し、遺構検出作業を行った。その結果、前者で遺構が確認され、検出位置・断面等の記録保存を行った。記録後すみやかに埋め戻しを行い、現地作業を終了した。また7月4日に6-26号線、11月14~19日に6-29号線、6-31号線・3.6.38-3号線の立会調査を実施した。

また、13年度以前に本発掘調査を実施した箇所について、遺構図のトレース・版組作業、遺物の実測・トレース・版組作業等の整理作業を実施した。

#### 11) 平成14年度

平成14年度は、出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業、遺物の実測・拓本とり、遺構図等の作成・トレース作業、写真類の整理、版組み等整理作業を行い、報告書作成作業にあたった。

### 第3節 調査組織

#### (1)調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助(平成3年12月~平成11年12月)

富田恭啓 (平成11年12月～)

調査担当者 佐々木嘉和・吉川 豊・馬場保之・下平博行・福澤好晃  
調査員 渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・坂井勇雄・羽生俊郎  
伊藤友久 (財団法人 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成6年度)  
上沼由彦 (同上、平成7・8年度)  
西山克己 (財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターより派遣、平成10年度)  
藤原直人 (同上、平成11・12年度)  
作業員 伊藤孝人・井上恵資・今村勝次・太田沢男・恩沢不二子・北原 裕・熊崎三代吉  
齊藤喜千・柳原政夫・佐々木一平・佐々木文茂・清水三郎・代田和登・菅沼和加子  
杉山春樹・瀬古郁保・仲田昭平・中村地香子・服部光男・古林登志子・松下成司  
松下直市・松下光利・松島 保・三浦照於・宮下貞一・山田康夫  
新井幸子・新井ゆり子・池田幸子・伊東裕子・奥村栄子・金井照子・金子裕子  
唐沢古千代・木下早苗・木下玲子・櫛原勝子・小池千津子・小平晴美・小平不二子  
小平まなみ・小林千枝・小林理恵・斎藤徳子・佐々木真奈美・佐々木美千枝  
佐藤知代子・関島真由美・鈴木尊子・竹本常子・高木純子・高橋恭子・橘 千賀子  
田中 薫・筒井千恵子・中沢温子・中田 恵・中平けい子・丹羽由美・林 勢紀子  
林 ひとみ・原 昭子・樋本宣子・平栗陽子・福沢育子・福沢幸子・古根素子  
牧内喜久子・牧内八代・松下博子・松島直美・松本恭子・三浦厚子・南井規子  
宮内真理子・森藤美知子・森山律子・吉川悦子・吉川紀美子・吉澤佐紀子

(2)指導

長野県教育委員会

財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター

(3)事務局

飯田市教育委員会

松下惣人 (教育次長、～平成7年3月)

亀割正夫 (同上、平成7年4月～9年3月)

関口和雄 (同上、平成9年4月～12年3月)

久保田裕久 (同上、平成12年4月～)

1) 平成4年度…社会教育課文化係・社会教育係

安野 節 (社会教育課長)、原田吉樹 (社会教育課文化係長)、小林正春・吉川 豊・馬場保之・渋谷  
恵美子・福澤好晃 (以上社会教育課文化係)、篠田 恵 (社会教育課社会教育係)

2) 平成5年度…社会教育課文化係・社会教育係

安野 節 (社会教育課長)、原田吉樹 (社会教育課文化係長)、小林正春・山下誠一・吉川 豊・馬場

保之・渋谷恵美子・吉川金利・福澤好晃・下平博行（以上社会教育課文化係）、岡田茂子（社会教育課社会教育係）

3) 平成6～8年度…社会教育課文化係・社会教育係（～平成8年6月）

横田 繁（社会教育課長）、小林正春（社会教育課文化係長）、吉川 豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行（以上社会教育課文化係）、岡田茂子（社会教育課社会教育係）

4) 平成8年度…博物館課埋蔵文化財係・庶務係（平成8年7月～）

矢澤与平（博物館課長）、小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）、吉川 豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行（以上博物館課埋蔵文化財係）、麦島博晴・牧内 功（以上博物館課庶務係）

5) 平成9・10年度…博物館課埋蔵文化財係・庶務係

小畠伊之助（博物館課長）、小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）、吉川 豊・山下誠一・馬場保之・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行（以上博物館課埋蔵文化財係）、麦島博晴・牧内 功（以上庶務係）

6) 平成11年度…博物館課埋蔵文化財係・庶務係

小畠伊之助（博物館課長）、小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄（以上博物館課埋蔵文化財係）、麦島博晴・牧内 功（以上庶務係）

7) 平成12年度…博物館課埋蔵文化財係・庶務係

米山照実（博物館課長）、小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・福澤好晃・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄（以上博物館課埋蔵文化財係）、今村 進・松山登代子（以上庶務係）

8) 平成13年度…生涯学習課文化財保護係・学校教育課総務係

中島 修（生涯学習課長）、小林正春（生涯学習課文化財保護係長）、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・下平博行・坂井勇雄・羽生俊郎（以上生涯学習課文化財保護係）、鈴木邦幸（学校教育課長）、高田 清（学校教育課総務係長）、宮田和久・福澤恵子（以上学校教育課総務係）

9) 平成14年度…生涯学習課文化財保護係・学校教育課総務係

中島 修（生涯学習課長）、小林正春（生涯学習課文化財保護係長）、馬場保之・渋谷恵美子・吉川金利・伊藤尚志・坂井勇雄・羽生俊郎（以上生涯学習課文化財保護係）、伊藤昌治（学校教育課長）、高田 清（学校教育課総務係長）、宮田和久（学校教育課総務係）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 自然環境

飯田市羽場町・羽場権現は飯田市街地の西側に位置する。

飯田市は伊那山脈と木曽山脈にはさまれた伊那谷の南端にあたり、両山脈の間を天竜川が南流する。天竜川による典型的な河岸段丘が見られるとともに、山脈の形成に関わる断層地塊運動に伴い盆地・大きな段丘崖が形成されており、複雑な段丘地形を呈している。

本書に関する羽場曙遺跡・方角東遺跡および飯田市街地が立地する場所は、南を飯田松川により、また北側を野底川により区切られた段丘上に立地する。この段丘上には、風越山麓から扇状地が発達し、東端の段丘端部（標高500m）から風越山麓（標高600m）までの比高差100mの間が緩やかな傾斜で一連の面となっている。このことは、本来の段丘地形が存在しないわけではない。風越山麓からの扇状地形が発達したことにより上位の段丘地形が扇状地に覆われていること、さらに、市街地化の進行により微地形の判断が困難であるためである。その証拠として、本遺跡西側の権現堂前遺跡と更に西側の権現堂遺跡の間には約20mの比高差があることがあげられる。さらに、こうした段丘部分では、河川が下削作用から堆積作用に転じ扇状地が形成されるものと考えられる。この一見連続して捉えられる段丘上での羽場曙遺跡・方角東遺跡の位置は、段丘面上のほぼ中央部で若干松川寄りの、風越山麓から発達した扇状地上にある。段丘上における位置からみて、羽場曙遺跡・方角東遺跡周辺は標高530m前後であり扇状地の先端部付近と考えられ、段丘上にみられる王竜寺川・源長川・阿弥陀沢川・円悟沢川等小谷川により微地形が複雑に変化する部分である。

羽場曙遺跡は源長川・阿弥陀沢川と円悟沢川、方角東遺跡は円悟沢川と段丘縁辺部の間にある。全体的には起伏に富んでおり、丘陵部と凹地部が縞状にみられ、凹地部においては小湿地が発達した部分もある。

なお、丸山・羽場地区では、これまでの本発掘・試掘・立会調査結果で、縄文時代から弥生時代の間に堆積した洪水に起因する黄褐色砂・黄褐色砂質土が広範囲に認められる。しかし、羽場曙遺跡・方角東遺跡は風越山麓裾部から500m前後と離れ、通常自然災害を受けにくい場所で、全体的にみると古くから生活の適地であったと考えられる。

### 第2節 歴史環境（挿図1）

旧石器時代については、市内では後期以前にさかのぼる遺跡として石子原遺跡と現在（財）長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センターで調査中の竹佐中原遺跡がある。これ以外には断片的に遺物が出土している程度で、この時代の様相を詳述できる材料がないのが現状である。本地区では、美術博物館建設に先立つ飯田城跡の発掘調査で細石刃核が出土している。

縄文時代早期では湯渡（権現堂前）遺跡・正永寺原遺跡・押洞遺跡等で押型文土器の破片が見つかっ

ている（八幡 1972）。中期になると正永寺原遺跡・権現堂前遺跡・押洞遺跡・大門町遺跡（飯田高校に遺跡が分布するようになり、遺物も多く見られるようになる。

続く、水稻栽培を経済基盤とする弥生文化の下伊那への波及は绳文時代晚期終末のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。旧市内の代表的遺跡として、権現堂前遺跡・さつみ遺跡（以上方角東遺跡に含まれる。長野県教委 1971）、羽場曙遺跡・正永寺原遺跡・古屋垣外遺跡（同前）・丸山遺跡（飯田市教委 1988a）等があり、後期の遺跡が多く見られる。高燥な台地上に生産基盤を求めた該期各地区に共通する現象であり、具体的には人口増と生産手段の発達が背景と考えられる。この時代に方角東遺跡・羽場曙遺跡では、竪穴住居址・方形周溝墓等が調査され、散在的な集落景観が把握されているし、飯田城下町遺跡でも方形周溝墓が調査されている。こうした状況は、他地区的高位段丘上に立地する遺跡と共通しており、風越山の裾部や扇状地扇端部付近で発達する湧水や、小河川沿いで水田經營が随所にあったことが予想される。

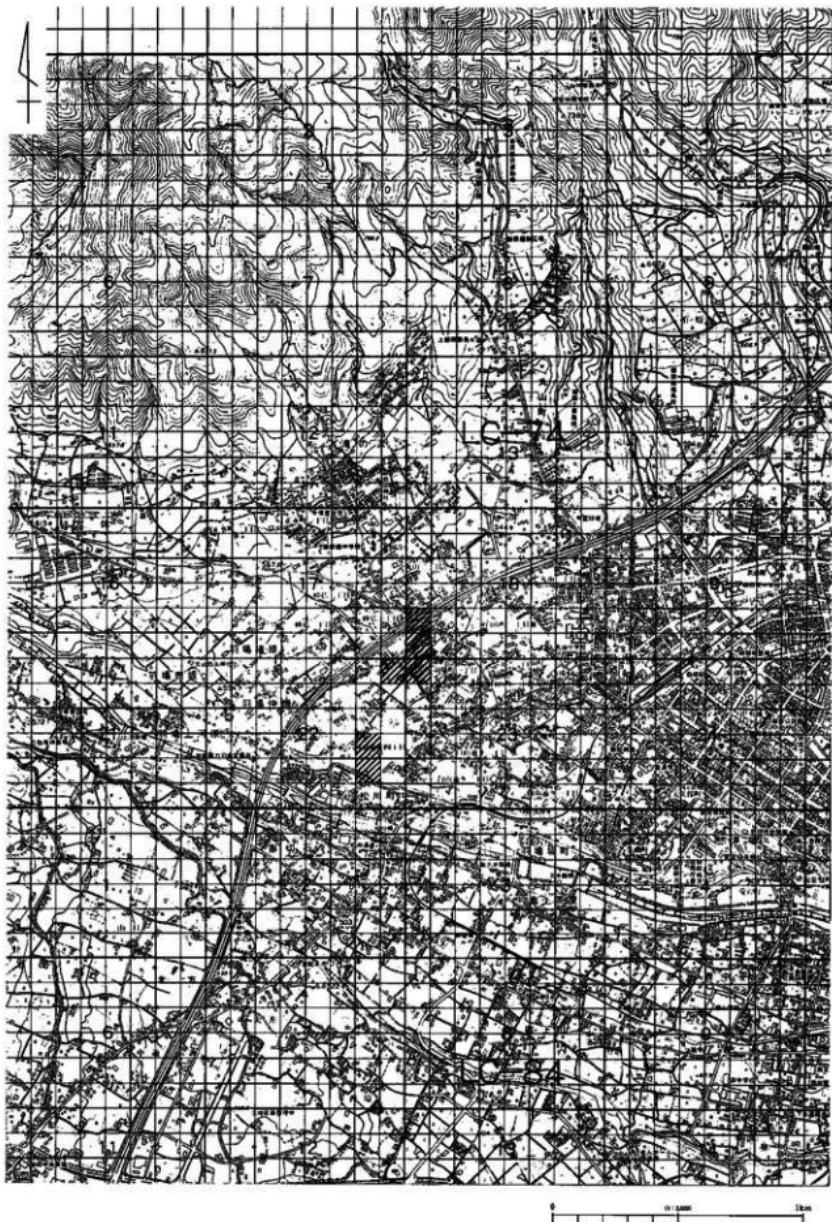
古墳時代にはこの時代の最も特徴的な事象として古墳の築造があり、上飯田地区内にも數基の古墳が存在したことが伝えられているが、現在は市街地化の進行により残存するものは木戸脇古墳・杵が塚古墳のみである。また、寛政年間に松平楽翁が著した『集古十種』銅器一の部の古鏡図によって飯田城下町遺跡内にも古墳があったことが知られる（下伊那誌編纂會 1955）。該期の集落は丸山遺跡で調査されており、相当規模の集落の存在が考えられるが、なお断片的に把握されているにすぎない。同様な地形を呈する伊賀良地区の場合、該期の集落遺跡として、富の平遺跡（飯田市教委 1996a）・三壇測遺跡（長野県教委 1973）・上の金谷遺跡（同前）・小垣外遺跡（飯田市教委 1988b）・八幡面遺跡（同前）・中村中平遺跡（飯田市教委 1994a）・中島平遺跡（同前 1977）が調査されているが、前時代よりも集落数が激減することが指摘されているし、こうした状況は上郷・座光寺地区の上段でも概ね当てはまる。旧市地区においても同様のことが想定できよう。

続く奈良・平安時代の状況は全く不明であるが、前述の伊賀良地区では三壇測遺跡・上の金谷遺跡・小垣外遺跡・八幡面遺跡といった古墳時代の集落が存続する一方で、平安時代には六反田遺跡（長野県教委 同前）・酒屋前遺跡（飯田市教委 1983）・公文所前遺跡（同前 1991）といった集落が登場してくるなど、高位段丘上の開発が進展したことが考えられる。この高位段丘上の諸開発を裏付けるものとして、殿原遺跡溝址3（同前 1987・1992）・中川遺跡溝址3（同前 1996b）・三日市場大原遺跡や方角東遺跡等で確認された溝址が挙げられる。

中世に至って、それぞれの詳細な築城時期は不明ではあるが、飯田城・愛宕城・上飯田の城山・虚空蔵山頂等に山城が造られ、一定の集団による活動があったことを推し計ることができる。未報告であるが、飯田城跡の発掘調査では、近世城郭に先立つ遺構として、空堀2本と小規模な方形の竪穴が約60軒検出されている。

近世の考古学的成果として、飯田城跡二之丸発掘・本丸発掘、飯田城下町遺跡（伝馬町・本町）の発掘、風越窯址の調査がある。飯田城跡二之丸発掘・本丸発掘の大半についてはいずれも未報告であり、二之丸跡では、大通り跡・屋敷の礎石・柱穴・御用水・井戸・池・鍛冶施設・貯蔵施設・ゴミ捨ての大穴等の遺構、陶磁器類・土師質皿・焼塩壺・硯・石臼・煙管・簪・刀・漆器椀・焼物の玩具・碁石等の生活雑器の他、魚骨やサザエの貝殻等が見つかっている。また、住宅建設に先立つ調査では、空堀の出丸側石垣が把握され、サヤ鉢数点が出土したことから付近に飯田藩による官窯の存在した可能性が指摘

されている（飯田市教委 1991b）。本丸跡では、池の一部が調査されている。伝馬町の発掘では、武家屋敷の主屋の一画が調査され、3期の造構の変遷が把握されている（下伊那教育会 1988）。また、本町の発掘調査では町屋の一画が調査され、上級商家の生活の様子が明らかにされた。さらに、風越窯址では2基の窯跡が調査・確認されている。この窯は嘉永年間に美濃から陶工を招いて磁器を焼かせたもので、飯田藩主堀親義のお庭焼・風越焼として知られている。わずか5年で廃止となったが、その後も雑器を焼いたと伝えられており、調査によって鉢・生焼の擂鉢の破片などが出土してそれが裏付けられた。風越窯は連房式登窯の本業窯で、30度を越す急斜面を利用して構築されている。遺物は完形品こそないが、染付けの磁器・青磁・白磁があり、優品が焼かれたことを示す好資料を得ている（飯田市教委 1979）。なお、飯田城の建築・造構で現在残っているものは少なく、安土桃山時代の様式を伝える松尾木下家の門、上郷經藏寺の門・市立飯田中央図書館横の赤門、水の手から追手町へ登る坂の石垣外堀の一部、侍屋敷（佐々木 1995）といった程度である。



挿図4 基準メッシュ図区画調査位置

### 第Ⅲ章 羽場曙遺跡

平成6年度調査の市道3・6・38号線調査区を第I地点（略号H B A 668-1）、9-1号線調査区を第Ⅲ地点（略号H B A 656）、平成7年度調査の6-10号線調査区を第V地点（略号H B A 680-1）、6-7-2号線調査区を第VII地点（H B A 668-2）とした。

#### 第1節 調査区の設定（挿図4）

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図（以下、基準メッシュ図と略す。）に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した（設定方法については飯田市教育委員会 2002『開善寺境内遺跡』他参照）。

第I地点はLC-74 18-41・同22-8・同23-1内に、第Ⅲ地点はLC-74 18-41内に、第V地点はLC-74 18-33・同18-41内に、第VII地点はLC-74 18-41内にそれぞれ位置する。

#### 第2節 基本層序

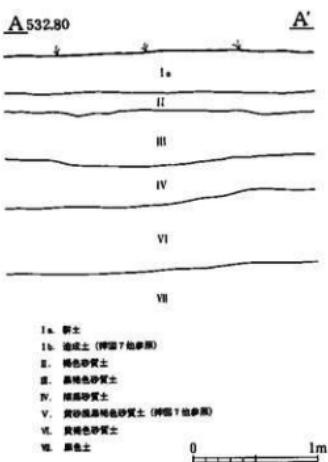
代表的な部分として、第I地点および第V地点を中心に取り上げる。

第I地点では耕土下約50cmで黄褐色砂質土（挿図5のVI層、層厚約60cm）が一面に分布する。このVI層の下位は黒色土（同VII層、層厚60~80cm）で、地山の黄色砂となる。この黄色砂については、隣接する3・6・38号線（東西線）試掘部分で、下部に行くほど疊が多くなりかつ径が大きくなることが確認されている。

第Ⅲ地点北東隅では、方形周溝墓周溝埋土上部に灰黄色の砂利層が被っており、洪水起源のものと考えられる。具体的には、弥生時代以降に阿弥陀沢川の氾濫があったといえよう。

第V地点では、耕土（層厚約30cm）の下に造成土（同約1m）がある。その下位は南東側では近世およびそれ以降の2面の水田面があり、水田直下に黄褐色砂質土（同約1m）が分布する。黄褐色砂質土の上面で弥生時代以降の遺構が検出されている。黄褐色砂質土の下は黒色土（層厚約50cm）で地山の黄色砂に至る。

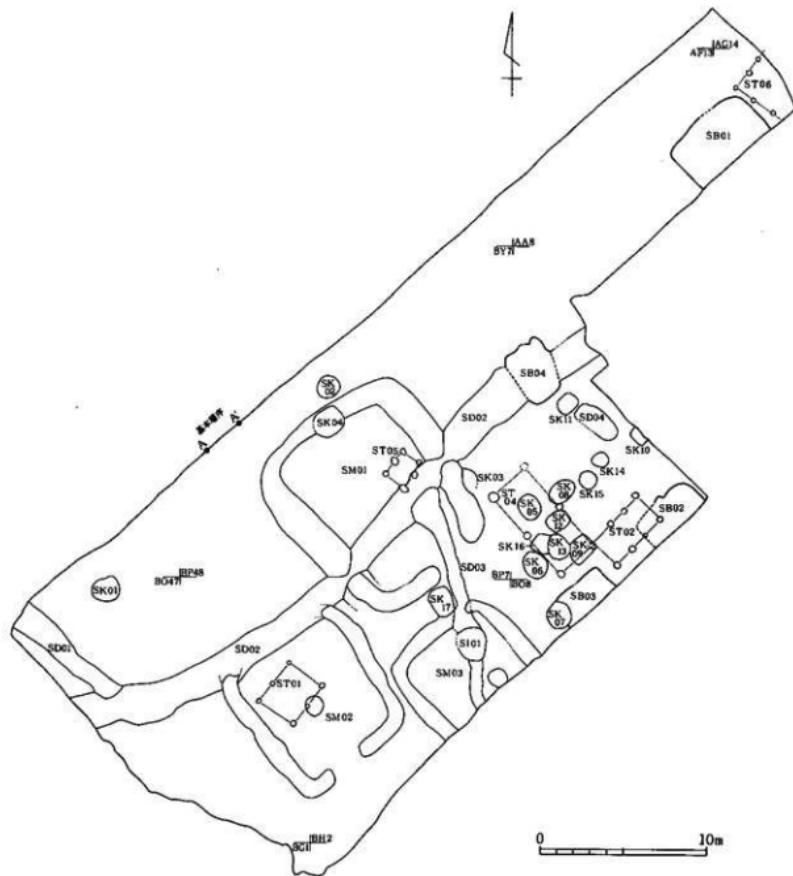
また、平成13年度の3・6・38号線立会調査では表土（層厚約50cm）・黒色土（同約30cm）の下位に1m以上の黄褐色ないし灰褐色の砂が確認されている。同じく平成13年度の3・6・38-4号線試掘調査地点



挿図5 第I地点の基準層序

の状況では、20cmの造成土下に60cm程度の黒褐色土、さらにその下は黒褐色砂質土と砂が互層に堆積する。

以上の状況から、本遺跡の西側約2／3には黄褐色砂質土が分布しており、弥生時代以降の遺構が掘り込まれている。また、第I地点ではSB01の柱穴調査時にⅦ層中から縄文時代後期後葉の遺物が出土しており、黄褐色砂質土の時代性は、縄文時代後期以降弥生時代後期前半以前と考えられる。



挿図6 第I地点 遺構全体図

### 第3節 第I地点（略号HBA668-1）

堅穴住居址3棟、掘立柱建物址5棟、方形周溝墓3基、堅穴1基、土坑・土葬墓17基、溝址・溝状址4条、集石1基等が調査された（挿図6）。調査時には遺構略号は使用していなかったが、整理作業時に後年度の調査分と整合させるため、略号を付け直した。このため、調査時の堅穴状1はSB04に、溝状址1はSD04に変更した。

#### (1)堅穴住居址

##### ①SB01（挿図7、第1図1～3・5）

【検出位置】AD14付近 【規模】 $5.6 \times (5.4)$ m、深さ20cm 【床面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】方形 【主軸】N46°E 【重複】北西壁中央付近を柱穴に切られる 【調査所見】調査区外にかかり、1/2を調査したにとどまる。VI層上面より掘り込まれる 【埋土】自然埋没と考えられる 【壁】緩やかな立ち上がりを示す 【床】硬い部分なし。断面の観察結果では3層が貼床と考えられる 【柱穴】主柱穴2本を検出。埋土黒褐色砂質土である。P1は長径45cm・深さ70cmで、下部は柱痕部分を掘ったと考えられる。平面梢円形を呈することから半截材を用いたと考えられる。P2は径35cm・深さ64cmで円形を呈し、北東側にやや傾くように掘り込まれている 【炉】炉縁石を有する土器埋設炉である。土器・炉縁石とも南西壁側に寄り、中央付近に焼土が認められた。炉縁石は砂岩および変成岩 【付属施設】不明 【出土遺物】弥生時代後期前半の壺・甕、硬砂岩製の有肩扁状形石器が出土した他、縄文時代後期後葉の精製・粗製深鉢片が混入出土。主柱穴P1・P2の間、P1寄りの床直上に遺物が集中する。第1図3は炉体土器、5は硬砂岩素材 【時期】弥生時代後期前半。

##### ②SB02（挿図7）

【検出位置】BR13付近 【規模】 $4.1 \times -m$ 、深さ35cm 【床面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】プランはやや歪むが、概ね隅丸方形を呈すると考えられる 【主軸】北東壁の方向N55°W 【重複】ST02と重複するが、新旧関係は不明 【調査所見】調査区外に約1/2かかる。III層上面より掘り込まれる。当初南西隅に検出された柱穴は埋土が2層と同じであり、本址に伴うと考えられたが、断面で南西壁の一部が確認され、壁より外側に張り出すことから別造構と判断した。ST02と重複する部分はスロープ状にやや高くなってしまい、このためプランが完全には把握できなかった 【埋土】上下2層に区分される 【壁】断面より緩やかな立ち上がりが観察された 【床】貼床・硬い部分とも確認できなかった 【柱穴】2基の小柱穴があり、北東側の浅いものは埋土黒褐色砂質土、他の1基は黒褐色砂質土である 【炉・カマド等】不明である。ST02P1北東脇に僅かに焼土が認められた 【付属施設】不明 【出土遺物】不明鉄製品と繩羽口、小柱穴から縄文土器小片が混入出土したのみである 【時期】掘り込み面の関係から、SB03より新しく、中世遺構に位置づけられるが、詳細時期不明である。

##### ③SB03（挿図7）

【検出位置】BO10付近 【規模】 $3.7 \times -m$ 、深さ20cm 【床面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】方形を呈すると考えられる 【主軸】N48°E 【重複】SK07に切られる 【調査所見】調査区外に1/2かかる。

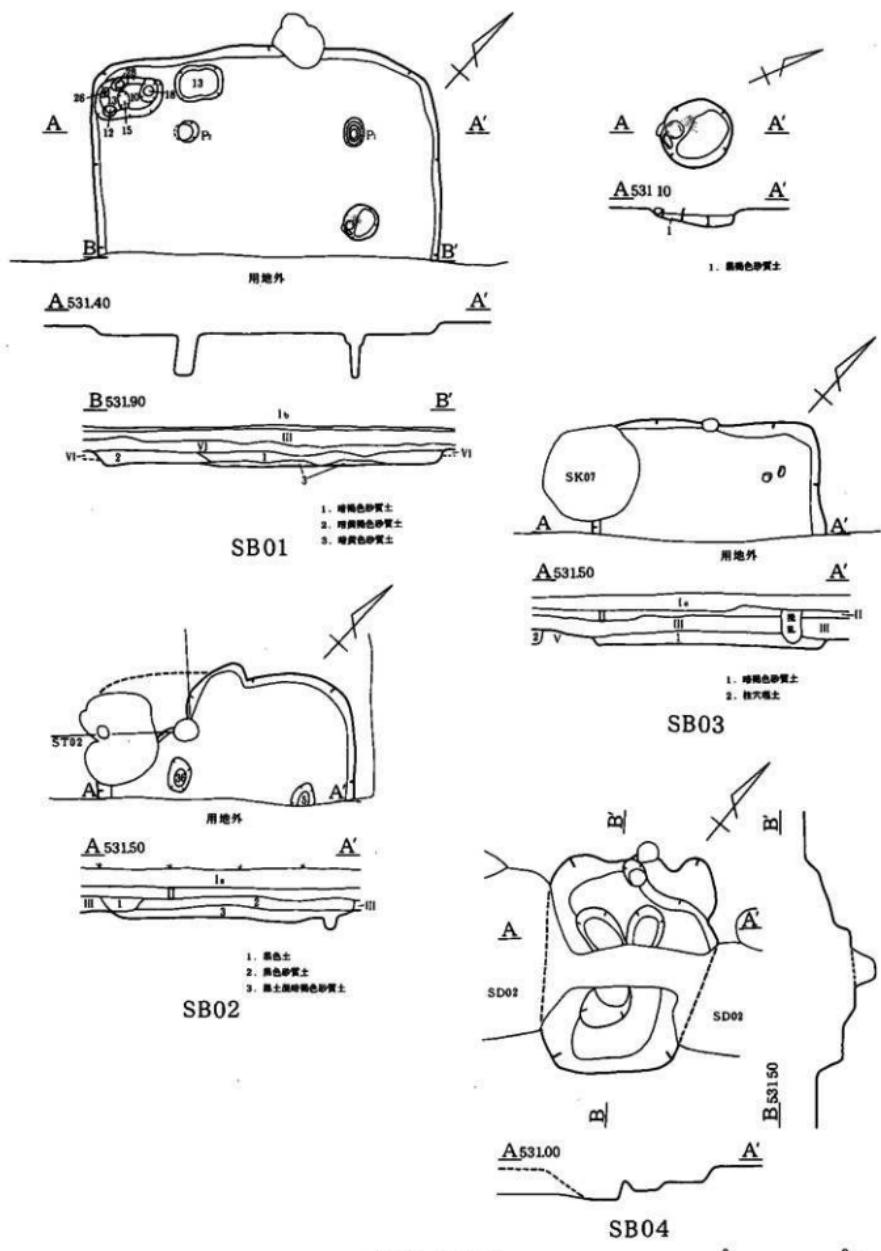


插圖 7 SB01~04

断面観察の結果、V層上面より掘り込まれている。SK07との新旧関係は床面の硬い部分がSK07縁部分で切れていたことによる。【埋土】暗褐色砂質土の単層であるが、自然埋没と考えられる。【壁】断面で確認された部分は浅く、立ち上がりの状態は不明である。【床】中央付近を中心に硬い部分が検出された。【柱穴】不明。【炉・カマド等】不明。【付属施設】不明。【出土遺物】青磁輪花碗および鉄滓（碗形滓）が出土した。【時期】中世に比定される。

#### (2) 堀立柱建物址

##### ① ST01 (挿図8)

【検出位置】BJ01付近 【形態】2間×1間の側柱建物址 【主軸方向】N37°E 【規模】3.0m×2.5m 【柱間隔間】桁1.3+1.7、1.3+1.4m×梁2.5m 【床面積】7.5m<sup>2</sup> 【重複関係】SM02主体部と重複する 【調査所見】重複関係のためP2は底面等明確に把握できず。【柱穴】径25~40cm、深さ15~30cm 【埋土】黒色砂質土 【出土遺物】なし 【時期】規模・形態から弥生時代ないし中世の建物址と考えられるが、詳細は不明である。

##### ② ST02 (挿図8)

【検出位置】BQ11付近 【形態】3間×1間の側柱建物址 【主軸方向】N43°E 【規模】3.8m×2.0m 【柱間隔間】桁(1.5)+1.1+1.2、1.4+(1.2)m×梁2.0m 【床面積】7.6m<sup>2</sup> 【重複関係】SB02と重複するが、新旧関係は把握できず。【調査所見】P2・P5は確認できず。【柱穴】径30~40cm、深さ25~60cm 【埋土】P3・P4は黒色砂質土、P6は黒褐色砂質土、P8は暗褐色砂質土で、他は記述なし 【出土遺物】なし 【時期】ST01と同様、規模・形態から弥生時代ないし中世の建物址と考えられるが、詳細は不明である。

##### ③ ST04 (挿図8)

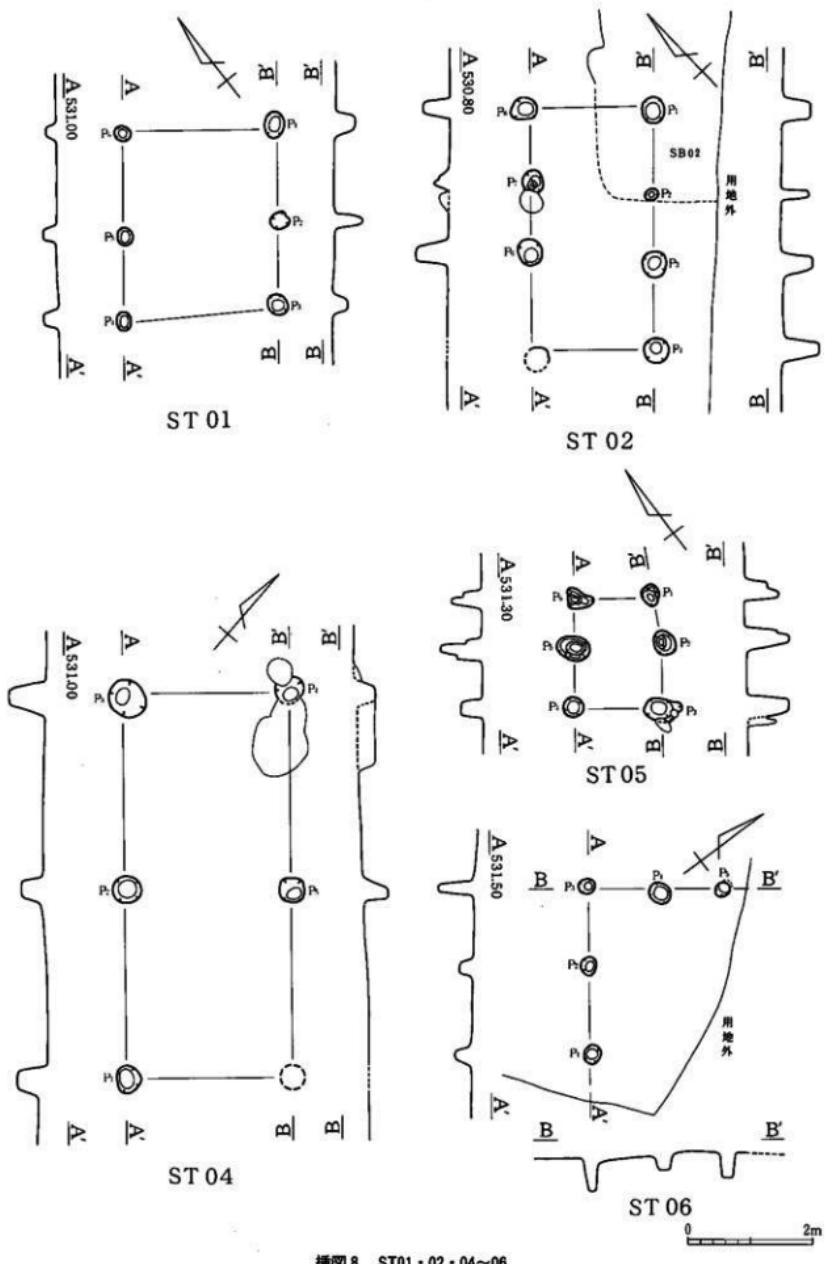
【検出位置】BQ09付近 【形態】2間×1間の側柱建物址 【主軸方向】N52°W 【規模】6.0m×2.6m 【柱間隔間】桁3.0m×梁2.6m 【床面積】15.6m<sup>2</sup> 【重複関係】ST02・SK05・SK09・SK12・SK13・SK16と重複する 【調査所見】整理作業時に組み合うものを抽出した。【柱穴】径40~60cm、深さ32~60cm 【埋土】黒褐色砂質土 【出土遺物】なし 【時期】不明である。

##### ④ ST05 (挿図8)

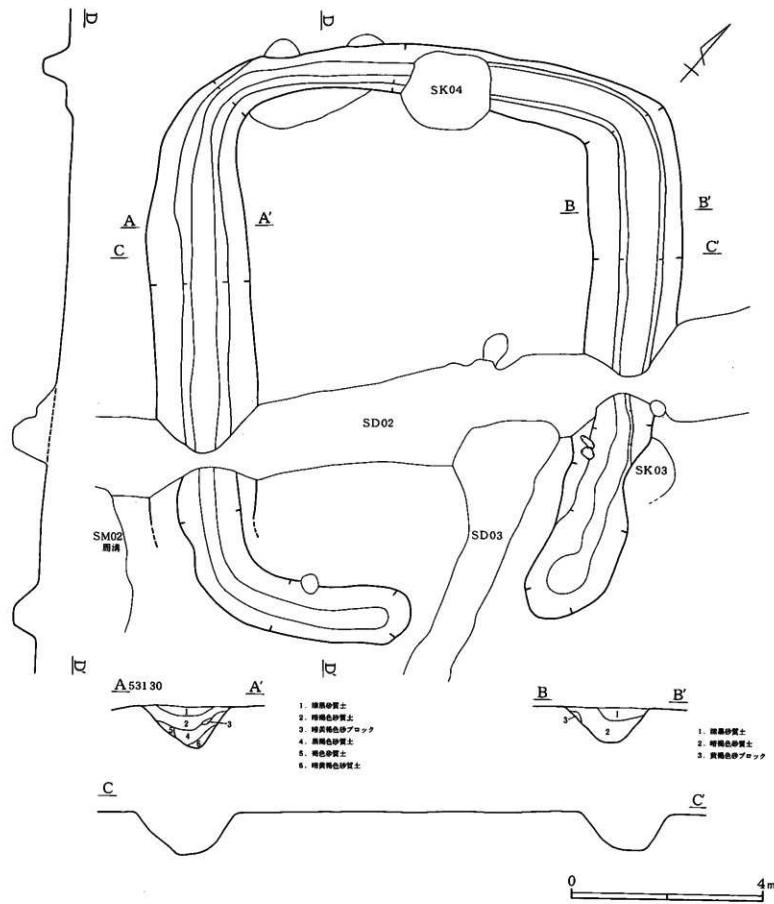
【検出位置】BS04付近 【形態】2間×1間の側柱建物址 【主軸方向】N34°E 【規模】1.8m×1.3m 【柱間隔間】桁1.0+0.8m×梁1.3m 【床面積】2.3m<sup>2</sup> 【重複関係】SM01・SD02と重複する 【調査所見】整理作業時に組み合うものを抽出した。南東側に抜き取り痕が確認される。【柱穴】径20~40cm、深さ37~69cm、抜き取り痕30~50cm 【埋土】漆黒砂質土 【出土遺物】なし 【時期】不明である。

##### ⑤ ST06 (挿図8)

【検出位置】AF15付近 【形態】3間以上×3間以上の側柱建物址 【主軸方向】南東辺の方向N56



插図 8 ST01・02・04~06



插図9 SM01

° W [規模] - m × - m [柱間隔] 仮に南東辺を桁行とすると、桁1.3+1.4+…m×梁1.1+1.1+… m [床面積] - m<sup>2</sup> [重複関係] なし [調査所見] 整理作業時に組み合うものを抽出した。調査区外にかかる [柱穴] 径25~30cm、深さ21~53cmの不整円ないし梢円形を呈する [埋土] 黒色砂質土 [出土遺物] なし [時期] 不明。

### (3)方形周溝墓

#### ①SM01(挿図9)

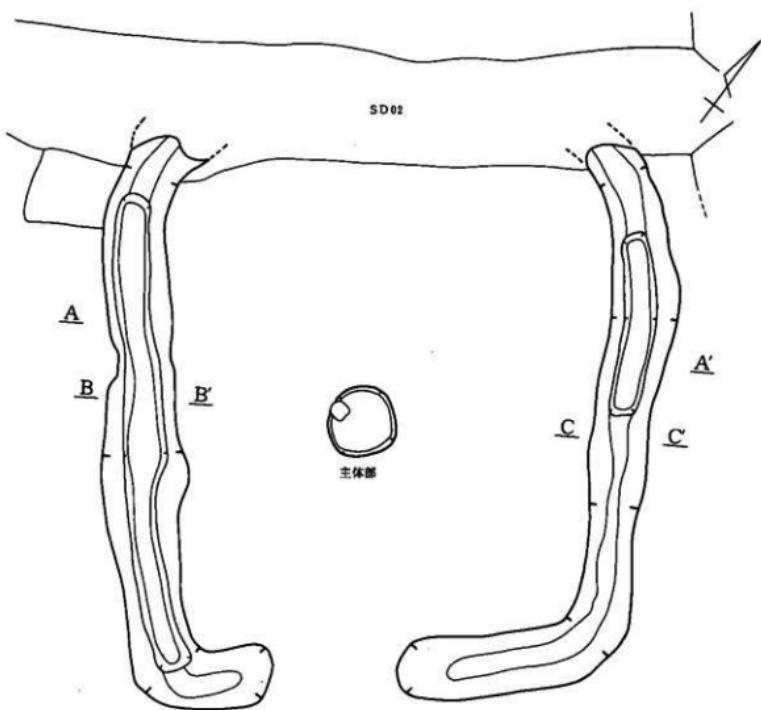
[検出位置] BS03付近 [重複] SK03・SK04・SD02に切られ、ST05・SD03と重複する [調査所見] 周溝は北西辺・南東辺に比較して、北東辺・南西辺が幅広く、深い [規模] 周溝内法10.4×7.0m、周溝外法12.7×11.0m [内法面積] 69.3m<sup>2</sup> [形態] 長方形 [主軸] N50°W [周溝] [規模] 幅70~210cm、深さ18~94cm [断面形] 逆台形 [土橋部] 南東辺の東寄りに土橋が配される [埋土の状況] 自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少。弥生時代後期前半の壺・甕・抉入打製石庖丁(硬砂岩)の他、混入遺物として縄文時代晩期初頭の玉抱三叉文の付される鉢形土器や近世の陶器中碗(天目形/鉄釉/瀬戸美濃系)が出土 [埋葬施設] [有無] 重複のためか、確認できず [その他] [墳丘] 検出面では確認できず [外表施設] 不明 [付属施設] なし [時期] 弥生時代後期前半と考えられる。

#### ②SM02(挿図10)

[検出位置] BJ02付近 [重複] SD02に切られる [調査所見] 平面・断面でSD02との新旧関係を確認 [規模] 周溝内法(8.0)×7.2m、周溝外法(10.0)×9.2m [内法面積] (54.1)m<sup>2</sup> [形態] 方形 [主軸] N43°W [周溝] [規模] 幅70~140cm、深さ28~69cm [断面形] 逆台形を基本とし、深い部分では下部が直に掘り下げられる [土橋部] 南東辺中央やや南寄り [埋土の状況] レンズ状の堆積をしており、自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少。縄文時代後期と考えられる粗製深鉢片が混入出土 [埋葬施設] [有無] 有り [規模] 幅1.1×1.1m、深さ42cm [形態] 不整円形ないし不整方形を呈する [壁] ほぼ直に立ち上がる [その他] [墳丘] 不明 [外表施設] 不明 [付属施設] なし [時期] 具体的に時期を示す遺物はないが、他の周溝墓と同時期の弥生時代後期前半と考えられる。

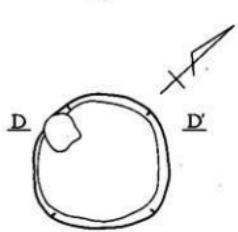
#### ③SM03(挿図11)

[検出位置] BM06付近 [重複] SD03・SK17・SI01に切られる [調査所見] 南東側が調査区外にかかる。V層上面から掘り込まれる。調査区際付近で不整形を呈する落ち込みが把握された。位置は本周溝墓の中央からはずれており、また埋土の状況も疑問が残る。土坑・土葬墓の可能性も考慮したが、やや浅めであることから、一応埋葬施設とした [規模] 周溝内法-×6.0m、周溝外法-×8.0m [内法面積] - m<sup>2</sup> [形態] 方形を呈すると考えられる [主軸] N45°W [周溝] [規模] 幅85~120m、深さ10~55cm [断面形] 逆台形 [土橋部] 確認できず [埋土の状況] レンズ状の堆積であり、自然埋没と考えられる [出土遺物] 遺物量は僅少。弥生時代後期前半の甕小片が出土 [埋葬施設] [有無] 有り? [位置] 前述のとおり [規模] 幅(1.2)×1.1m、深さ24cm [形態] 不整



A531.20

A'



D531.00

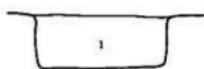
D'

B531.00 B'

C530.80 C'

1. 黑褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 暗黃褐色砂質土
4. 黃沙黃褐色砂質土

1. 黑褐色砂質土
2. 黑色砂質土



1. 黑褐色砂質土

0 1m

插圖10 SM02

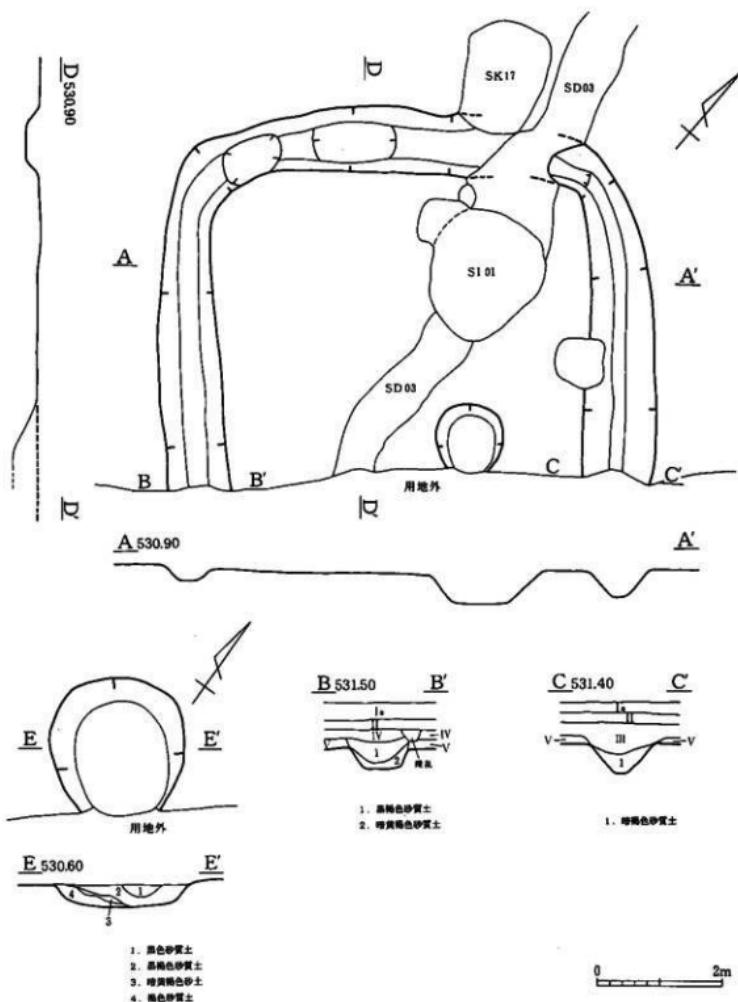
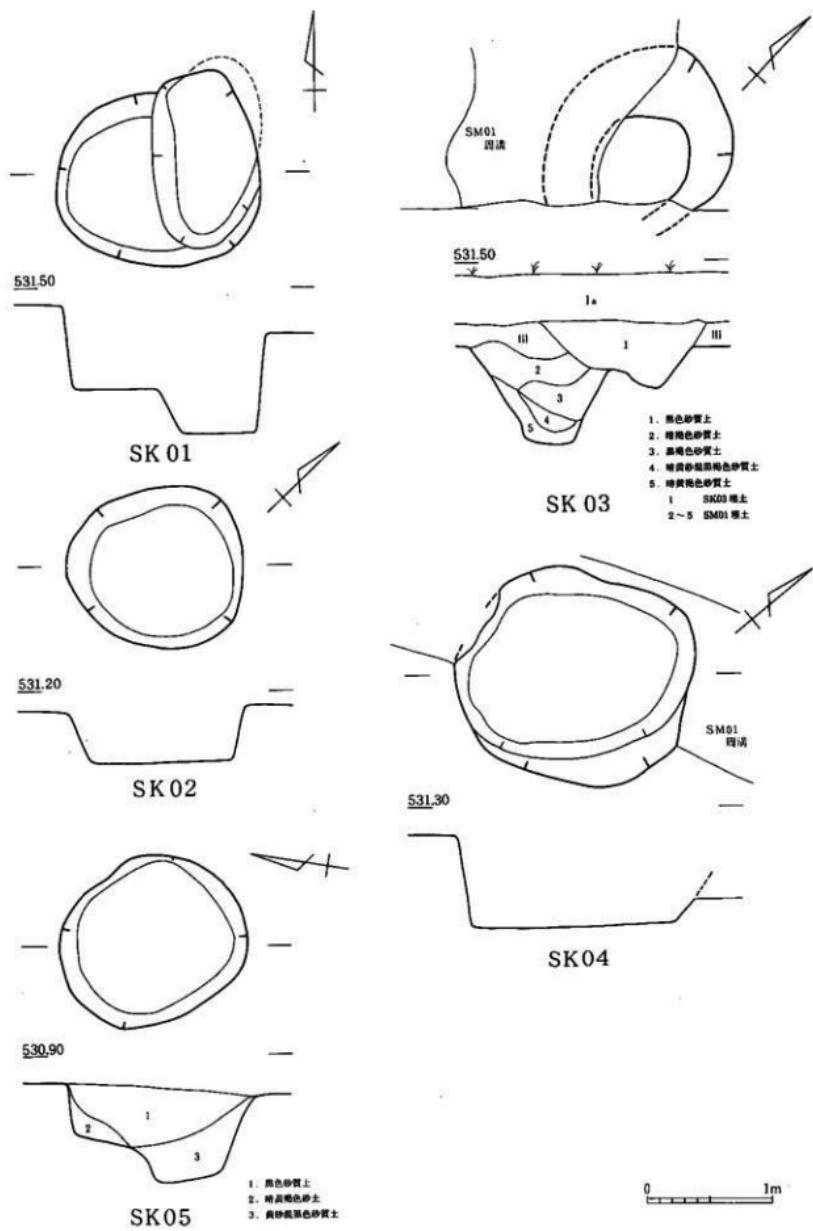
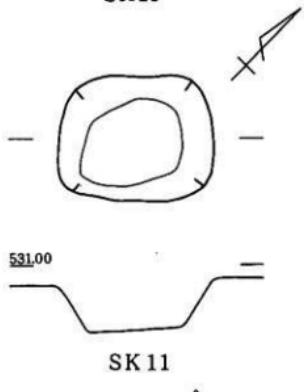
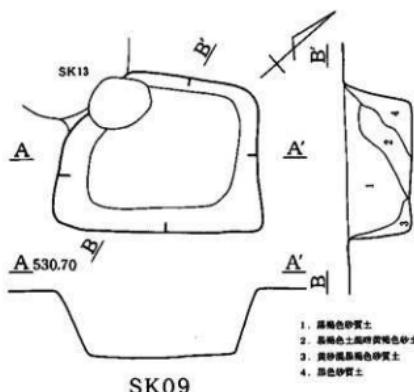
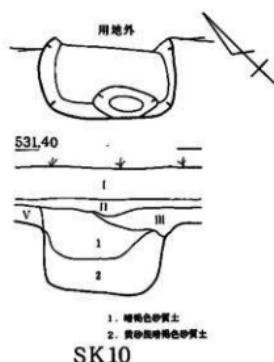
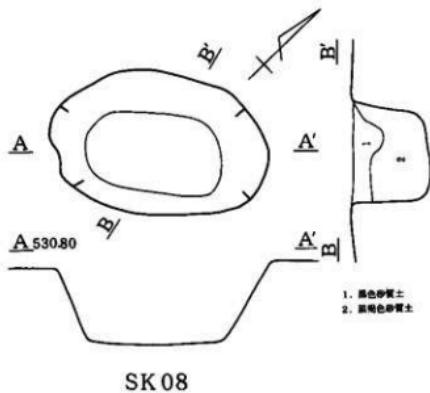
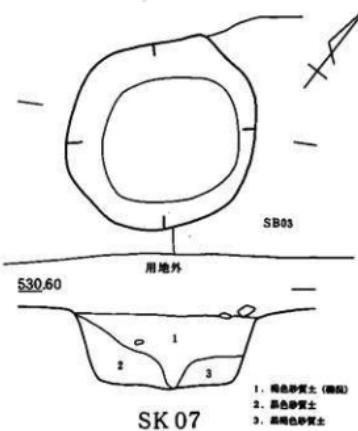
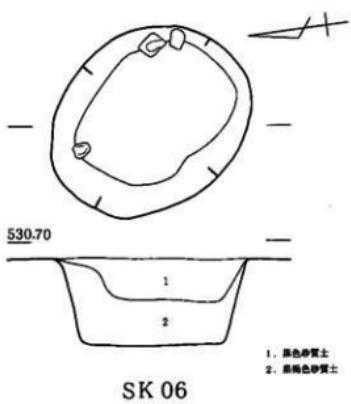


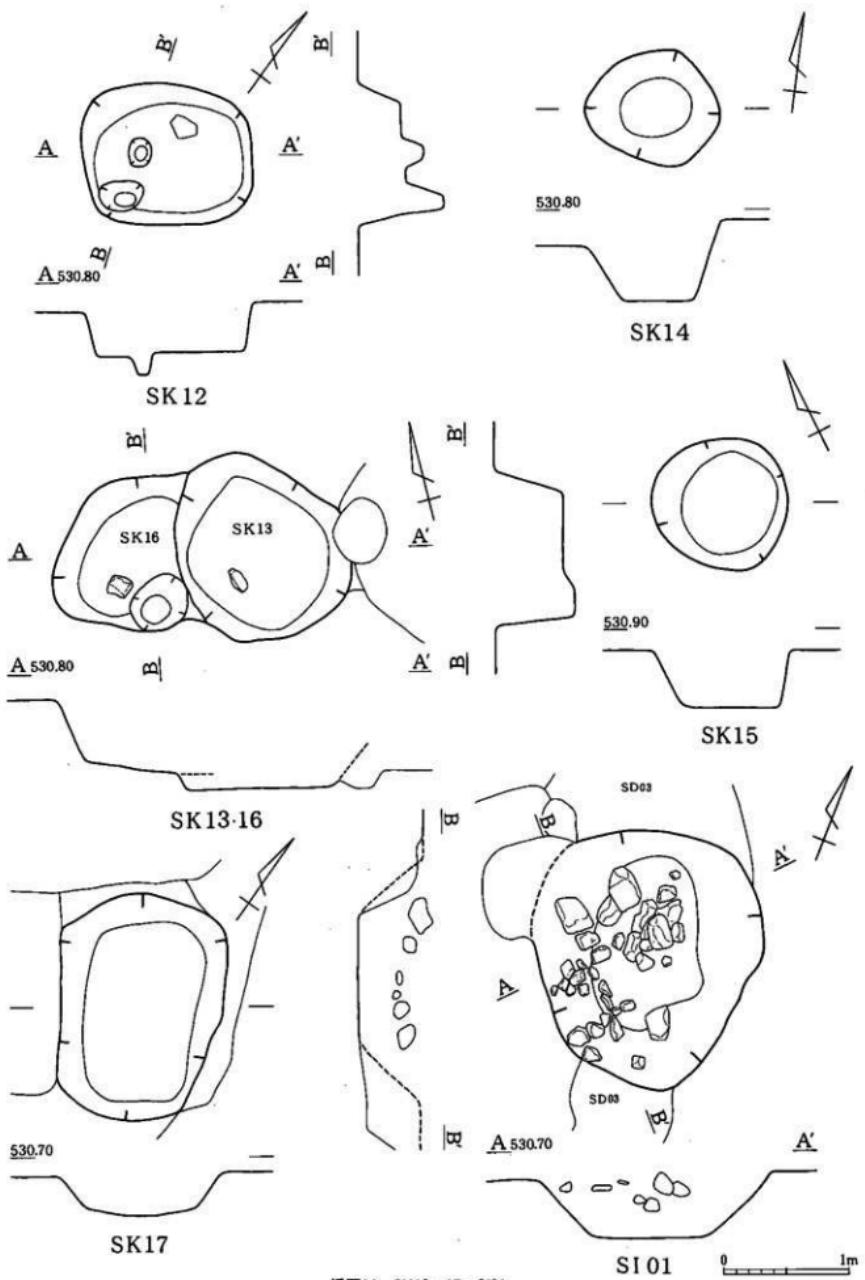
插圖11 SM03



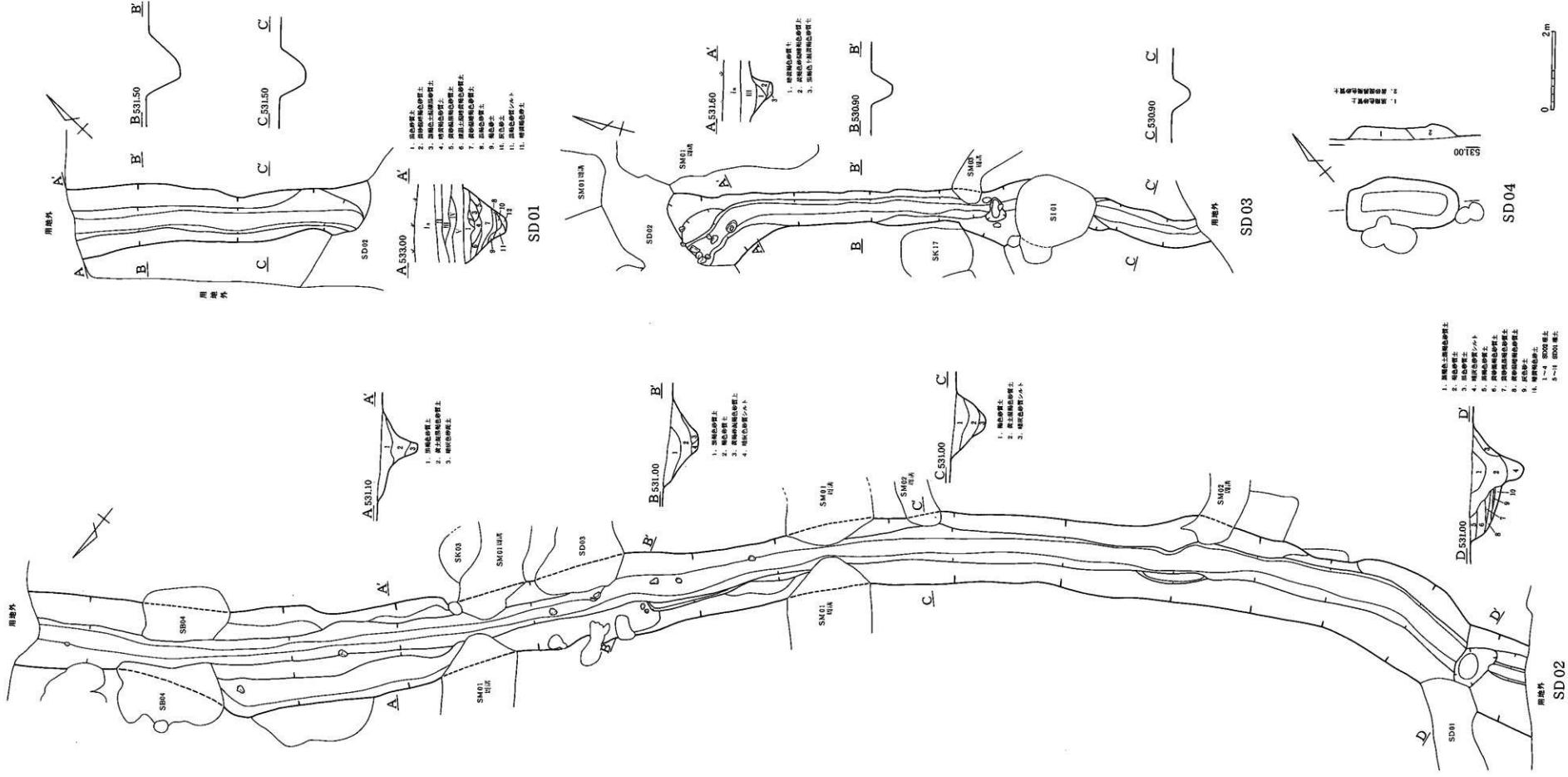
擇図12 SK01~05



插図13 SK06~11



插図14 SK12～17・SI01



形を呈する 【壁】 やや緩やかな立ち上がりを示す 【埋土の状況】 レンズ状の堆積であり、自然埋没と考えられる 【その他】 【墳丘】 不明 【外表施設】 不明 【付属施設】 なし 【時期】 弥生時代後期前半と考えられる。以下、特記されるものについて記述する。

#### (4) 竪穴（挿図7）

S B04は当初 S D02の埋土下部として平面で把握していたが、S D02調査中に側壁で立ち上がりが把握され、別造構とした。土坑より規模が大きいため竪穴としたが、底面は深さが一定しておらず、複数の造構を一つとした可能性がある。新旧関係は不明であるが、出土遺物から S D02に切られると考えられる。「皇宋通宝」1枚と錢文不明の錢貨（「□□通宝」）1枚が出土した。埋土中に炭が少量含まれる。

#### (5) 土坑・土葬墓（挿図12～14、第2図）

S K05～SK16はBN～BU・08～12の一画に集中する。平面形は不整円形を呈するSK05～SK07・SK11・SK13～SK15、長方形を呈するSK09・SK10・SK12、概ね橢円形を呈するSK08・SK16がある。規模は長辺95～190cm、短辺90～162cm、深さ14～80cmであるが、壁は直ないし急な立ち上がりを示す。SK10はV層上面から掘り込まれる。

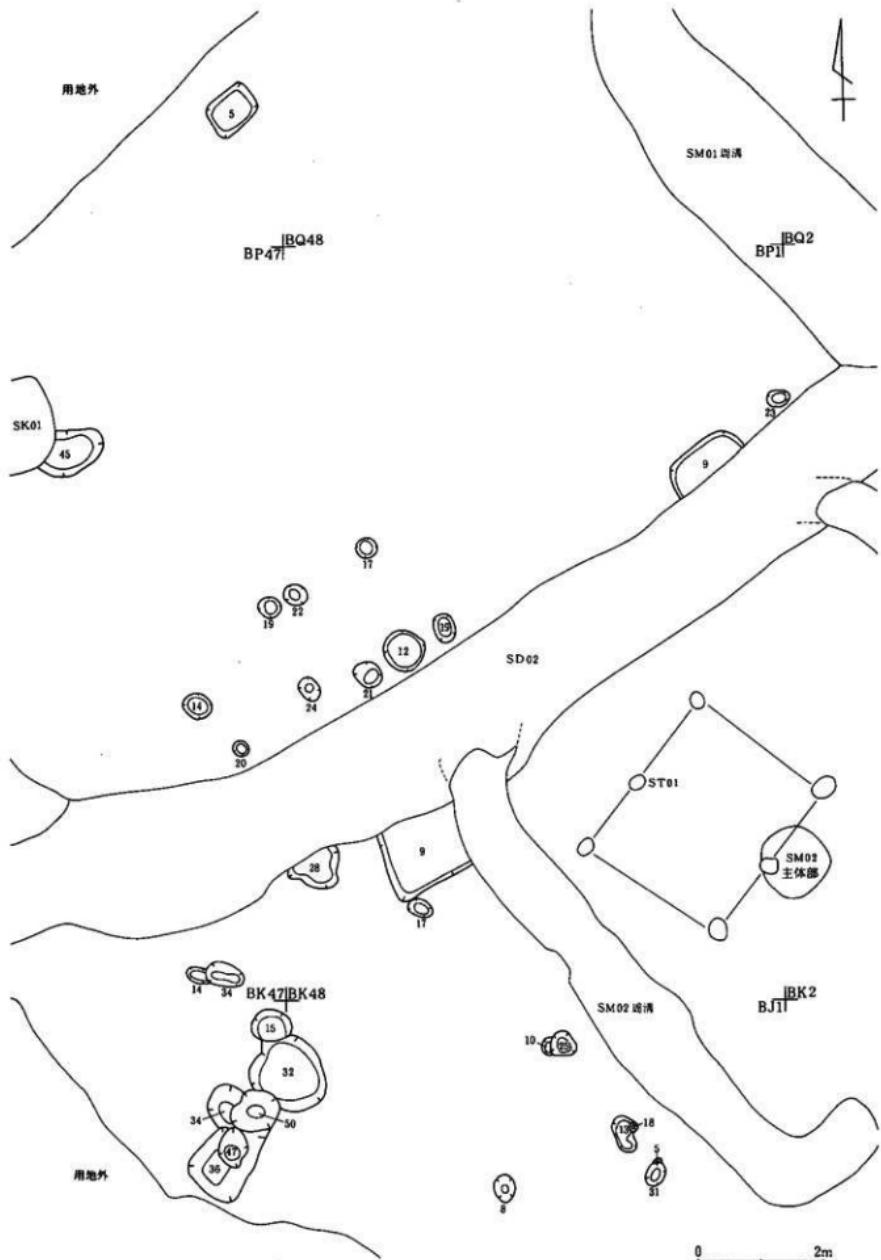
S K05から青磁輪花碗・陶器四耳壺、SK06は青磁輪花碗・刀子？・不明鉄製品（第2図14）・鐵滓、SK07から不明鉄製品・繩羽口（ガラス化滓付着）、SK08から砾石（同11）、SK12から近世の陶器破小皿（灰軸）・「紹聖元宝」1枚・不明鉄製品・鐵滓、SK13から青磁輪花碗・陶器大平鉢・錢貨1枚（粉々で錢文不明）・鐵鎌と思われる鉄製品（同15）・鐵滓（ガラス化滓付着）、SK15から陶器大平鉢が出土している。一部近世に下るものもあるが、主に中世に比定されるものである。また、SK05～SK09・SK12・SK13からは炭が微量ないし少量出土している。副葬されたと考えられる錢貨を伴うことから、SKのうちSK05～SK16は土葬墓群と考えられる。

#### (6) 溝址・溝状址（挿図15）

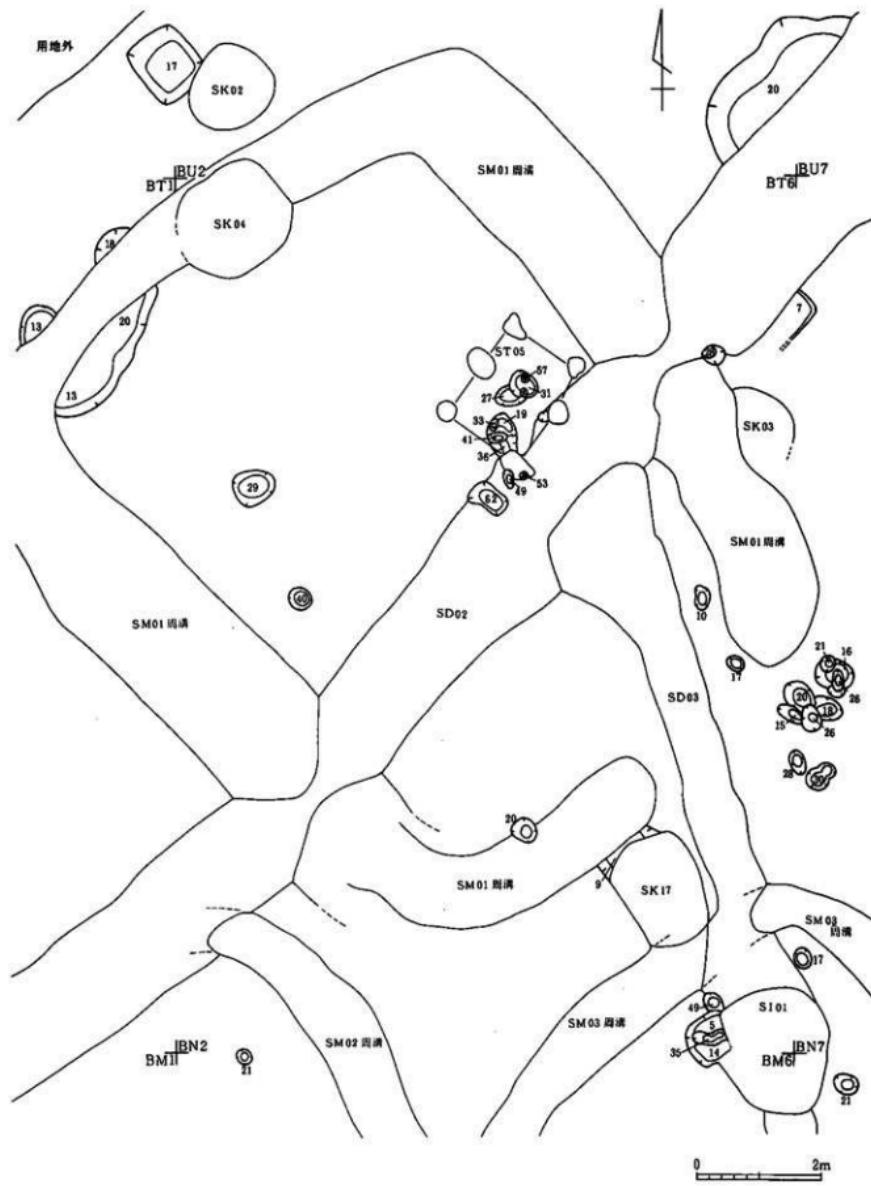
S D01は平面検出では S D02に切られるが、重複部分は淵となっている。S D02の南東側には S D01は延びていないことから、両者は一体的に機能していたと考えられる。S D02は断面形が方形周溝墓周溝と類似するが、水が流れた痕跡があることから人工的な井水と判断した。出土遺物から中世に開削され近世まで機能していたか、近世に開削されたものと考えられる。S D02とS D03の新旧関係は把握できていないが、S D02北西側にはS D03が検出できなかったことから、S D02から分水されたものと考えられる。なお、S D03はV層上面から掘り込まれる。

S D02・S D03重複部分のBS05付近には、造構として把握できなかったものの、焼け礫（花崗岩・変成岩）と陶器壺片がまとまっていた。S D02からS D03への分水施設の可能性も考えられる一方、S D03が火葬墓と考えられるSI01に切られることから、この礫等もS D02・S D03より新しい火葬墓である可能性もある。SI01とBS05付近焼け礫は礫径を異にすることから即断はできないが、後者とみて良かろう。

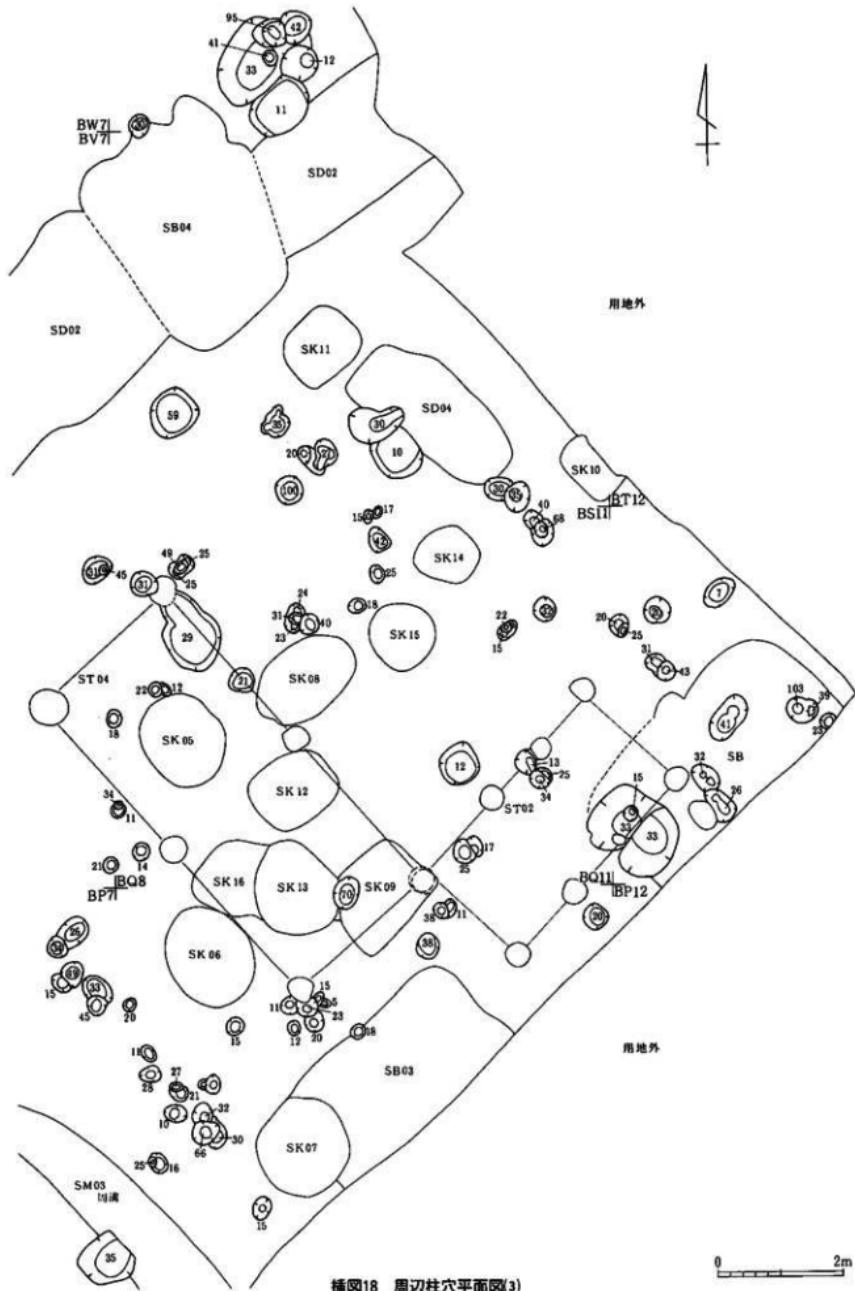
以上の点からS D02の開削年代については中世の可能性が高く、近世まで機能していたと考えられる。



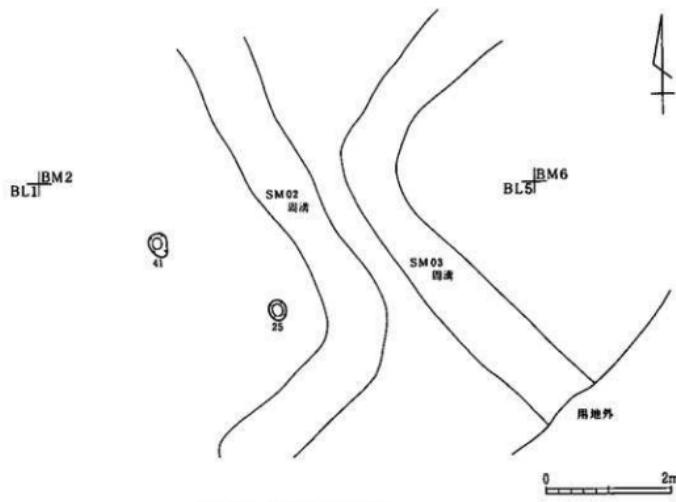
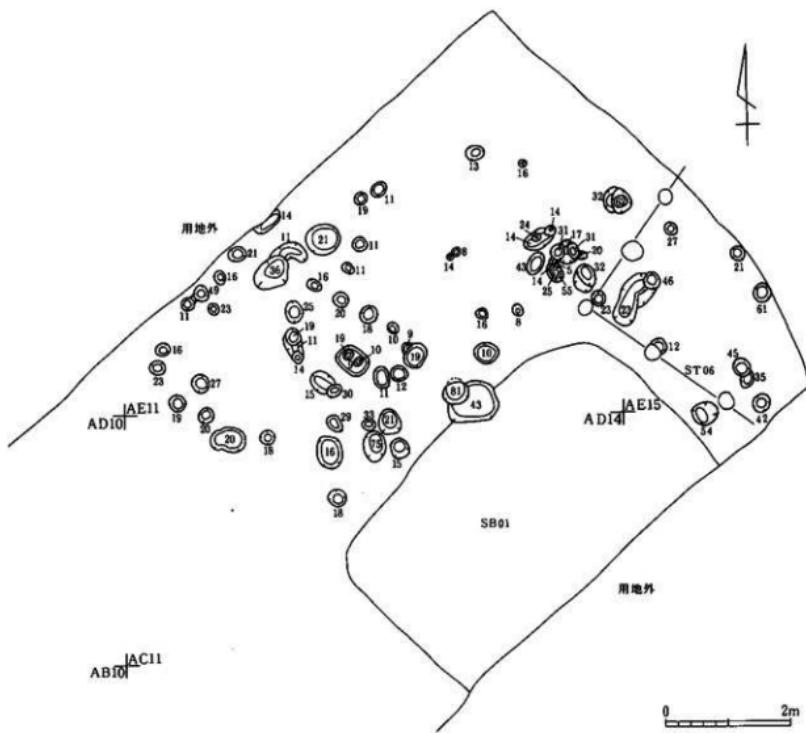
插図16 周辺柱穴平面図(1)



挿図17 周辺柱穴平面図(2)



插図18 周辺柱穴平面図(3)



挿図19 周辺柱穴平面図(4)

(7) 墓石（挿図14）

S I 01はS D03を切る。径10~30cm大の礫で構成される。中央やや北側に方形に組んだように礫があり、礫間から炭が出土した。礫は少々焼けている。検出状況から火葬墓と考えられる。

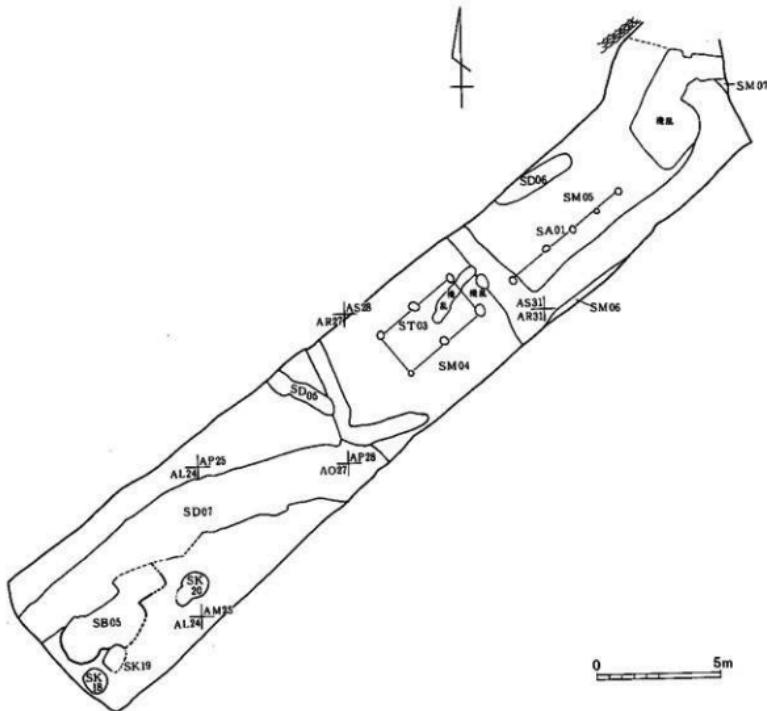
(8)周辺柱穴（挿図16~19）

S B01付近と、S B02・S B03周辺に小柱穴の集中がみられる。前者のうちS T06重複部分では断面でも把握できなかったが、堅く締まったタタキ状の部分があった。また、S B01北西脇には径20~30cm、深さ20cm前後の小柱穴が20~60cmほどの間隔で方形に並ぶ部分がある。この部分に上部を削平された整穴住居址があった可能性も考えられ、具体的には壁柱穴あるいは間仕切穴の可能性がある。

周辺柱穴の中には、縄文時代後期の粗製深鉢や打製石斧（硬砂岩製）、近世の小皿等陶器片、鉄滓等の出土したものがある。

(9)遺構外出土遺物

前述のS B01等から混入出土した遺物の他、縄文時代中期前葉かと考えられる深鉢片、灰釉陶器一長



挿図20 第三地点 遺構全体図

頸壺、中世の内耳鍋、近世の陶器－中碗（天目形／鉄輪）・大鉢（灰輪）・土鍋（透明輪）・花生？（鉄輪）、黒曜石製の石鎚（第2図13）等が出土した。殊に、B K47区では黄褐色砂質土下の黒色土から縄文時代後期後葉の四線文系土器が出土した。口縁部は波状を呈し、肩状圧痕文が付される。

#### 第4節 第Ⅲ地点（略号H B A 656）

掘立柱建物址1棟、方形周溝墓4基、柵列・一本柱列1基、竪穴1基、土坑・土葬墓3基、溝址・溝状址3条等を調査した（挿図20）。調査時には遺構略号は使用していなかったが、整理作業時に後年度の調査分と整合させるため、略号を付け直した。このため、調査時のなお溝址4はS D07に変更した。

##### (1)掘立柱建物址

###### ①S T03（挿図21）

【検出位置】A R29付近 【形態】2間×1間の側柱建物址 【主軸方向】N50° E 【規模】3.7m×1.9m 【柱間間隔】桁1.85m×梁1.9m 【床面積】7.0m<sup>2</sup> 【重複関係】SM04と重複する 【調査所見】南東側へ延びないことは確実であるが、北西側に延びる可能性は少なからずある。第I地点で調査された掘立柱建物址の状況から、側柱建物址の可能性が高いと判断した 【柱穴】径20～45cm、深さ16～47cm 【出土遺物】なし 【時期】詳細時期は不明である。

##### (2)方形周溝墓

本調査区は市道路線幅に限定されたため、方形周溝墓については判断がつかない部分があった。SM04とSM05が周溝を共有し断面でも新旧関係が把握されたこと、SM05南東辺周溝の断面観察の結果からSM05周溝のさらに南東側に別遺構の埋土が確認されたこと、SM05北東側周溝ではさらに北東側に底面が一段高い部分が確認されたことから、SM05南東溝と北東溝についても方形周溝墓があると判断された。そこで前者をSM06、後者をSM07とした。周溝が共有されるため、記述に重複があることを付言しておく。

###### ①SM04（挿図21）

【検出位置】A R29付近 【重複】SM05を切り、S T03・S D05・S D07と重複する 【調査所見】調査区外にかかり、1／2程度を調査したと考えられる。新旧関係は断面観察の結果による 【規模】周溝内法×7.3m、周溝外法×9.0m 【内法面積】— m<sup>2</sup> 【形態】台形に近い不整方形？ 【主軸】N32° E 【周溝】 【規模】幅60～125cm、深さ20～54cm 【断面形】V字および逆台形 【土橋部】南東辺中央に設けられる 【埋土の状況】レンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる 【出土遺物】遺物量は僅少。SM04・SM05周溝から弥生時代後期壺、甕が出土した 【埋葬施設】【有無】不明 【その他】 【墳丘】断面を見る限り観察できず。地表から浅い位置で遺構が検出されていることから、上部は削平を受けているものと思われる 【外表施設】不明 【付属施設】不明 【時期】重複関係から弥生時代後期前半以降と考えられる。

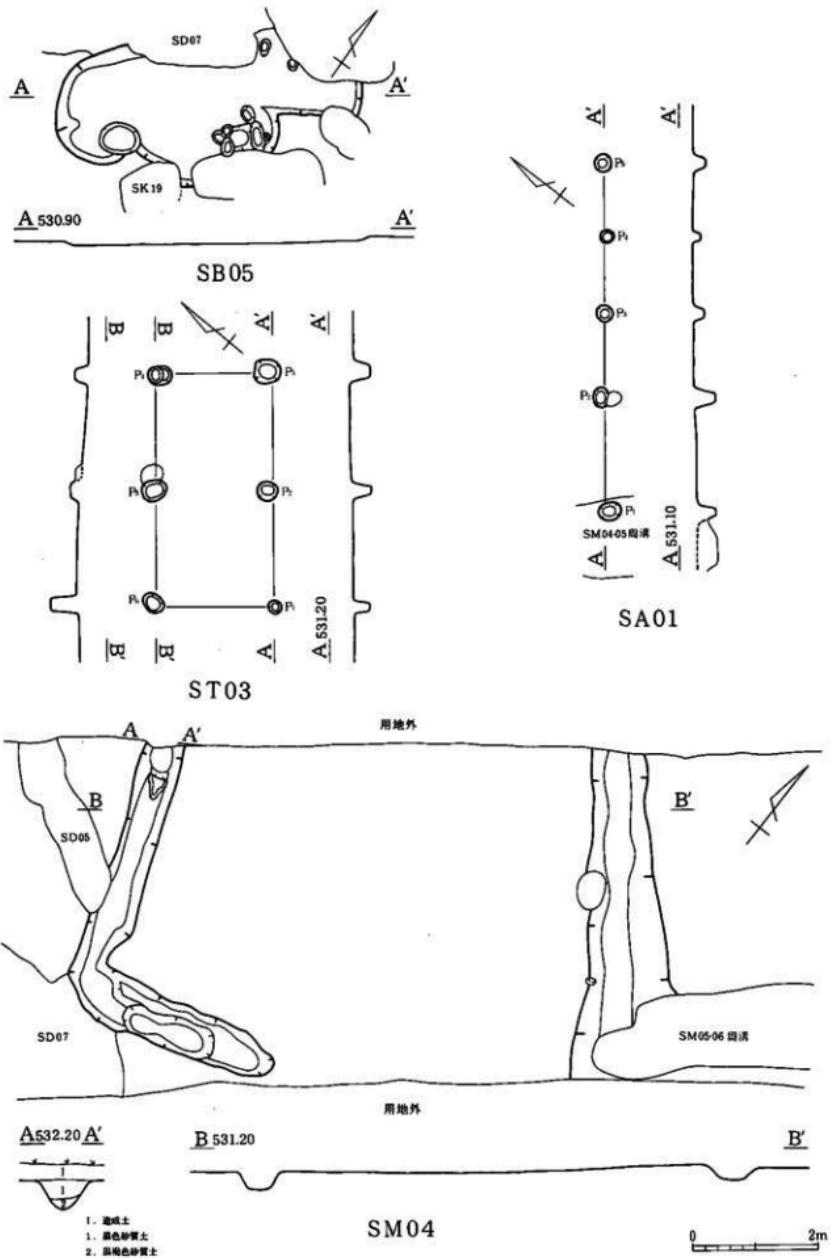


插图21 SB05、ST03、SA01、SM04

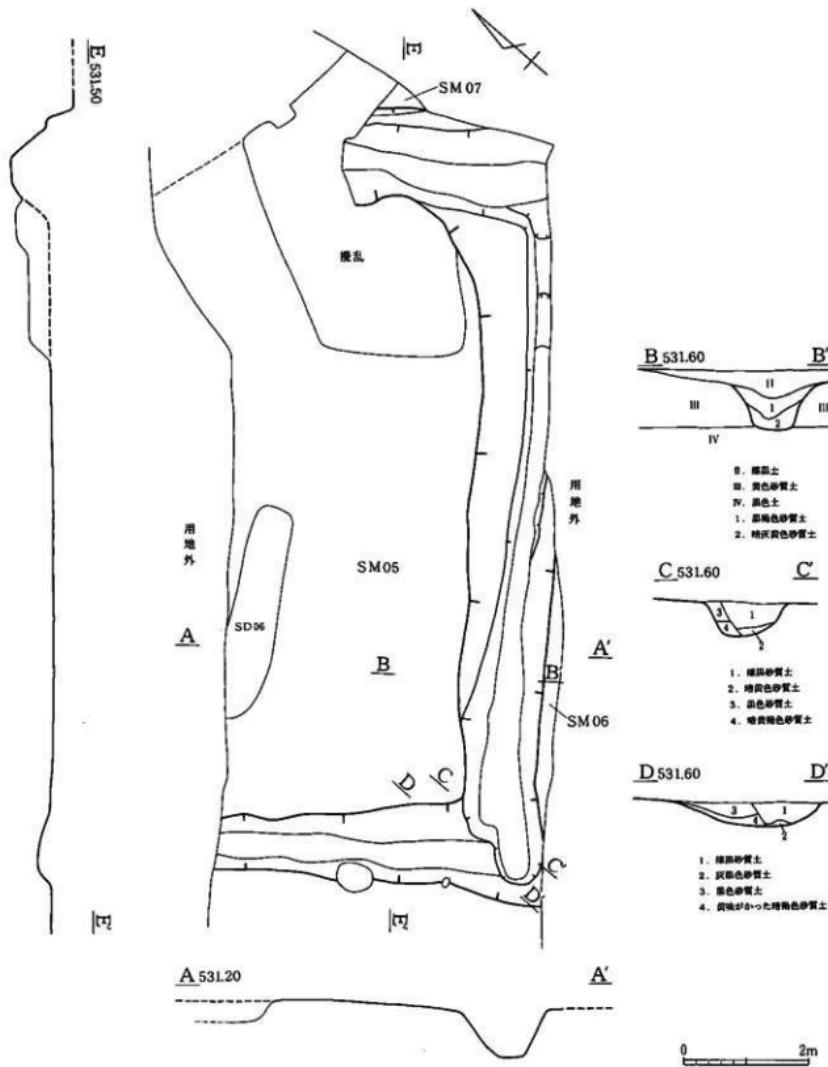


插圖22 SM05~07

#### ② S M05 (挿図22、第2図21・22)

【検出位置】 A U32付近 【重複】 S M04・S M06に切られる。また、S A01・S D06と重複する【調査所見】 北西側は調査区外にかかる。S M04・S M06・S M07と周溝を共有し、S M04・S M06との新旧関係は断面で把握された。なお、S M07との新旧関係は搅乱に纏められ、把握できず。重複の故もあるが、南東辺(S M05・S M06)周溝が幅広く深い 【規模】 周溝内法10.0×-m、周溝外法12.3×-m 【内法面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】 方形を呈すると考えられる 【主軸】 (N35° W) 【周溝】 【規模】 幅90~150cm 深さ20~76cm 【断面形】 逆台形 【土橋部】 確認できず 【埋土の状況】 レンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる 【出土遺物】 遺物量は僅少。S M05・S M04周溝から弥生時代後期壺・甕、S M05・S M06周溝から弥生時代後期前半の壺・甕や硬砂岩製横刃型石器（他に混入遺物として、縄文一硬砂岩製打製石斧、近世の陶器片）、S M05・S M07周溝から弥生土器甕（他に混入遺物として、縄文時代中期の土器片と微細剥離痕のある黒曜石製剥片）が出土した 【埋葬施設】 【有無】 不明 【その他】 【墳丘】 断面では観察できず 【外表施設】 不明 【付属施設】 不明 【時期】 弥生時代後期前半と考えられる 【備考】 S M05・S M07周溝から炭が微量出土した。

#### ③ S M06 (挿図22、第2図21・22)

【検出位置】 A S33付近 【重複】 S M05を切る 【調査所見】 大半が調査区外にかかるが、上述のとおり、S M05南東辺周溝の断面観察の結果からS M05周溝のさらに南東側に別遺構の埋土が確認されたことから、方形周溝墓と判断した 【規模】 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m 【内法面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】 方形を呈すると考えられる 【主軸】 北西辺周溝の方向N52° E 【周溝】 【規模】 幅110~130cm、深さ62~80cm 【断面形】 ほぼ逆台形を呈する 【土橋部】 不明 【埋土の状況】 自然堆積と考えられる 【出土遺物】 遺物量は僅少。S M06・S M05周溝から弥生時代後期前半の壺・甕や硬砂岩製横刃型石器（他に混入遺物として、縄文一硬砂岩製打製石斧、近世の陶器片）が出土した 【埋葬施設】 【有無】 不明 【その他】 【墳丘】 不明 【外表施設】 不明 【付属施設】 不明 【時期】 重複関係から弥生時代後期前半以降と考えられる。

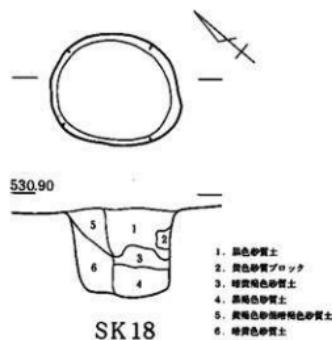
#### ④ S M07 (挿図22)

【検出位置】 A W35付近 【重複】 S M05と重複する 【調査所見】 大半が調査区外にかかる。また、S M05との重複部分には搅乱があり、新旧関係の把握はできなかった 【規模】 周溝内法-×-m、周溝外法-×-m 【内法面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】 不明 【主軸】 南西辺周溝の方向N38° W 【周溝】 【規模】 幅- cm、深さ44cm 【断面形】 逆台形を呈すると考えられる 【土橋部】 不明 【埋土の状況】 不明 【出土遺物】 遺物量は僅少。S M07・S M05周溝から弥生土器甕（他に混入遺物として、縄文時代中期の土器片と微細剥離痕のある黒曜石製剥片）が出土した 【埋葬施設】 【有無】 不明 【その他】 【墳丘】 不明 【外表施設】 不明 【付属施設】 不明 【時期】 他の周溝墓と同時期の弥生時代後期前半以降と考えられる 【備考】 S M07・S M05周溝から炭が微量出土した。

#### (3) 墓列・一本柱列

### ① S A01 (挿図21)

【検出位置】 A T32付近 【形態】 4間以上 【主軸方向】 N52° E 【規模】 5.6m以上 【柱間間隔】 1.2+1.2+1.35+1.8+…m 【重複関係】 S M05 【調査所見】 S A01は S T03P 1～P 3と同一直線上にあり、同じ建物を構成する可能性もある。ただし、S A01北西側に組み合う柱穴はないことから、S T03とは別遺構と判断した。S M05・S M06周溝との重複で南東側の柱穴が検出できなかった可能性もある。【柱穴】 径20~30cm、深さ15~35cm 【出土遺物】 なし 【時期】 詳細時期不明である。



### (4) 柱穴

#### ① S B05 (挿図21)

検出当初は不整長方形のプランが把握されたが、掘り下げの結果、不整形の掘り方であることが判明した。S K19・S D07に切られる。底面まで浅く、壁の立ち上がりははっきりしない。

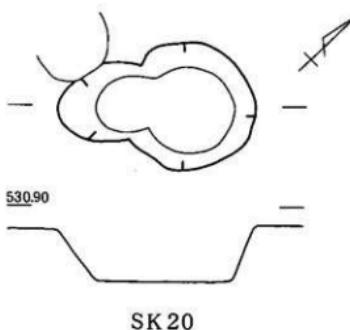
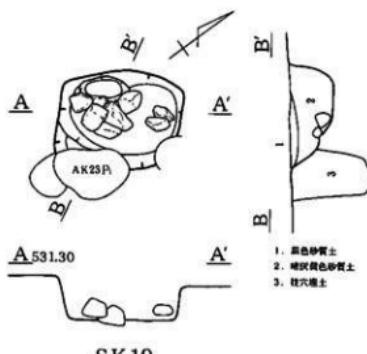
以下、特記されるものについて記述する。

#### (5) 土坑 (挿図23)

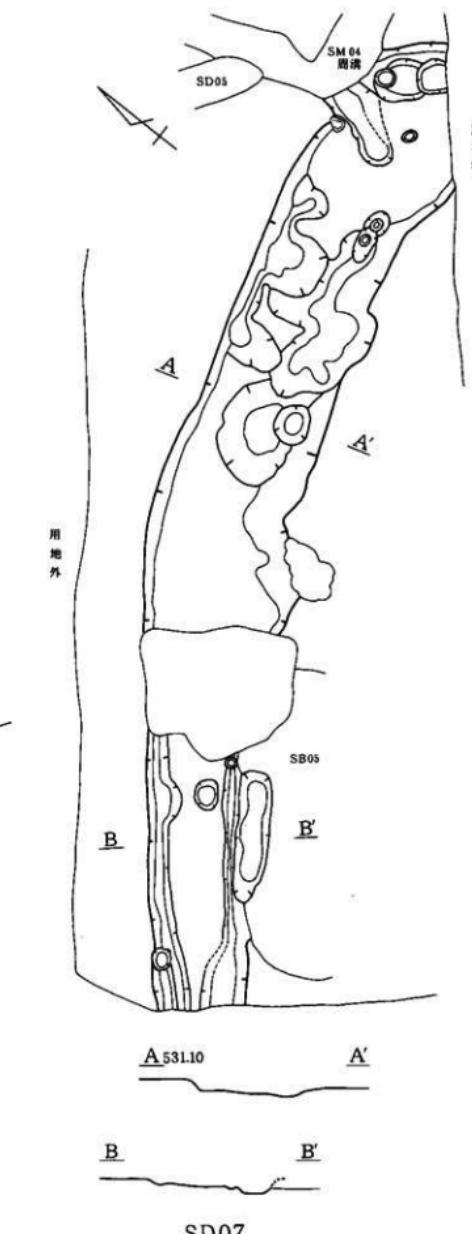
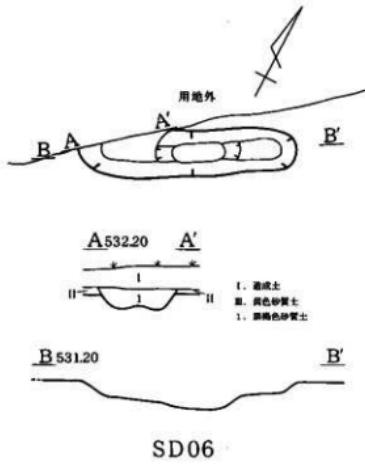
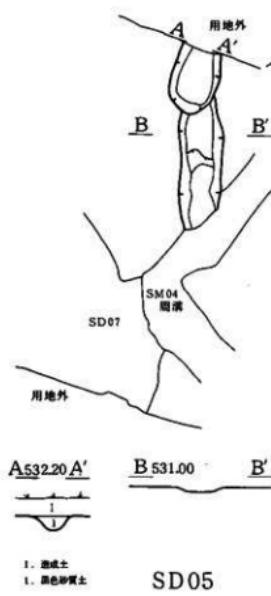
S K18からは陶器片と炭が微量出土した。ほぼ直に掘り込まれており、断面形態や埋土の状態から第I地点で調査された土葬墓との類似性が指摘でき、近世の土葬墓と考えられる。S K19は弥生時代後期の柱穴（AK23P 1）を切っており、10~30cm大の变成岩・花崗岩の角礫が底部にまとまって入っていた。埋土の2層は暗灰黄色砂質土と黒色砂質土が互層になっており、一気に埋め戻されたと考えられる。S K18と同様、形態や埋土の状態から、中~近世の土葬墓と考えられる。

#### (6) 溝状跡 (挿図24)

S D06は形態・埋土は方形周溝墓周溝と類似するが、弥生時代壺・甕の他、近世の陶器中碗（天目形／灰釉／瀬戸美濃系、第2図16）が出土しており、近世の遺構と考えられる。S D07は埋土黒褐色砂質土で、



挿図23 SK18~20



插図24 SD05~07



插図25 周辺柱穴平面図(5)

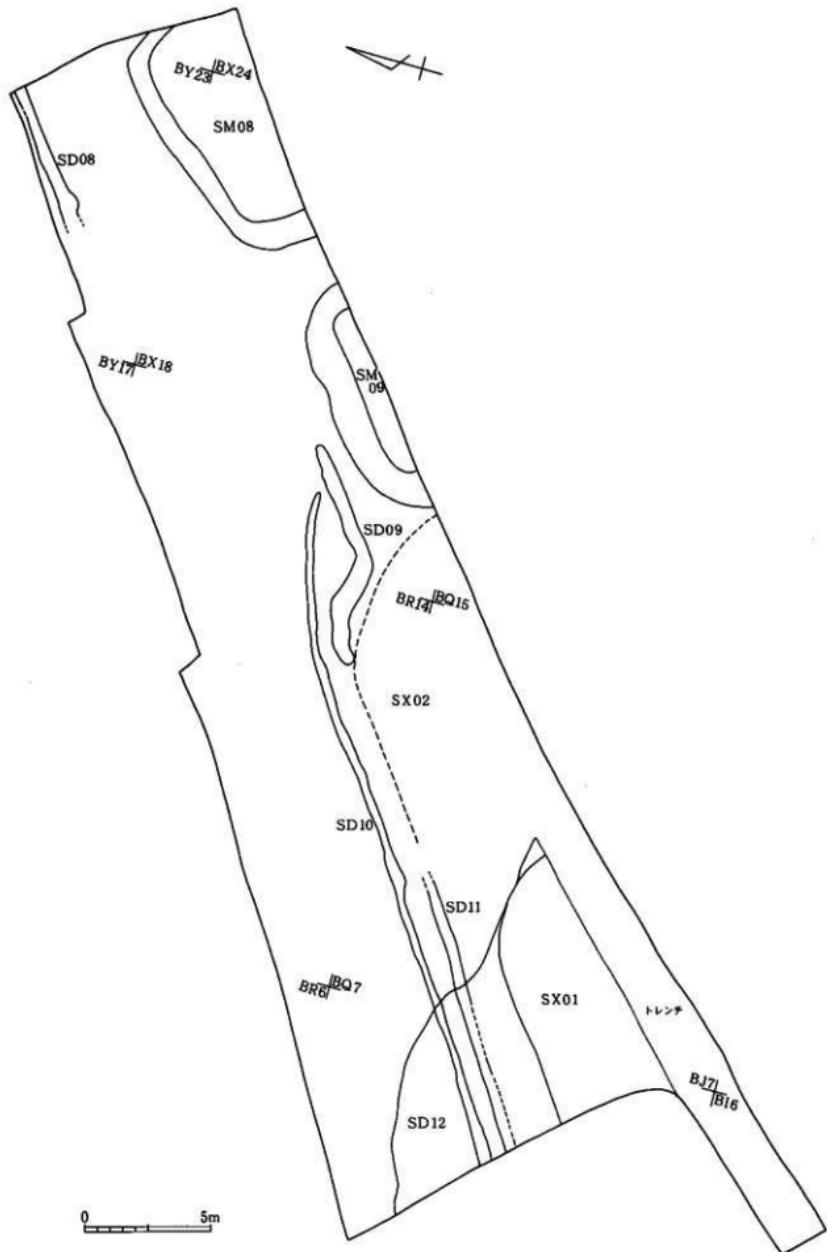


図26 第V地点遺構全体図

S B05を切る。南西側では内部に2~3条の細い溝状の凹凸があるが、北東側では不明瞭になる。また遺物出土も南西側が多く、北東側は少ない。北東側がやや低くなっている。南西から北東方向に引かれた井水と考えられる。出土遺物は、縄文時代中期後葉の摩滅した土器片、中世の内耳鍋、近世陶器・中皿（天目形／鉄軸）・擂鉢・碗（灰釉）・小皿（鉄軸）・中皿（志野釉）と磁器・碗、不明鉄製品・鉄滓があり、近世に開削されたと考えられる。

(7)周辺柱穴（挿図25、第2図17・18）

S A01より南西側に小柱穴が検出されている。3基の柱穴がほぼ等間隔に並ぶ部分はいくつか抽出でき、建物址等があったと考えられるが、路線幅が狭く詳細は不明である。埋土は黒褐色砂質土である。S K19と重複するA K23P1からは弥生土器（第2図18）が出土している。内面および頸部はナデ後ハケナデされ、外面胴下半はヘラミガキが施される。外面には煤が、内面におこげが付着している。S T03P3南東脇の小柱穴からは近世の陶器・小瓶（無高台／鉄軸、第2図17）・擂鉢が出土している。

小柱穴は一部弥生時代のものがあるが、大半は近世に位置づくものと考えられる。

(8)遺構外出土遺物

遺構外から、縄文時代中期後葉土器片、弥生時代壺・甕、近世陶器・碗（鉄軸・灰釉）・小鉢（灰釉）・中皿（灰釉）・擂鉢・大平鉢・甕、持砥石（仕上砥）が出土している。

## 第5節 第V地点（略号H B A 680-1）

方形周溝墓2基、水田址2面、溝址・溝状址5条等が調査された（挿図26）。

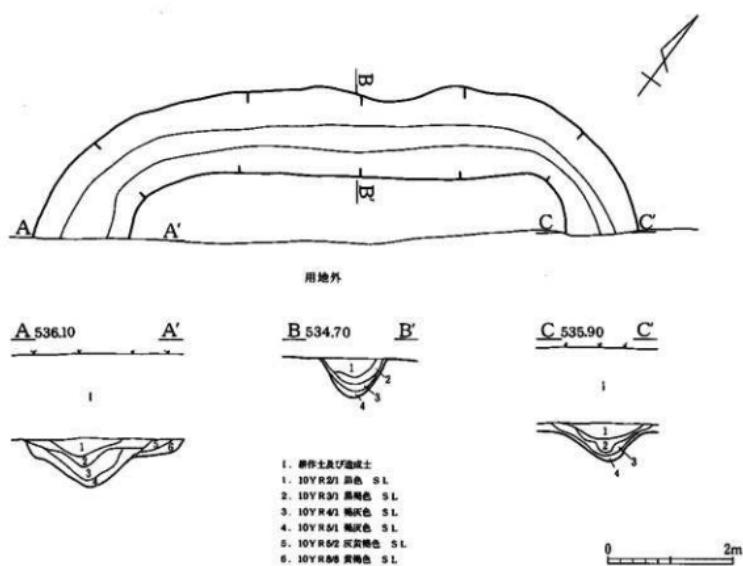
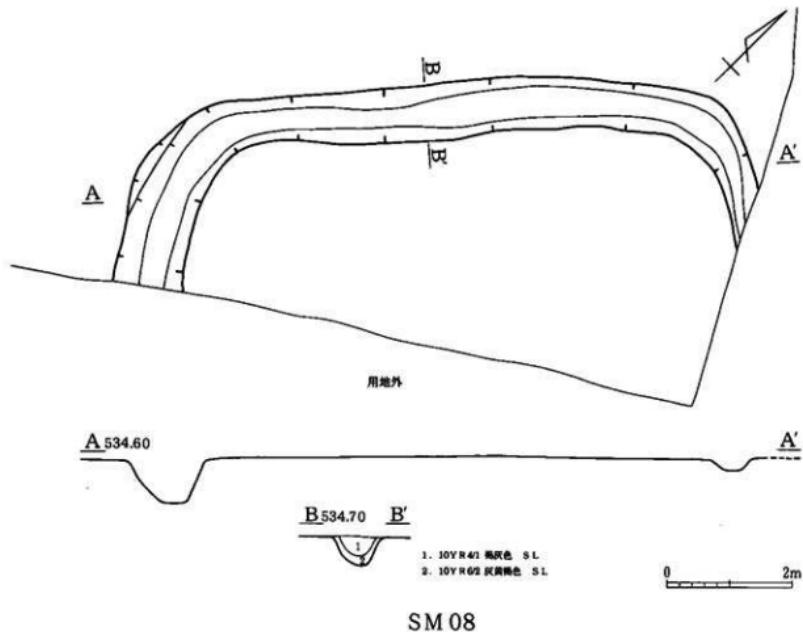
(1)方形周溝墓

①SM08（挿図27）

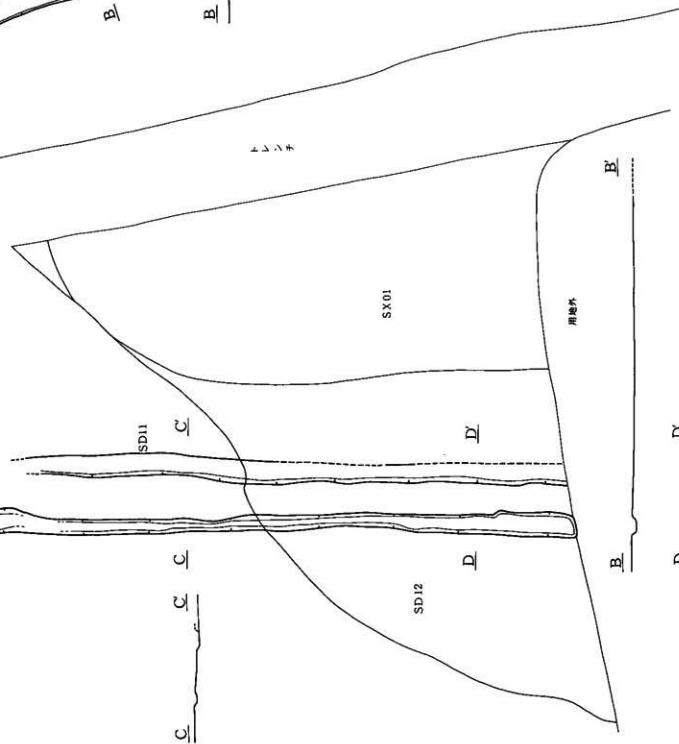
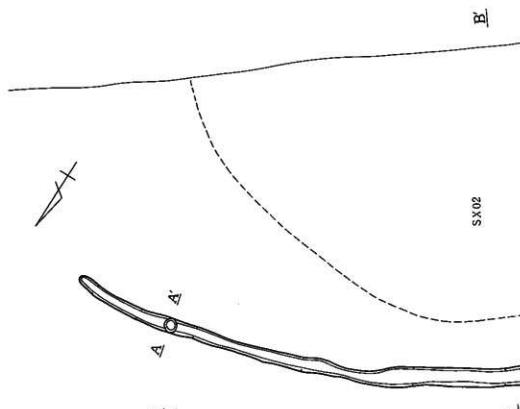
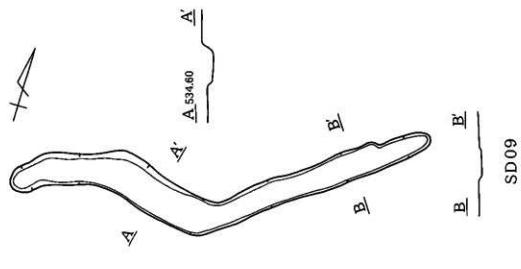
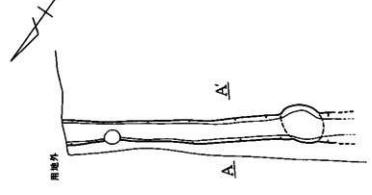
【検出位置】B X23付近　【重複】なし　【調査所見】大部分が調査区外にかかる。周溝の調査状況から、北側は上部を重機で相当削平している　【規模】周溝内法(8.9)×-m、周溝外法(10.6)×-m　【内法面積】- m<sup>2</sup>　【形態】方形を呈すると考えられる　【主軸】(N49° W)　【周溝】幅55~110cm、深さ9~73cm　【断面形】やや丸底に近い逆台形　【土橋部】不明　【埋土の状況】自然埋没と考えられる　【出土遺物】遺物量は僅少。弥生時代の壺・甕の他、混入遺物として縄文時代後期中葉の鉢片が出土　【埋葬施設】【有無】不明　【その他】【墳丘】断面で把握できず　【外表施設】不明　【付属施設】不明　【時期】SM09と接して構築されることから弥生時代後期のものと考えられるが、詳細時期は不明である。

②SM09（挿図27）

【検出位置】B T18付近　【重複】なし　【調査所見】大部分が調査区外にかかる　【規模】周溝内法(7.0)×-m、周溝外法(10.0)×-m　【内法面積】- m<sup>2</sup>　【形態】方形を呈すると考えられる　【主軸】



插図27 SM08・09



SD10-11 SX01-02

2m

北西辺周溝の方向N43° E 【周溝】〔規模〕幅95~140cm、深さ36~65cm [断面形]開いたV字形  
〔土橋部〕不明 [埋土の状況]レンズ状に堆積しており、自然埋没と考えられる [出土遺物]遺物  
量は僅少。弥生時代後期の斜走短線が施される壺の他、繩文時代後期かと考えられる粗製深鉢片が混入  
出土した [埋葬施設]〔有無〕不明 [その他] [墳丘]南西側調査区際断面で盛り土かと思われる  
部分が把握されたが、全体の把握までには至らず [外表施設]不明 [付属施設]不明 [時期]弥生時代後期と考えられるが、詳細時期は不明である。

#### (2)水田址

##### ① S X01 (挿図28、第4図45)

造成土直下、S X02上部で検出された。耕土中から磁器-瀬戸系、陶器-大瓶(透明釉)、鉄釘・鉄鎌(第4図45)の他、繩文時代後期後葉の摩耗著しい土器片が出土した。また、床土中からは、磁器-中碗(染付/透明釉/肥前系)、陶器-小碗(灰釉/瀬戸美濃系)・中碗(腰張形/灰釉/瀬戸美濃系)・同(鉄釉/瀬戸美濃系)・小皿(灰釉/産地不明)・土鍋(灰釉/産地不明)、角頭釘、弥生土器壺小片が出土した。出土遺物から、19世紀以降の水田址と考えられる。

##### ② S X02 (挿図28、第4図46)

S X01の下部で検出された。SD10・SD11は本址と同一面で検出され、しかも本址床土の肩はSD11西側肩と一致する。こうした状況から、SD10・SD11と同時期の水田址と考えられる。SD10・SD11間は畦畔で、把握できなかったもののSD11東側にも畦畔があったと考えられる。なお、本址の床土中には耕作時の多数の足跡が残されていた。

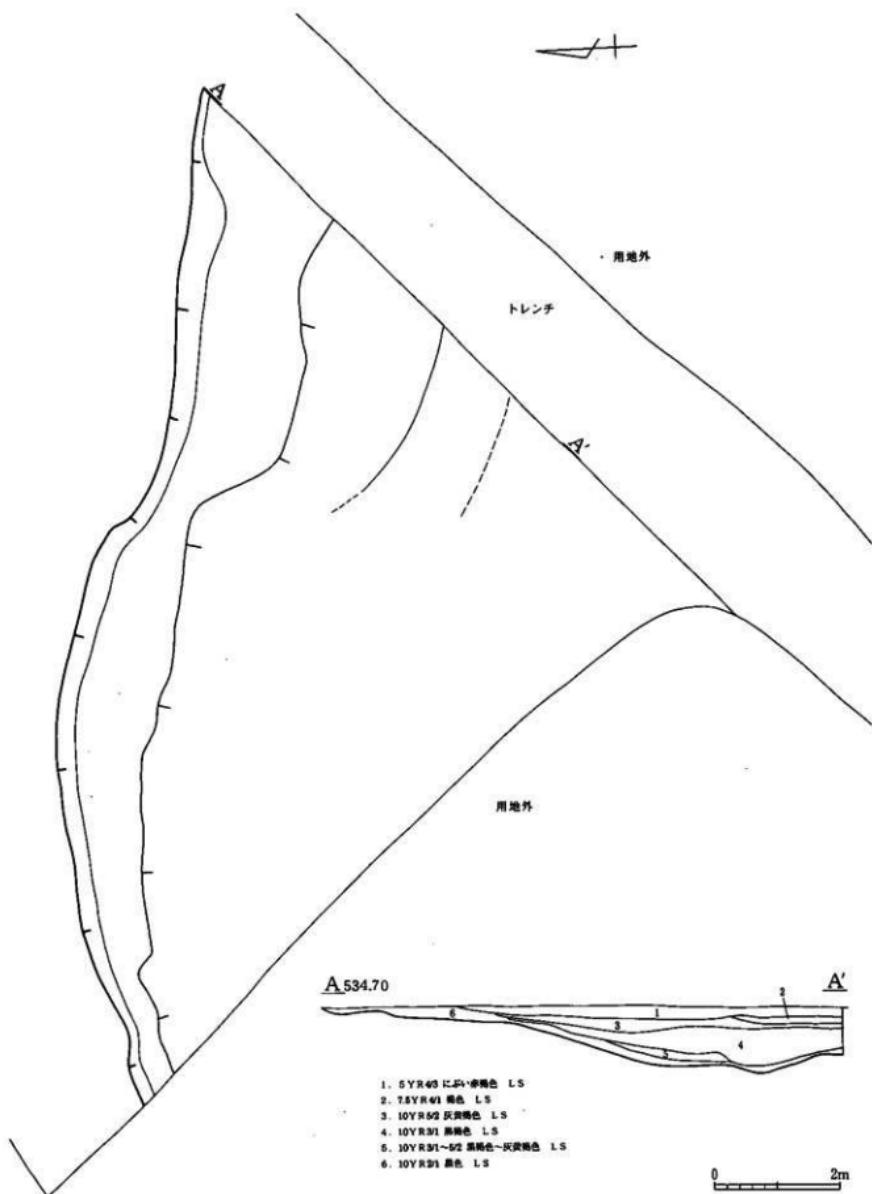
耕土中より磁器-水滴(豆腐形/染付/透明釉/型押/肥前系)、陶器-中碗(鉄釉/瀬戸美濃系)・小皿(角皿/灰釉/瀬戸美濃系?)・中皿(灰釉/京・信楽系)・小鉢(丸形鉤縁/灰釉/瀬戸美濃系)・仏花瓶(鉄釉/瀬戸美濃系)、ロクロ系土師器-壺A、灰釉陶器-碗、弥生土器壺、角頭釘・不明鉄製品(第4図46)、鉄鋤が出土した。

出土遺物より近世の水田址と考えられる。

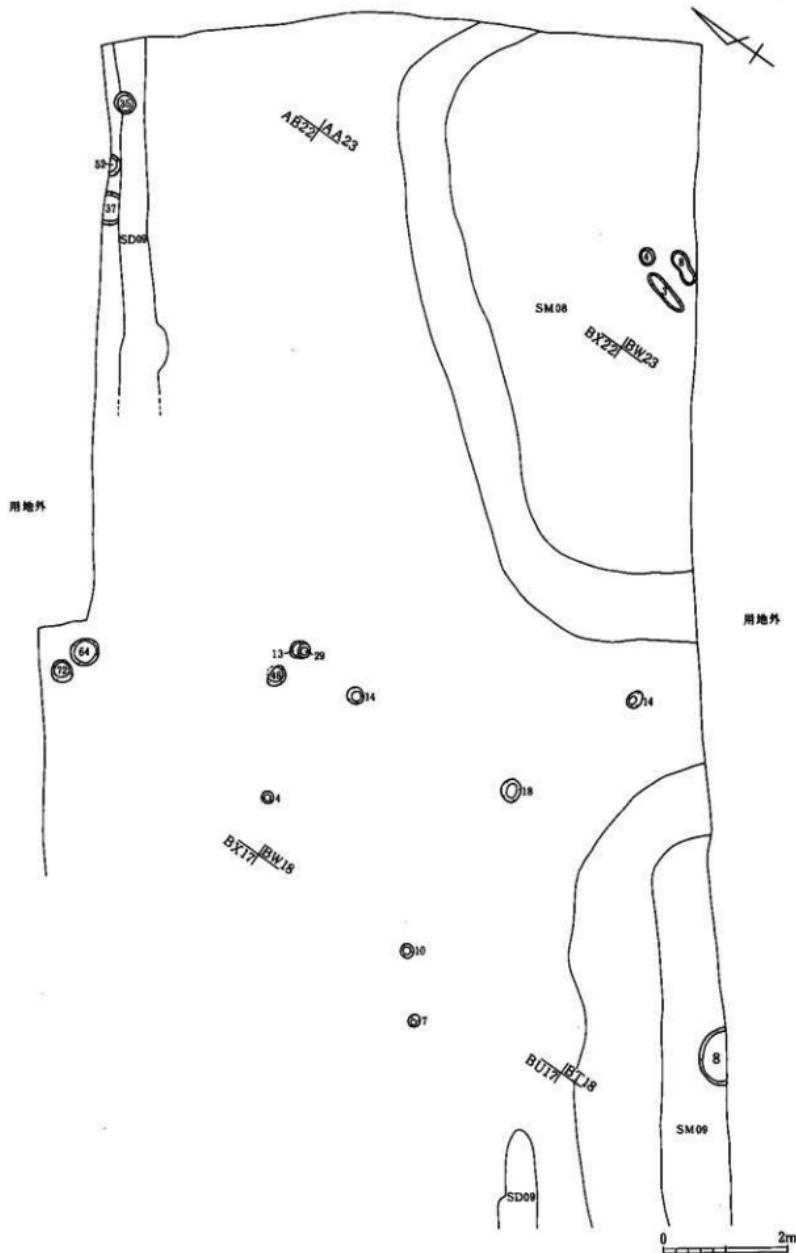
#### (3)溝址・溝状址 (挿図28・29、第3図25・26)

SD08は中央部分が深くなっている、検出位置等から暗渠ではないかと思われる。陶器小碗(丸形/鉄釉/瀬戸美濃系)が出土した。SD10・SD11は埋土がいずれも白色の細かい砂で、平行して検出されたこと、また、底面の深さもほぼ揃うことから、同時期に掘り込まれかつ一体的に機能していたものと考えられる。具体的には上述の通りS X02と同時期の水路で、両者の間の部分は畦畔であったと考えられる。SD10・SD11とともに底面は南西側が北東側よりも高く、南西側から北東側に向かって水が流れると考えられる。なお、SD09はSD10と近接して検出されたが、SD11より幅広で埋土が異なることから、別造構と判断した。

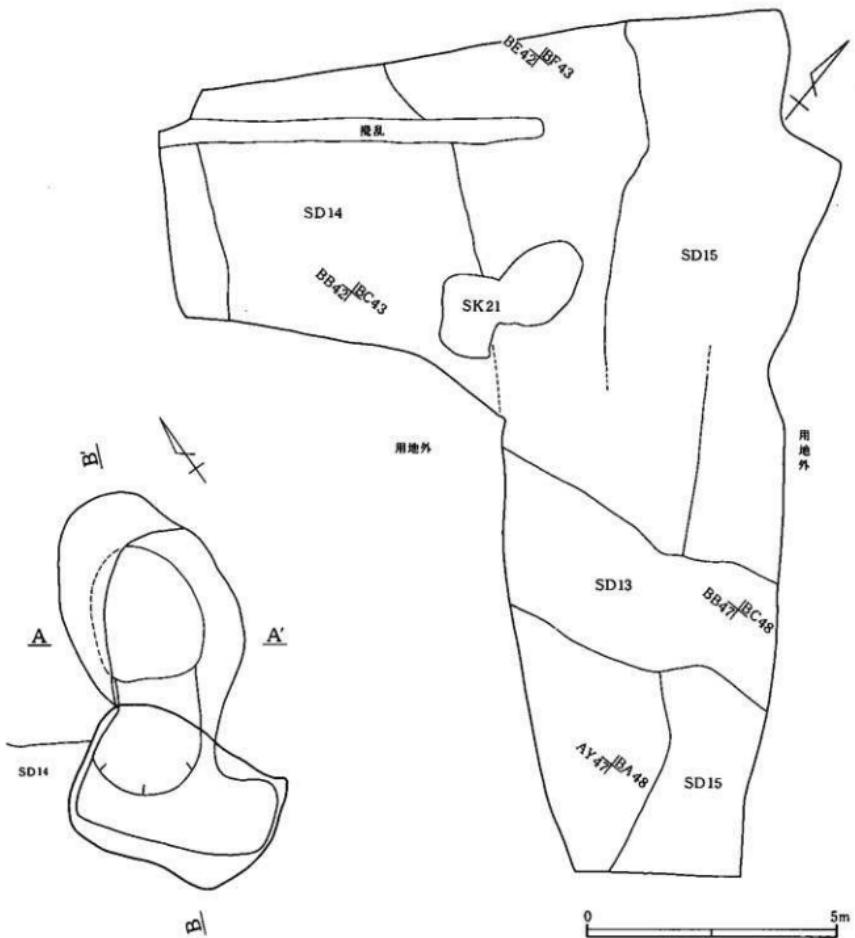
SD12はS X02下部で検出された。調査区外にかかり幅は不明であるが、8m程と考えられる。自然埋没と考えられる埋没状況を示している。底部レベルを比較すると東側が低いが、埋土に混入していた礫の大きさや割合はほぼ均等で、水が流れた痕跡が見いだせないことから、区画施設として掘り込まれ



挿図29 SD12



插図30 周辺柱穴平面図(6)



插図31 第VII地点遺構全体図、SK21

た可能性が高い。縄文時代中期後葉深鉢片、弥生時代後期前葉壺・甕片、平安時代のロクロ系土師器皿、中世の内耳鍋、近世の陶器中皿（灰釉／瀬戸美濃系？）が出土した。ロクロ系土師器皿（第3図25・26）の製作年代は丸石2号窯併行期かと考えられる。出土遺物や形態、それに造構の新旧関係から、平安時代ないし中世と考えられる。

#### (4)周辺柱穴（挿図30）

調査区の北東半を中心に疎らに柱穴が分布する。径20～85cm、深さ3～72cmとばらつくが、径20～30cmのものが多い。

#### (5)造構外出土遺物（第3図27～第4図44）

縄文時代中期および後期前葉、弥生時代の甕・高坏、古墳時代の土師器一坏D・高坏・小型甕や須恵器一甕・短頸壺A、平安時代の灰釉陶器、中世の常滑四耳壺の他、近世後期を中心とした遺物が多く出土している。図示したもの以外では、磁器一小碗（筒丸形／外鉄釉・内透明釉／辘轳・型押し／弁財天／瀬戸系、筒形／鉄釉・透明釉／高台脇に爪形の押引／肥前系、丸形・染付・透明釉／藤？／瀬戸系）・中碗（染付・透明釉／見込花／肥前系）、陶器一小碗（端反形／透明釉／吳須掛流し／瀬戸美濃系、鉄絵／灰釉／瀬戸美濃系、半筒形／吳須・透明釉／半菊花、丸形／灰釉／瀬戸美濃系）・中碗？（鉄釉）・中碗蓋（灰釉／瀬戸美濃系）・仏飯器（台底抉り込み／灰釉）・小皿（端反形／鉄釉／瀬戸美濃系、平形無高台／灰釉／瀬戸美濃系）・小鉢（丸形鉤縁／灰釉）・蓋物蓋（灰釉／摘不明）・中皿（丸形／灰釉／瀬戸美濃系）・擂鉢（口縁折線形／鉄釉／瀬戸美濃系、内面櫛目・見込櫛目環状／鉄釉／瀬戸美濃系）・捏鉢（灰釉／見込みに貝目／瀬戸美濃系）・中壺蓋（鉄釉／瀬戸美濃系）・小瓶（灰釉／瀬戸美濃系）・土鍋（鉄釉／瀬戸美濃系）がある。

石器は、まず打製石斧（第3図32～37）を一括、36は緑色岩製、他は硬砂岩製である。38～43は横刃型石器で、いずれも硬砂岩製である。44は砂岩製の持砥石で、仕上砥である。

### 第6節 第VII地点（略号HBA668-2）

地下室1基、溝址・溝状址3条が調査された（挿図31）。

#### (1)地下室（挿図31）

S K21は平面で把握された部分を掘り下げたところ、下部は横穴状に北側に掘り広がっていた。形態から、地下室と考えられる。S D14と重複する部分から掘り込んだものの、砂であったため、安定した地山側に掘り込んだものと考えられる。出土遺物はなく、詳細時期不明である。なお、参考までに、調査前に本址付近には住宅があった。

#### (2)溝址・溝状址（挿図32・33）

S D13はS D14・S D15を切って検出された。断面形についてみると下部はほぼ垂直なのに対して、

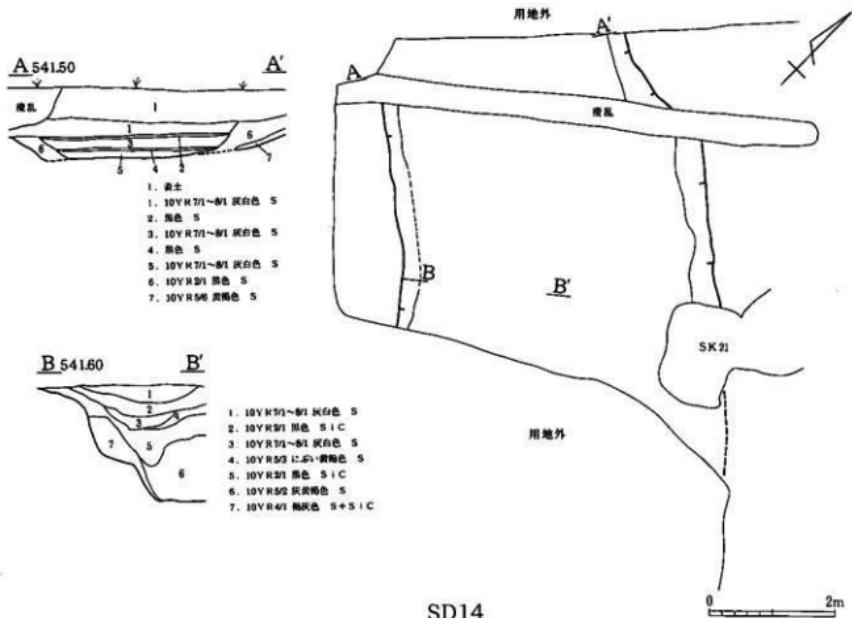
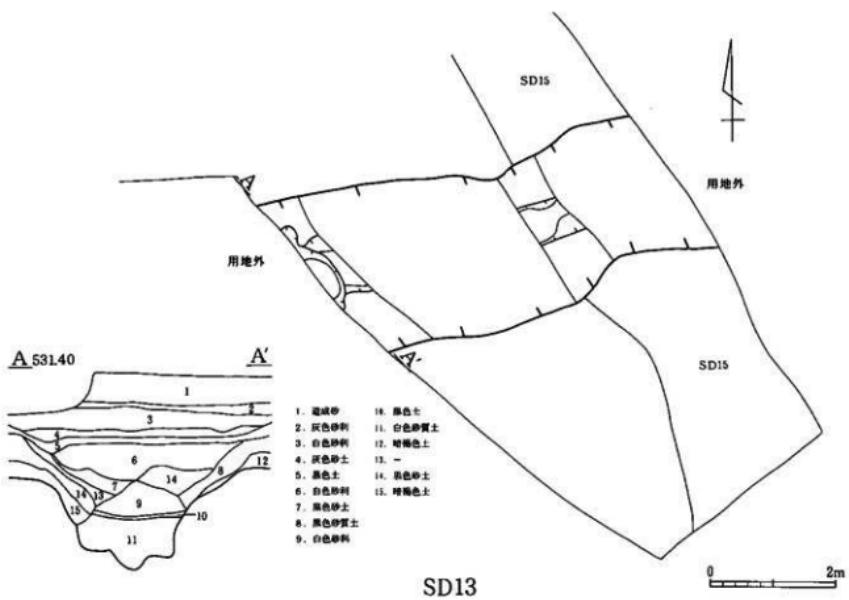


插图32 SD13+14

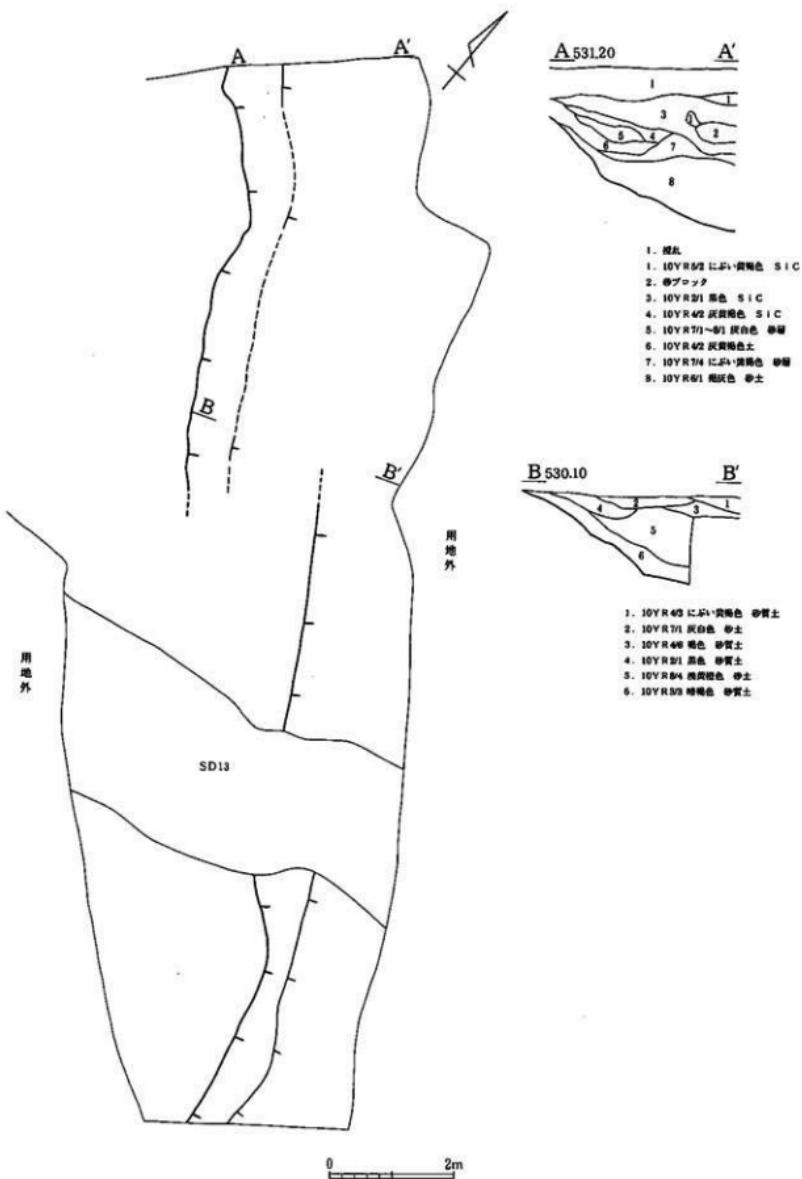


插圖33 SD15

上部が斜め上方に開き、人工的な井戸の調査例と類似する。さらに、傾斜に平行する東西方向に延びていること、幅がほぼ一定であることから、人工的に開削された井戸であると考えられる。

S D14は上流側が円悟沢川方向に延びている。検出位置からみて、第V地点で調査されたS D12との関連も想定されたが、下記の所見で異なる点が多いため、別遺構と判断した。平面検出後、ごく一部分のみ掘り下げ、壁・底面を把握したにとどまる。壁は不連続な立ち上がりを示している。埋土6層は一括して捉えたが、薄い間層を挟んで互層になっており、また、1・3・4層も洪水起源の山砂である。さらに傾斜に沿っていることから、自然流路と考えられる。2・5層は黒色のシルト質埴土となっており、相当期間水が流れていなかった可能性が指摘できる。

S D15は調査の都合上、2回に分けての調査となつたため、遺構把握深度に差があり、結果としてプランに不連続がある。断面をみると、上部はやや急な立ち上がりであるが、下部はだらだらと掘りくぼんでいる。5～8層が洪水起源の山砂であること、7層が薄い間層を挟んで互層になっていること、傾斜に沿っていることから、S D14同様、自然流路と考えられる。なお、4層以上は比較的流水の影響が少ない。S D15は阿弥陀沢川と平行しており、阿弥陀沢川旧流路であろう。

いずれも出土遺物はなく、時代性は不明であるが、S D13はその断面形から中世かそれ以前ではないかと考えられ、S D14・S D15もそれ以前に位置付けられよう。

### (3) 遺構外出土遺物

僅かに近世・近代の陶磁器類が出土した。

## 第7節 試掘・立会・確認調査結果

### 1) 平成6年度

#### ① 3.6.38号線（東西線）試掘

地表下約60cmで黄褐色砂（層厚60cm）となり、以下黒色土（同40cm）で地山の黄色砂となる。黄褐色砂の上面で柱穴1基が確認され、中世の内耳片が出土した。中世の生活面が遺存する可能性も考慮したが、搅乱がこの面まで達しており、また、幅員が十分でないことから本調査実施困難と判断した。

#### ② 6-10号線（東端）試掘

上記3.6.38号線（東西線）と同様の層位的所見を得たが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 2) 平成7年度

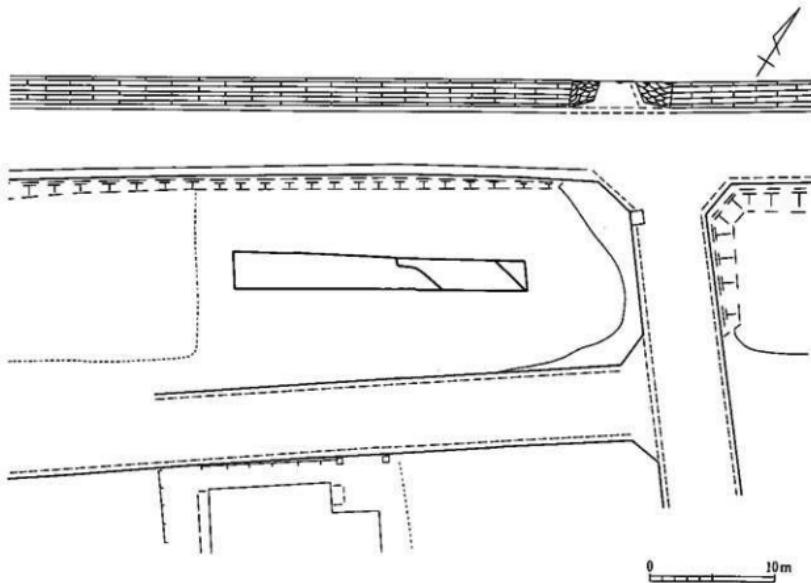
#### ① 6-10号線（東側）試掘

搅乱がおよんでもり、遺構・遺物は確認されなかった。

#### ② 6-8号線試掘

住宅の搅乱が著しく、遺構・遺物は確認されなかった。

### 3) 平成9年度



擇図34 市道6-11号線試掘

① 6-9号線試掘

耕土下に水流による砂の堆積が40cmほどあり、その下には黒色土が厚く堆積し、地表下180cmで比較的安定した粘質土が確認された。黒色土上面より自然流路と考えられる溝址3条が掘り込んでいる。いずれも幅約1m、深さ約70cmであるが、時期は比較的新しいと判断された。これ以外に遺構・遺物は確認されなかった。

② 6-11号線（擇図34）

東西方向に走る溝址が1条確認された。

4) 平成13年度

① 3.6.38-4号線試掘

東南端で自然流路を把握し、その西側でも黒褐色砂質と砂が互層になる。土坑1基・小柱穴1基が確認され、小柱穴より土器小破片が出土したが、時期不明である。集落の縁辺部と判断され本調査不要とした。

② 3.3.4号線試掘

地表下70~120cmでローム層が把握されたが、遺構・遺物は確認できなかった。

③ 3.6.38-3号線立会

60~80cmで黄褐色砂が確認され、その上面でロームマウンド1基が確認された。ロームマウンド付近

から縄文時代後期後葉の羽状沈線文土器1片が出土した。

#### 5) 平成14年度

##### ① 3.3.4号線立会

地表下165cmで砂質ロームが把握されたが、遺構・遺物は確認されなかった。

### 第8節 総括（挿図35）

#### (1) 縄文時代

本遺跡では、該期の遺構は本調査ならびに試掘・立会調査でも確認されていないものの、黄褐色砂（ないし黄褐色砂質土）下の黒色土から縄文時代後期後葉の凹線文系土器が出土した他、遺構に混入して縄文時代中期～晚期の遺物が少なからず出土している。また、立会調査地点でもロームマウンド状の部分から後期後葉の羽状沈線文土器が出土しており、断片的ながらも広範に後・晚期の遺物出土がみられる。黒色土中での遺構検出が容易でないという事情もあるが、遺物の出土状況から集落の周縁的な状況を示すと考えられる。

#### (2) 弥生時代

該期の遺構は、竪穴住居址1棟、方形周溝墓9基が調査された。

竪穴住居址は第I地点のみの調査となり、他の地点では本調査や試掘・立会調査でも確認されていないことから、他地区中位段丘上で調査された集落と同様、散在的な分布状況を呈すると考えられる。その一方でSB01の検出状況から、上部が削平を受けている可能性も高く、遺存状態が悪いことも考えられる。

当初、第VII地点では調査前に方形周溝墓の存在が想定されたが、調査の結果第VII地点周辺までは墓域が広がらないことが確認された。第I・III・V地点の状況からみて、円悟沢川・阿弥陀沢川に寄った部分に墓域が、両者に挟まれた部分に居住域が広がっていたと考えられる。

これまで当地方の弥生時代後期集落では、中位段丘上で縞状に分布する低湿地や小河川に沿った低地での稻作と、乾燥した部分での畑作とが主に生業活動を営んだ場と考えられてきた。本遺跡が立地する微高地は幅が狭く、これまでのところ、具体的に稻作を行ったと考えられる箇所は遺跡内には見つかっていない。円悟沢川南側あるいは阿弥陀沢川沿いの部分でこうした生業活動が行われた可能性が指摘できよう。

#### (3) 中・近世

該期の遺構と考えられるものは、据立柱建物址、櫛列・一本柱列、溝址・溝状址、土坑・土葬墓、集石の他、第I地点で把握された生活面がある。いずれも、遺物出土はほとんどなく、詳細時期の不明なものが多い。同時代の遺構が把握できないことから、いささか乱暴な総括となることを付言しておく。

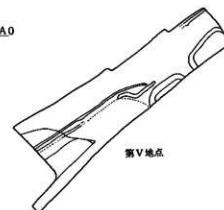
SK05～SK16は出土遺物が少なく時期や性格等不明な点が多い。細かい分析は第V章に譲るが、錢

LC-74 17-40



LC-74 17-48

LC-74 18-33



LC-74 18-34

BY49 AA0

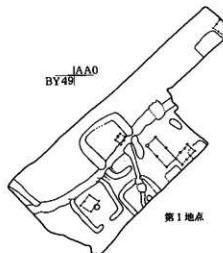


LC-74 18-42



LC-74 18-41

LC-74 22-8



LC-74 22-8

LC-74 23-1

BY49 AA0

LC-74 23-2

0 40m

插图35 羽堤墙建筑遗构配置图

貨が出土していることからみて、土葬墓群である可能性が高い。この土葬墓群と第Ⅲ地点SK18・SK19との関係については、3.6.38号線（東西線）試掘調査で確認されていないことから、間に空白部分があった可能性が高い。

掘立柱建物址・小柱穴群の分布状況は、総体的には散在しているものの遺跡中央部で密になり、阿弥陀沢川・円悟沢川寄りの部分では分布が稀薄となる。重複関係等から掘立柱建物址をはじめとする施設と、土葬墓群とは時期を異なる。また、中世に開削された井水SD02に分断されることから、中世に位置づくものと考えられる。

SD02・SD03に画された東側に土葬墓群は分布する。灌漑用の井水として開削されたSD02の脇に、それも下流側に墓所を営むことは合点がいかない部分もあるが、溝址に規制されて墓所が営まれている可能性が高い。

区画の機能を有すると考えられる第V地点のSD12は、北西側には該期の遺構等は確認されていないことから、区画される対象の施設はその南東側に求められる。今次調査では第I地点周辺で把握された生活面と、第Ⅲ地点南端で遺物出土をみた程度で、具体的な遺構は把握されていない。SD12の延長部分の追求と、溝址南東側の一画で建物址等の配置把握に努めることにより、本址が果たした機能や時代性等が明らかにされると考えられる。

さらに、第V地点の状況から、少なくとも近世には水田が営まれていることが判明した。

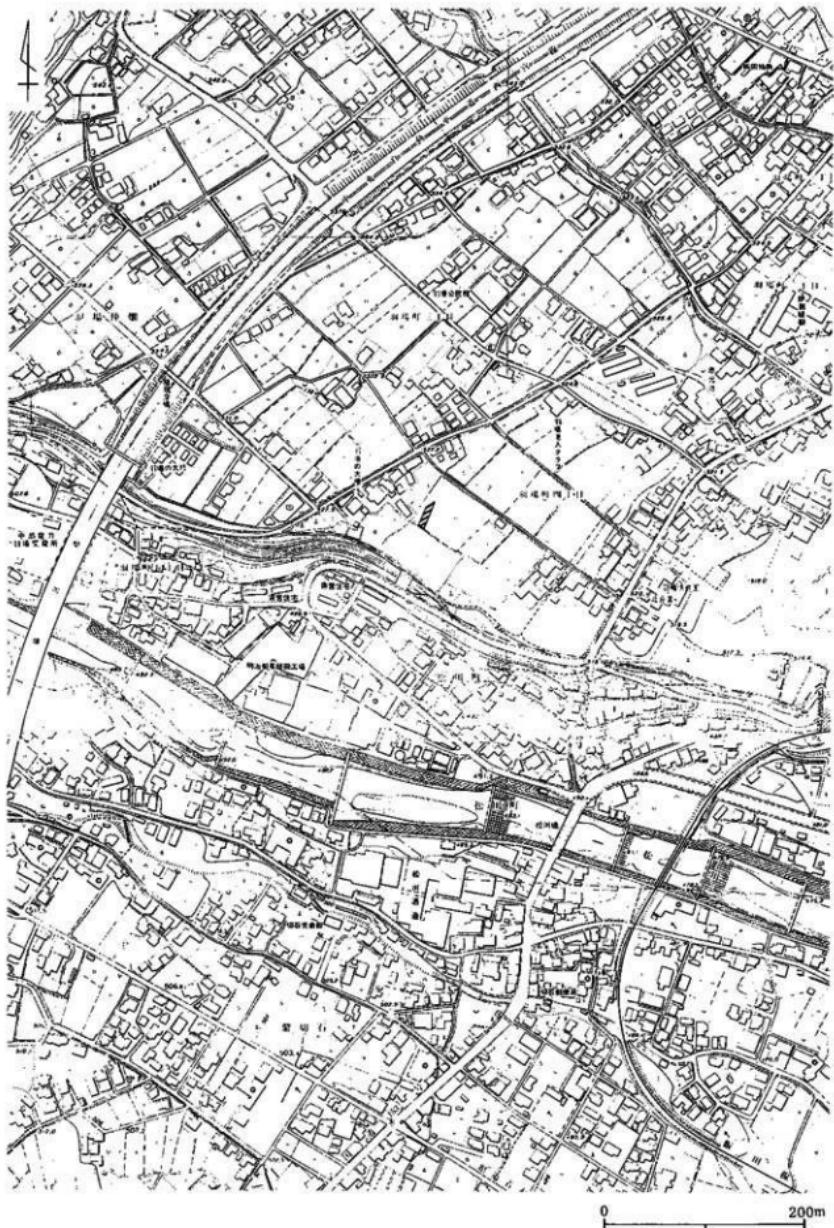


図36 方角東遺跡調査位置図

## 第IV章 方角東遺跡

### 第1節 調査区の設定（挿図4）

調査区の設定は、基準メッシュ図に基づいて、株式会社ジャステックに委託実施した。市道6-27号線本調査地点は、LC-74 22-31・同22-39内に位置する。

### 第2節 基本層序（挿図37）

市道6-27号線本調査地点の、AJ18付近調査区間で把握した基本層序では、I層：耕土（層厚約30cm）、II層：赤黒色重埴土（同約10cm）、III層：黒色重埴土（約20cm）、IV層：黒褐色重埴土（漸移層、同約10cm）で地山のソフトロームとなる。

調査地点北側の3.6.38号線の試掘調査結果では、ローム層は確認できず、全体に厚く黒色土が堆積して湿地状を呈していた。間層として薄い砂層がところどころに入ることから、時々小規模の氾濫を被っていたと考えられる。さらに北側の方角東遺跡中央部分には安定したロームがある。3.3.4号線・G4-2号線・6-24号線（いずれも平成10年度試掘）、3.6.38号線付近（平成12年度立会）にあたる。さらにその北側の円悟沢川沿いの部分では、黒色土が堆積して湿地状を呈する他、自然流路の痕跡が各所にみられる。

これに対して6-27号線本調査実施地点の南側には幅約20mの自然流路があり、段丘縁辺部は再びロームが検出される。

なお、6-14号線付近（平成12年度立会）、6-26号線・6-29号線（いずれも平成13年度立会）等方角東遺跡の西側部分では、羽場署遺跡等で把握された弥生時代後期以前の円悟沢川の氾濫に起因する黄褐色砂層が分布する。

### 第3節 市道6-27・6-28号線本調査地点（路号HG H550-1）

方形周溝墓1基・土坑16基が調査された（挿図36・37）。遺構検出面は基本層序の地山上面にあたる。

#### (1) 方形周溝墓

①SM03（挿図38、第5図47・48）

【検出位置】 A B14 【重複】 SK41～SK45・SK56～SK58に切られる 【調査所見】 全体の約2/3が調査区外にかかる。III層下部から掘り込まれている 【規模】 周溝内法×m、周溝外法×m 【内法面積】 - m<sup>2</sup> 【形態】 方形を呈すると考えられる 【主軸】 北東辺周溝の方向N47°W 【周溝】 【規模】 幅125～155m、深さ87～120cm。南東～北東辺の周溝では、コーナー部分が最深を

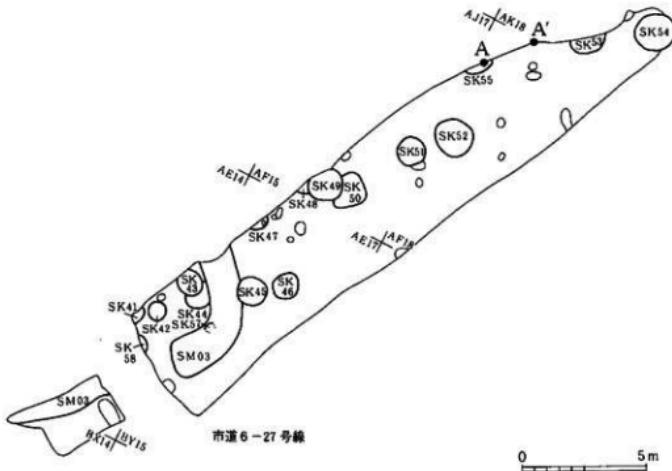
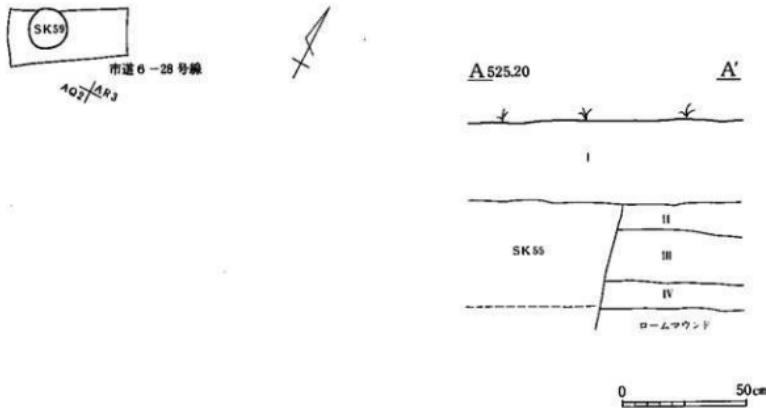


図37 市道 6-27・6-28号線 調査区構全体図、基準層序

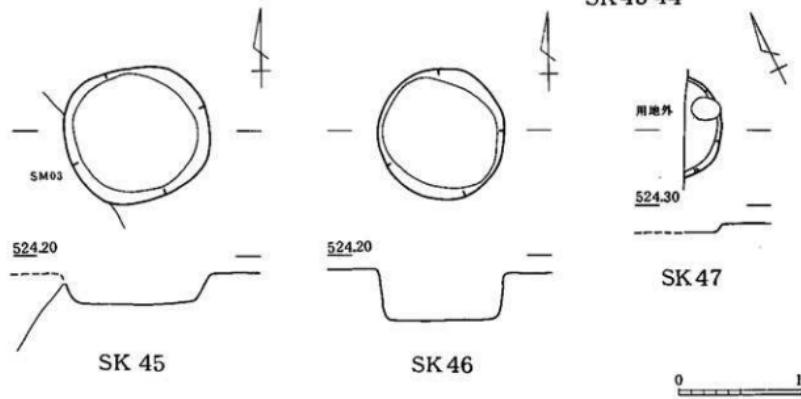
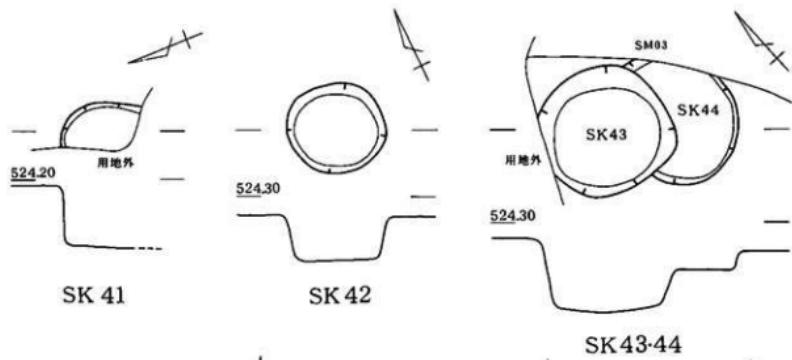
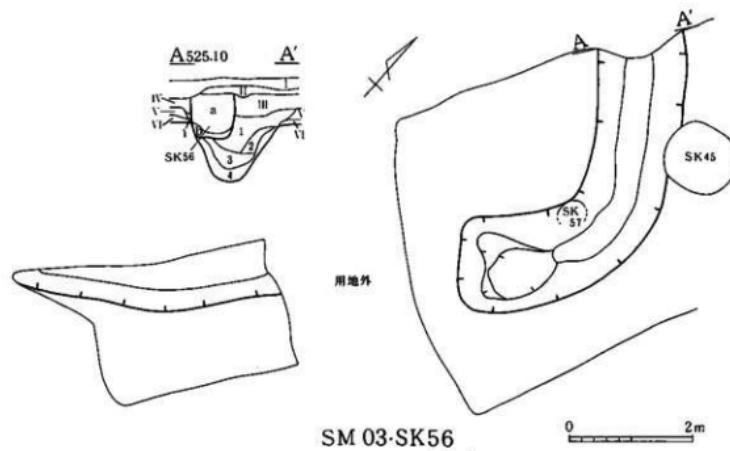
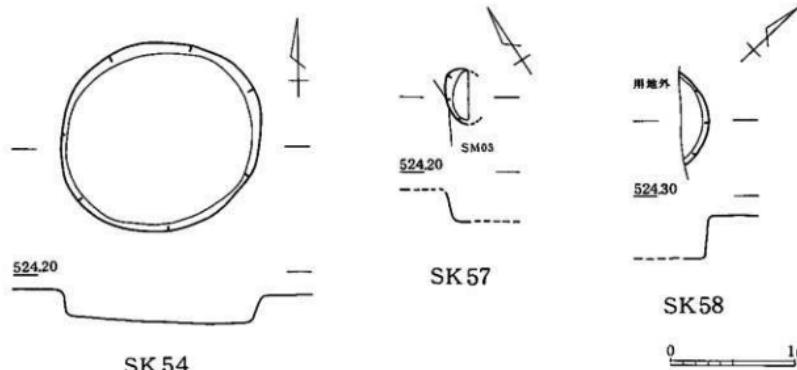
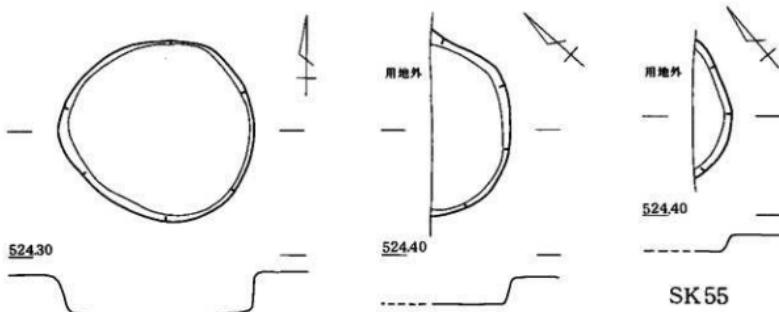
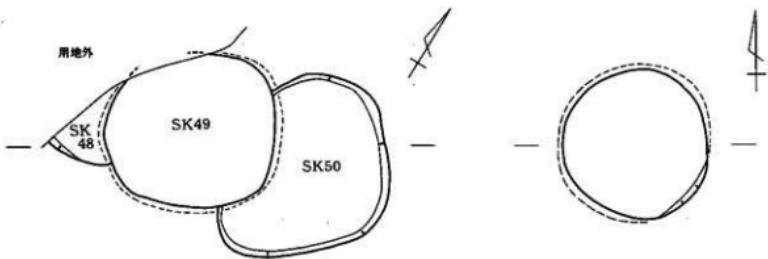


插圖38 SM03、SK41~47・56



0 1m

插図39 SK48~55・57・58

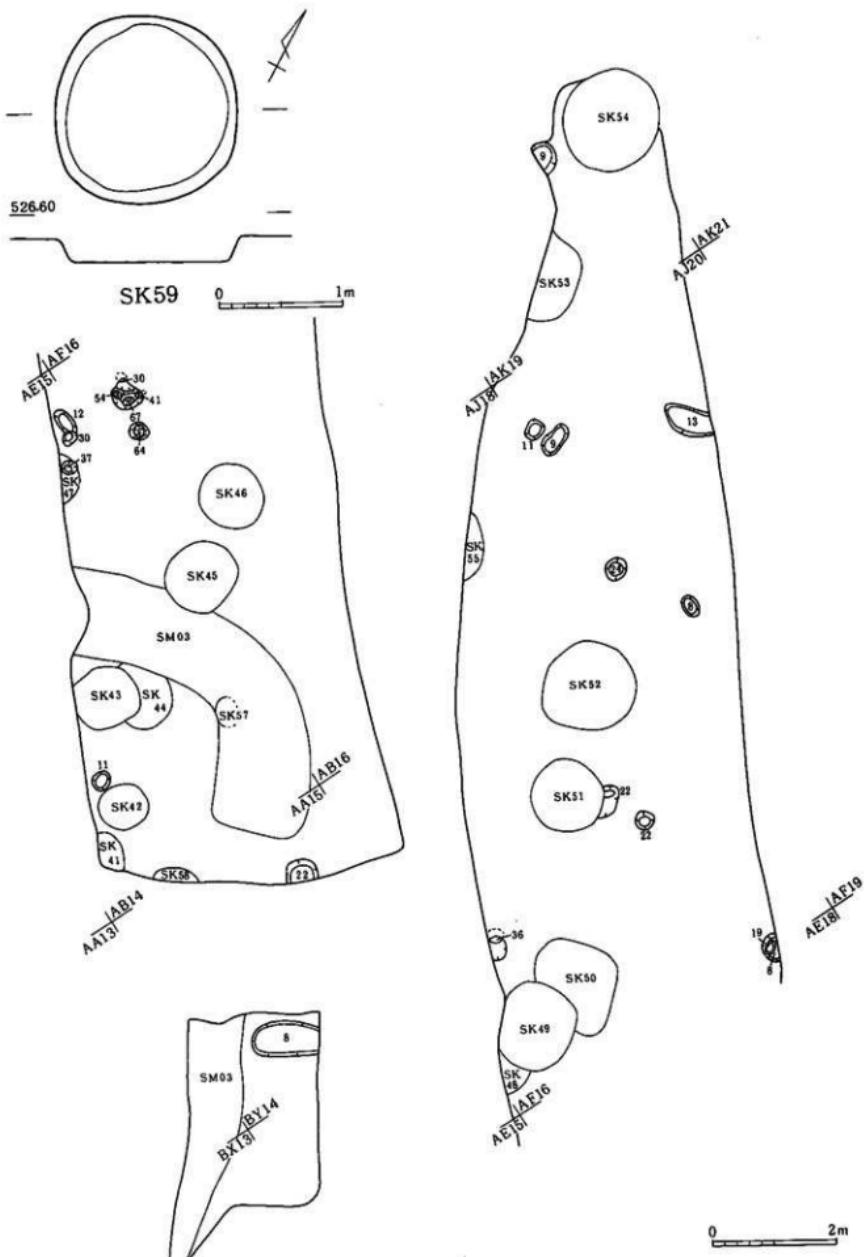


図40 SK59、周辺柱穴平面図(7)

測る。南東辺南側では南東～北東辺よりやや浅い。やはりコーナー部分で最深を測るものと思われる  
【断面形】逆台形を呈する　【土橋部】南東辺の中央　【出土遺物】遺物量は僅少。弥生土器甕片（第5図47）・硬砂岩製打製石庖丁（第5図48）の他、混入遺物として繩文土器片　【埋葬施設】【有無】不明　【その他】【墳丘】断面では明確に観察できず。しかし内法部分でV・VI層が周溝外側より高いレベルで確認されており、低い墳丘を持った周溝墓の可能性がある　【外表施設】なし　【付属施設】不明　【時期】弥生時代であるが、詳細時期不明である。

#### (2) 土坑・土葬墓（挿図38～40）

S K群は平面円錐ないし不整形を呈する。S M03周溝内で検出されたSK56以外は概ね1mを超える。検出面からの深さは5～70cmで40cm以下のものが多いが、断面で把握されたSK56では72cmを測る。ほぼ直に掘り込まれるものが多いが、SK49・SK51・SK52のように断面形フラスコ状を呈するものもある。後者はSK49がSK48・SK50を切っていることからみて、前者よりも後出的である可能性が指摘される。基本層序のⅡ層およびⅢ層上面から掘り込まれ、埋土単層で一気に埋め戻されたと考えられるものが多い。SK49では底部から14cm土が貼られていた。出土遺物はSK43から出土した陶器大平鉢片のみである。

出土遺物は少なく、時期・性格等不明な点が多いが、形態や陶器片が出土した状況は羽場曙遺跡で調査された土葬墓群と類似する。SK群は土葬墓群とみて差し支えないものと考えられる。時期については破片1片からはいさか乱暴であるが、中世ではないかと考えられる。

#### (3) タタキ状部分

S M03南東辺南側周溝の外側部分にタタキ状の部分が把握された。生活面と考えられるが、範囲等の記録はない。付属施設・出土遺物等なく、時期等詳細は不明である。

#### (4) 周辺柱穴（挿図40）

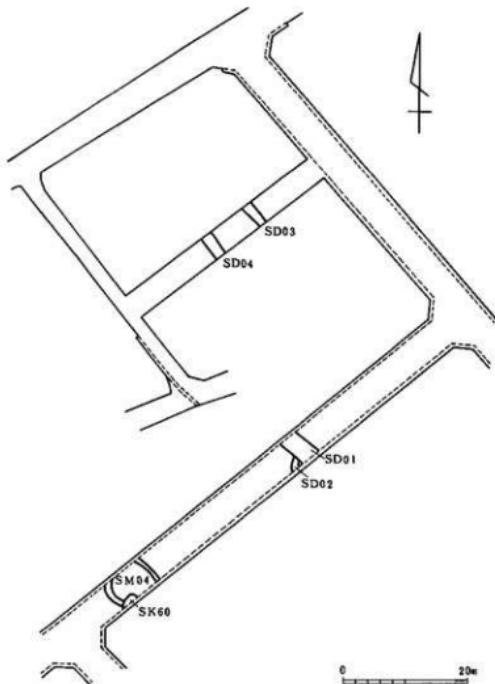
調査区のはば全面にわたって疎らに柱穴の分布がみられる。径25～120cm程度、深さ8～67cmとばらつくが、径25～30cm、深さ30cm以下の小柱穴が多い。なお、SK46・SK47の間に検出された深さ64cmを測る柱穴は、形態が弥生時代の住居址柱穴に類似する。

#### (5) 遺構外出土遺物

遺構外からの遺物出土はほとんどないが、弥生時代後期後葉の甕片の出土がある。

### 第4節 市道6-14号線立会調査地点（略号HGH843-3、挿図41）

平成11年度に実施し、一部12年度にかかる。方形周溝墓1基、溝址2条、土坑1基等を確認され、近世の陶磁器類が出土した。



挿図41 市道6-11号線・4-6号線立会

(1)方形周溝墓

①SM04(挿図41)

【検出位置】路線の南西側 【重複】SK60に切られる 【調査所見】黄褐色砂上面で検出したが、掘り込み面は確認できず 【規模】周溝内法6.5×-m、周溝外法7.7×-m 【内法面積】- m<sup>2</sup> 【形態】不整形を呈すると考えられる 【主軸】N54°W 【周溝】 【規模】幅50~70cm、深さは不明であるが、黄褐色砂上面から底面まで50~60cm 【断面形】逆台形を呈する 【土橋部】確認できず 【埋土の状況】自然埋没と考えられる 【出土遺物】なし。付近から土師器慶片が出土 【主体部】【有無】確認できず 【その他】【墳丘】断面でも確認できず 【外表施設】なし 【付属施設】不明 【時期】詳細は不明であるが、付近から出土した土師器片より、古墳時代前ないし中期の周溝墓である可能性が高い 【備考】南西側周溝上部周辺に近世の陶磁器類がまとまって出土。近世の遺構があったと考えられる。

(2)土坑(挿図41)

SK60はSM04を切って検出された。染付・透明釉の磁器片が出土しており、上述のSM04の南西側周溝上部周辺で近世の陶磁器類がまとまって出土したことと密接な関連を有すると考えられる。

### (3)溝址・溝状地 (神岡41)

S D01は上部幅約3.3m・下部幅約1.5m・深さ約1mを測り、下半は直に立ち上がり、上半が斜め約45°に開く。円悟沢川に平行して直線状に延びる。埋土は砂質土が主体で、底面付近にやや粗い礫が含まれる。また、底面にマンガン等の沈殿が認められ、水が流れた痕跡がある。出土遺物はない。地形の一番高い部分に掘り込まれること、および形態的特徴から平安時代～中世に開削された灌漑用の水路と考えられる。S D02は東側用地境で把握され、S D01に切られる。埋土・断面形からすると方形周溝墓周溝の可能性もある。西側用地境では把握できなかったことから、路線内に一部がかかるのみで、道路敷東側に延びると考えられる。あるいは確認地点の北側に延びる可能性もあるが、住宅取り壊しに伴う搅乱があり確認できなかった。さらに、本址の南側にも大きな礫が放り込まれた搅乱があり、十分に確認できなかった。S D01・S D02付近からは摩滅した土器小片1片が出土した。S D03・S D04はS D01と同様の断面形を呈しており、幅約2mを測る。形態からS D01同様、灌漑用の井水で、平安時代～中世に位置づくと考えられる。

### (4)遺構外出土遺物 (第5図49～59)

図示・表掲載したもの以外に、路線の南半、S M04南西側周溝上部周辺を中心に以下の遺物が出土している。青磁・中碗（染付／外面二重網文／肥前系）、磁器・小壺（丸形／染付・透明釉／外面呉須掛け／肥前系、端反形／染付・透明釉／外面呉須掛け／肥前系）、小碗（染付・透明釉／花卉／肥前系、染付・透明釉／肥前系、飯椀形／染付・透明釉／円文／肥前系、飯椀形／染付・透明釉／花鳥文／肥前系）、中碗（染付・透明釉／肥前系）、陶器・小碗（染付・透明釉／外面唐草文／陶胎染付・端反形／染付・透明釉／陶胎染付・灰釉）、中碗（拳骨形？／鉄釉／瀬戸美濃系）、小皿（平形無高台／灰釉）、擂鉢（鉄釉／擂磨系？、鉄釉／瀬戸美濃系）、練鉢・捏鉢（灰釉／貝目跡／瀬戸美濃系）、小瓶（べこかん形肩張／鉄釉）、大瓶・花生・土瓶（鉄釉）、土鍋（鉄釉、灰釉）、素焼き土器。18世紀後半以降のものが多い。

## 第5節 試掘・立会・確認調査結果

### 1) 平成5年度

#### ① 3.4.15号線・3.6.38号線試掘

地表下1.6～2.0mで地山の黄色粘質土が確認された。3.4.15号線・3.6.38号線にかかる白色砂を埋土とする南北方向の溝址が検出された他、小柱穴3基が確認された。

### 2) 平成7年度

#### ① 6-20号線（南側）試掘

耕土下に砂と黒色土が把握されたが、土地利用状況の中で十分な試掘余地は確保できず、遺構・遺物は確認されなかった。ただし隣地の土取りされた部分では断面で溝址が確認され、若干の遺物が出土している。

### 3) 平成8年度

#### ① 羽場公会堂建設予定地試掘

円悟沢川旧流路と考えられる部分が把握された。

#### ② 3.6.38号線試掘

氾濫起源の堆積物が把握され、遺構・遺物は確認されなかった。

### 4) 平成9年度

#### ① 6-20号線(中央) 試掘

耕土下に厚さ60cmの砂(黒色砂と褐色砂の互層)があり、40cmの黒色土を経て乳灰色の粘質土に至る。

遺構・遺物は確認されなかった。

#### ② 6-17号線・6-20号(北側) 線試掘

上記6-20号線(中央) 試掘と同様の所見が得られた。

### 5) 平成10年度

#### ① 3.3.4号線試掘

表土の下は黒褐色土・黒色土が堆積しており、約1.2mで安定した地山が確認された。堆積土中より遺物が2点出土したが、遺構等は確認されなかった。

#### ② 6-22号線試掘

耕土の下は黄褐色砂質土・褐色砂質土・黒色砂質土が堆積(氾濫起源の堆積物と判断)し、地表下約1.2m程で水が湧き出す。安定した地山は確認できず、遺構・遺物も確認されなかった。

#### ③ 6-24・G4-2号線試掘

約1.0~1.4mで安定した地山のロームとなる。用地に直交する幅40cm・深さ20cm程の溝跡が確認されたが、出土遺物はなかった。地形・埋土の状況から自然流路と判断された。

### 6) 平成11年度

#### ① 3-3-4号線・3-6-38号線試掘

氾濫に起因する砂が各所に認められた。

#### ② 6-28号線試掘

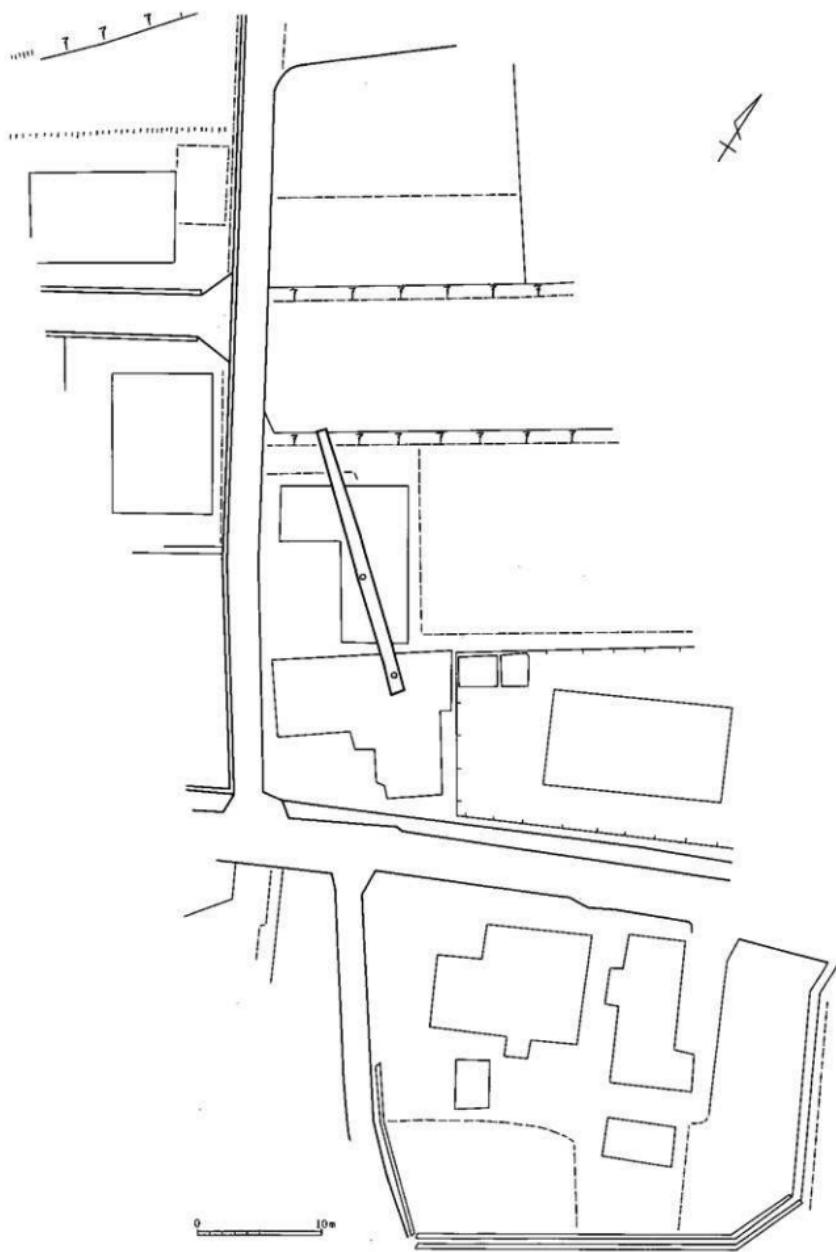
中央付近でSK59が調査された(本章第3節参照)。この付近から北東側はロームが良好に遺存しているが、小柱穴1基が確認されたにとどまる。SK59の南西側には幅30mを超える自然流路があり、さらに南西側段丘縁辺部まで15m程は再びローム層が確認された。

#### ③ 3-6-38号線立会

約2mで再堆積の砂質ロームが検出され、南側は自然流路が幾筋も入り、北側でも一部確認された。遺構・遺物等なし。

#### ④ 6-31号線立会

遺構・遺物等は確認されなかった。



挿図42 市道3・6・38号線試掘

## 7) 平成12年度

### ① 4 - 6号線立会（挿図41）

溝跡2条が確認された。SD03は6-14号線で把握されたSD01と同様の断面形態をとる。出土遺物ではなく、詳細時期は不明であるが、形態から平安時代～中世と考えられる。SD04は地表下約50cmの塗黒土上面から掘り込まれる。幅20cm程度で埋土は白色砂であり、水路と考えられる。

### ② 3.6.38-1号線立会

地表下約50cmでローム面に至る。西端で自然流路が把握されたが、流路の方向は北西～南東方向と考えられる。出土遺物は排土中より出土の中世陶器片以外ない。

### ③ 6-25号線立会

地表下約130cmで灰褐色砂が把握された。以前の試掘状況から湿地部分と判断された。出土遺物なし。

### ④ 6-30号線立会

工事は黒色土中で止まっており、遺構・遺物は確認されなかった。

## 8) 平成13年度（挿図42）

### ① 3.6.38号線試掘

地表下140cmでロームが良好に遺存する。ローム上面で小柱穴2基を検出したが、埋土から弥生時代の柱穴の可能性が考えられる。他に遺構は確認できなかった。弥生時代後期の壺破片が出土した。

### ② 3.3.4号線試掘

路線内に3ヶ所トレンチを設定した。地表下120～150cmで遺構確認面であるロームが検出されたが、遺構および遺物は確認されなかった。

### ③ 6-26号線立会

黒色土（120～150cm）の下位に再堆積のロームがあり、東側は徐々に湿地帯に移行する。遺構・遺物は確認されなかった。

### ④ 6-29号線立会

地表下約120cmで砂質ロームが把握された。断面で北西から南東方向に流れる自然流路2条が確認された。南側の流路は幅約8m・深さ130cmで、ローム上の黒色土上面を掘り込んでいる。北側の流路は黒色土中から掘り込んでおり、幅約1m・深さ20cm程を測る。遺構・遺物は確認されなかった。

## 9) 平成14年度

### ① 6-21号線立会

円悟沢川に面した部分で、深さ180cm程度掘削されていたが、過去に造成されており、遺構・遺物は確認されなかった。

## 第6節 総括

### (1)縄文時代

本遺跡の西側には縄文時代後期から晩期にかけて著名な旧湯渡遺跡があるが、今次調査地点では断片的に遺物が把握されたにとどまる。羽場曙遺跡と同様、集落の周縁的な状況を示すと考えられる。

### (2)弥生時代

該期の遺構は、市道6-27・6-28号線本調査地点のSM03と、市道6-14号線立会調査地点の方形周溝墓SM04と周溝墓の可能性をもつSD02がある。羽場曙遺跡のような面的調査がないことから断定できないものの、周辺にはなお周溝墓があると考えられる。羽場曙遺跡の調査結果では、墓域に接して居住域があり、それぞれの遺構がやや散在することが明らかにされている。また、権現堂前遺跡の調査結果でも居住域の南側段丘縁辺部に方形周溝墓があり、本遺跡においても墓域に隣接した居住域の存在が推定される。市道6-27・6-28号線本調査地点ではSM03を含めその北側に安定したロームの堆積がみられたが、該期遺構は確認されていない。小柱穴の中には弥生時代の住居址主柱穴と類似したものがあり、また、SM03周溝断面A-A'で周溝の両側で堆積層の不連続がある。この部分は住居址がある可能性を考慮して丹念に調査したが、残念ながら他に住居址があるような手懸かりは得られなかった。これらが住居址の痕跡であるとするならば、極めて遺存状態が悪いものの、この墓域北側の部分に接して居住域があった可能性がある。また、SM03から少し離れるものの、3.6.38号線試掘調査地点で確認された小柱穴2基と弥生時代後期の壺破片からみて、この周辺に居住域があった可能性も残されている。

### (3)平安時代以降

溝址SD01は時期や機能が不明であるものの、黄褐色砂の堆積状況からみて当時地形的に一番高い部分に開削されている。こうした立地やその断面形は、平安時代から中世にかけて中位段丘上で井戸として開削された溝址と共通する。

また、本遺跡で調査されたSK群は、出土遺物は皆無に等しく、時期・性格等は不明な点が多い。しかし、その形態的特徴から羽場曙遺跡のSK群と同様、中世から近世にかけての土葬墓と考えられる。その分布傾向をみると、狭い路線幅の中での傾向で大雜把の誂りを免れ得ないが、土葬墓群は路線センター付近から南西側に分布が偏っている。一方で6-28号線では1基が把握されたのみであり、今次調査区から6-28号線にかけての部分に土葬墓群が分布すると考えられる。

近世は、市道6-14号線立会調査地点で断片的に遺物出土が把握された程度であるが、中世に引き続き集落が営まれたと考えられる。

## 第V章 まとめ

羽場曙遺跡・方角東遺跡周辺では、これまで中央自動車道建設時の調査以外具体的な調査は実施されておらず、今回の事業に關わる諸調査の結果、多くのことが明らかにされた。各遺跡の状況については前章までに個別に総括したとおりであり、本章では両遺跡に共通する事柄や市内の遺跡を見渡してどのように位置づけるかを中心に述べて、全体のまとめとしたい。

### 第1節 両遺跡が被った災害

羽場曙遺跡では、黄褐色砂（ないし黄褐色砂質土）下の黒色土から縄文時代後期後葉の凹線文系土器が出土した他、遺構に混入して縄文時代中期～晚期の遺物が少なからず出土している。こうした状況は簡易圃場整備事業実施に先立ち試掘調査を実施した北隣丸山地区の古屋垣外遺跡でも確認されている。また、伊賀良地区の中村中平遺跡第2地点でも縄文時代晚期中葉以降弥生時代後期前半までの間に洪水に襲われたことが判明している（飯田市教委 1994a）。縄文時代晚期～弥生時代後期前半の間に大規模な洪水が中位段丘上を広範に襲っていることは確実と考えられる。さらに中位段丘上の遺跡ばかりでなく、低位段丘上でも弥生時代後期以前に遡る、洪水起源の砂質土の堆積が松尾・龍江地区等で確認されており、この洪水の痕跡を丹念に追求することによって、遺構・遺物の確認やクロス・デイティング等を行う上で大いに役立つと考えられる。

地質などからみた災害史ではこの時期の災害として、野底山で確認された土石流がある。埋没ヒノキの年輪から西暦93年に発生したとみられている。今後学際的な研究により、両者が同一のものであるか否かを検証していくこと、さらにこの災害がどの程度の範囲に及んでいたか等を明らかにしていく必要がある。

### 第2節 弥生時代の集落について

羽場曙遺跡で竪穴住居址1棟が調査された以外、両遺跡では居住域に関する情報は墓域のそれに比較して極めて貧弱である。羽場曙遺跡の場合、竪穴住居址がないというより、遺存状態が不良だったり、掘り込みが浅いといった事情で、検出できなかった可能性が多分にある。また、方角東遺跡の場合には、遺跡の西側部分までは弥生時代後期以前の円悟沢川の氾濫に起因する黄褐色砂層が分布するが、市道6-27・6-28号線本調査地点までは分布が達していない。すると、本調査地点ではこの黄褐色砂層は把握できなかったものの、住居址の掘り込み面はローム層上面よりも上位にあった可能性が高く、検出面をローム層上面とした今次調査では住居の把握が困難であったことができる。今後、より慎重に遺構確認を行うことが求められる。

次に墳墓群についてみると、羽場曙遺跡で調査された方形周溝墓は弥生時代後期前半に位置づけられ、飯田下伊那地域の方形周溝墓の初源期に位置づくものである。羽場曙遺跡では方形周溝墓群に2つの対

照的な構成がある。一つは、SM01～SM03、SM08・SM09で、周溝が重ならないタイプである。周溝を共有せずに隣接してほぼ同じ主軸方向をとる。もう一つはSM04～SM07で、周溝が重複しており、周溝を共有するタイプである。出土遺物からみるかぎり、両者は弥生時代後期前半で、時間差はないと考えられる。

山下誠一は、弥生時代には集落を構成する単位集団が比較的近接した場所を墓所と定めて方形周溝墓を築造している田井座遺跡・一色遺跡・恒川遺跡群・松尾城遺跡等と、集落域とは少しほなれた箇所に墓域を区別している黒田垣外遺跡・ミカド遺跡・小垣外辻垣外遺跡・天伯A遺跡・田園遺跡・宮垣外遺跡等とがあることを指摘している（山下 2002）。前者では原則として周溝墓は周溝を共有していないのに対して、後者では周溝を共有しているものと共有していないものと併存している。また、周溝を共有するものの分布は、今のところ上郷・松尾・伊賀良・山本で知られているが、他地区ではないと断言できる状況にはない。また、中位・低位段丘上を比較しても顕著な差はない。

山下は、田中義昭（1984）の定義を援用しつつ、「一時期で複数の単位集団が存在する集落を拠点集落とし、多くても2単位程度の単位集団の集落を周辺集落とする。そして、土器型式で3段階程度まで継続する集落を短期廃絶型とし、それ以上続く集落を長期継続型とする。」（山下 2000）と集落の類型を定義して、集落の動態を明らかにしている。即ち中位段丘上では拠点集落・周辺集落とも短期廃絶型で、低位段丘では長期継続型がみられるという。なお、長期継続型とされる恒川遺跡群は遺跡群内での短い距離の移動を繰り返している。

羽場曙遺跡の集落状況については、土質状況などから住居址の把握に疑問点があり、居住実態を鮮明にできず、拠点集落・周辺集落いずれとも特定不可能であるが、周溝墓の所属時期は後期前半に限られることから短期廃絶型集落に包括される。

以上の諸点については大まかな傾向性を指摘できる段階であり、今後居住域・墓域・生産域をある程度広範に調査することによりさらに踏み込んだ議論ができるものと考えられる。

### 第3節 中位段丘上の開発について

両遺跡では、市内の中位段丘上に立地する多くの遺跡と同様、弥生時代以降中世までの間、生活の痕跡を見いだすことができない。この時代には扇状地扇端の湧水地点や小河川沿いの一部の集落を除いて集落はほとんど継続しておらず、その結果を反映して中位段丘の古墳築造数が天竜川沿いの地域より極端に少なくなっている。この集落・古墳等にみられる活動のヒアタスは、中位段丘上での生産活動が低迷していた結果と考えられ、平安時代後期以降に登場する集落は、この時期に中位段丘上の開発が進んだことによるものと考えられる。

こうした開発の進展を物語るものとして、市内でいくつか調査されている、下半がほぼ直に掘り込まれ、上半は約45°の角度で開く断面形を呈す溝址が考えられる。平安時代後期から中世と考えられる例が多く、しかも中位段丘上で見つかっている。詳細時期は不明であるものの、方角東遺跡で確認されたSD01等もこれに該当する。こうした形態の溝址は、当地方では恒川遺跡群新屋敷遺跡（飯田市教委 1991c）の溝址37に先駆的にみられる。形態的には共通するものの、恒川遺跡群例では若干の相違点があ

る。それは、遺跡が低位段丘上にあること、水を流したものでなく区画施設と考えられることである。郡衙の一画に位置していること、それまでの弥生～古墳時代の墳墓群の周溝や圍溝とは形態を大きく異にしていることからみて、外来系の土木技術により開削されたことはまず疑いない。形態的な特徴で類例を捜すと、松本市下神遺跡 S D18（長野県埋蔵文化財センター 1990）、長野市石川条里遺跡 S D1016（同 1997）、御代田町根岸遺跡 M-1号溝状遺構（御代田町教委 1989）、群馬県前橋市他の女堀（群馬県教育委員会 1980）等がある。下神遺跡 S D18は平安時代の区画溝、石川条里遺跡 S D1016は古墳時代の大溝、根岸遺跡 M-1号溝状遺構は平安時代の人工的水路、女堀は平安時代末ないし鎌倉時代の人工的水路であり、区画・灌漑といった機能面で共通性を指摘できる。

次に、構造的な部分についてみる。三日市場大原遺跡、殿原遺跡溝址3、今村遺跡ではローム層を掘り込んでいることから、流水の浸食作用の影響を受けにくかったと考えられるが、方角東遺跡の場合黄褐色砂を掘り込んでおり、側面および底面は相当浸食作用を受け易かったと考えられる。しかし、断面形に大きな崩れがないことから、溝址の形態を保持するために土留め施設が設けられていた可能性が指摘される。

上部薬研・下部箱堀状の断面形を呈することは、一定幅・一定深の溝を掘り、土を上げるために最も効率的な形態であったと考えられる。

さらに、羽場曙遺跡 S D02も中世に位置づくことはほぼ間違いなく、灌漑施設として中位段丘上の開発に大いに役に立ったことは疑いない。

こうした中位段丘上の開発を背景として郡戸荘飯田郷が成立し、中世には信濃国守護職小笠原氏配下の坂西氏が地頭として治めている。坂西氏は、永正6（1509）年白山社奥社本殿を建立するなど、相当な勢力を有していたことが窺われる。本遺跡周辺では具体的に該期の遺構として把握されているのは土葬墓のみであるが、相当数の集落が営まれ、開発が進んでいたことが考えられる。

上述の溝址は今のところ断片的に把握された程度で、平安時代から中世に位置づくという年代観から、歴史的脈絡の中で中位段丘上の開発との関連が想定されているに過ぎない。どれくらいの範囲に灌漑網が張りめぐらされたか、整備状況は年次的にどう推移したか、また、どういった層（人々）が開発を担ったのか等々、まだまだ不明な点が多い。そうした課題の解決を遅らせている理由の一つとして、溝址の全体像がある程度把握できているものが、殿原遺跡例と恒川遺跡群例等少数に限られているということがある。調査期間等の制約の中で住居址・建物址・墳墓群の調査が優先され、溝址の調査が不完全になってしまったものが少なからずある。今後十分な注意を払うことが肝要である。

#### 第4節 中世から近世にかけての墳墓群について

さつみ遺跡では平面梢円形・円形・方形の3種類の土坑が調査されており、円形・方形を呈するものは掘り込みが深く、土葬墓と考えられるとされ、近世に位置づけられた。副葬品の内容については記述がほとんどないため、時期決定の手がかりがない。今次の羽場曙遺跡・方角東遺跡で調査された土坑のうち、土葬墓と考えられるものは、さつみ遺跡と同様出土遺物はほとんどない。しかし、羽場曙遺跡 S K05・S K06・S K13から青磁輪花碗が出土している他、S K05から四耳壺が出土していることから、

上限は中世まで遡る。一方でSK12から近世の陶器類小皿が出土していることから、一部近世まで下ることはまず間違いないと考えられる。近年の六道銭研究進展の結果、渡来銭から寛永通宝への切り替えは短期間にしかも全国的に行われたことが明らかにされている（鈴木公雄 1988・1993・1999）。両遺跡のSKからは寛永通宝は出土しておらず、17世紀半ば以降に位置づく土葬墓はないと考えられる。

次に墓壙の形態からみると方ないし円形を呈し、深い掘り方をもつ。棺材や人骨は遺存しておらず、埋葬の形態は不明である。その形態的特徴から、さつみ遺跡報告では同種の土坑を近世の土葬墓と位置づけられたと考えられるが、前述の通り遺物の年代観とは隔たりがある。松尾北の原遺跡・川路辻前遺跡・同月の木遺跡の調査例からみると、平棺から座棺への転換は都市部では近世前期から始まつたものの、農村部ではやや時期が下り17世紀後半以降であったと考えられる（飯田市教委 2002a）。こうした座棺導入の年代観からみて、羽場曙遺跡・方角東遺跡で調査された土葬墓群は座棺ではないと考えられる。参考までに長佐古真也によれば、「南多摩地域では、仰臥屈葬から座葬への転換は「同じ村落内でも微妙に異なり、とくに街道沿いなどでは一七世紀中葉頃から認められる場合もあるが、大半は一七世紀後葉～一八世紀前葉頃に転換している」（長佐古 2001）ことが指摘されており、市内の場合とそう矛盾するものではない。

また、両遺跡では調査前にもそして調査の中でも石塔は確認されていない。唯一、権現堂前遺跡で洪水砂礫土中から五輪塔が出土したという記載が目を引く程度である。笛本正治は信州では17世紀半ば頃から石塔をもったお墓が登場していくことを指摘しており（石井他編 1993）、両遺跡の状況と整合的である。さらに、方角東遺跡では土葬墓群は散在的な分布状況を呈しているし、羽場曙遺跡でもまとまってはいるものの群構成をとると断定はできない状況がある。すなわち墓壙が群在している屋敷墓が成立したと言いうる状況ではない。このことは屋敷墓も信州や多摩地域では17世紀中葉～18世紀前葉以降に成立するという笛本・長佐古両氏の指摘（それぞれ前掲書）ともやはり矛盾しない。

以上を総合すると、両遺跡で調査された土葬墓の年代的位置づけについては、その初源期は不明であるものの、概ね中世に収まるものであり、せいぜい下っても17世紀半ば頃ということができる。

また、今次調査によって中世以後の地下遺構として把握されたものが墓壙にとどまることは、耕地を基調とした家屋の散在・墓所の特定地域での継続性等の村落形態を反映し、その成立期が該期にあたることを示唆している。

以上のとおり、土地区画整理事業に先立つ両遺跡の調査の結果、当地方を襲った災害史、弥生時代の集落、中位段丘上の開発、中・近世の墓制についてさまざまな知見が得られた。その一方で、区画整理という本事業の性格上、面的な調査はほぼ困難で、小規模な街路の整備は立会調査が主体となる等制約が大きかった。また、各街区の造成や個人の諸開発には個別に対応しているものの、その対応は十分とは言い難いのが実情である。

羽場曙遺跡や方角東遺跡では、遺構が確認されず断片的に遺物出土をみたにとどまるが、歴史環境で概観したとおり、両遺跡の西側には縄文時代後・晚期の遺跡として著名な旧湯渡遺跡がある。権現堂前遺跡では縄文時代前期末・中期前半・中期広範・後期前半・晚期前半・晚期後半の遺物が、さつみ遺跡でも縄文時代後期・晚期前半・晚期後半の遺物が出土しており、羽場曙遺跡・方角東遺跡でも今後縄文時代後・晚期を中心とする集落や遺構が確認される可能性は高い。

これまでの調査結果では、弥生時代以降の遺構・遺物が広範に確認され、さらに重層的に縄文時代以前の集落の存在が示唆されたわけであるが、現実には試掘調査時に弥生時代までの遺構・遺物の把握までしかできないことから、今後調査体制の整備を含め解決されなければならない課題が多い。

本事業はなお継続中であり、今後よりきめ細かな対応をとることが調査結果を活かす方途といえる。

#### 《引用参考文献》

##### 全体

- 飯田市教育委員会 2001 『飯田城下町遺跡』  
飯田市教育委員会 2002a 『開善寺境内遺跡』

##### 第Ⅱ章関係

- 飯田高校考古学研究会 1975 『飯田市大門町遺跡調査報告』『下伊那考古学会会誌Ⅱ』  
飯田市教育委員会 1977 『伊賀良中島平』  
飯田市教育委員会 1979 『風越窯址』  
飯田市教育委員会 1983 『酒屋前遺跡』  
飯田市教育委員会 1987 『殿原遺跡』  
飯田市教育委員会 1988a 『丸山遺跡』  
飯田市教育委員会 1988b 『小垣外・八幡面遺跡』  
飯田市教育委員会 1991a 『公文所前遺跡』  
飯田市教育委員会 1991b 『ガンドウ洞遺跡 飯田城跡』  
飯田市教育委員会 1992 『殿原遺跡』  
飯田市教育委員会 1994a 『中村中平遺跡』  
飯田市教育委員会 1996a 『富の平遺跡』  
飯田市教育委員会 1996b 『中川遺跡』  
飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』  
大沢和夫 1956 『風越窯造物発見記』『伊那』1956-8  
下伊那教育会 1988 『伝馬町遺跡』  
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史 第二巻』  
下伊那誌編纂會 1955 『下伊那史 第三巻』  
下伊那歴史考古学研究所 1979 『飯田風越窯址』  
長野県教育委員会 1971 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田地区』  
長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 飯田市内その2』  
八幡一郎 1972 『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究（上）』慶友社

##### 第V章関係

- 飯田市教育委員会 1976 『清水遺跡』  
飯田市教育委員会 1991c 『恒川遺跡群新屋敷遺跡』

- 飯田市教育委員会 1992a 「八幡原遺跡」
- 飯田市教育委員会 1992b 「八幡原遺跡」
- 飯田市教育委員会 1994b 「堂垣外遺跡・櫻爪遺跡・蔭上遺跡・長橋遺跡」
- 飯田市教育委員会 2002b 「上の坊遺跡」
- 飯田市教育委員会 2002c 「月の木遺跡 月の木古墳群」
- 石井 遼・萩原三雄編 1993 『中世社会と墳墓』帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集、名著出版
- 上郷町教育委員会 1989 『ツルサシ遺跡・ミカド遺跡・増田遺跡・垣外遺跡』
- 群馬県教育委員会 1980 『女堀』昭和54年度女堀遺跡詳細分布調査実績報告書
- 鈴木公雄 1988 「出土六道銭の組合せからみた江戸時代前期の銅錢流通」『社会経済史学』53-6
- 鈴木公雄 1993 「渡来銭から古寛永通宝へー出土六道銭からみた近世前期銭貨流通史の復元ー」『論苑考古学』天山舎
- 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』東京大学出版会
- 龍江村誌編纂委員会 1997 『龍江村誌』
- 長佐古真也 2001 「多摩の農村墓地」『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 鈴長野県埋蔵文化財センター 1990 『下神遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 6
- 鈴長野県埋蔵文化財センター 1997 『石川条里遺跡』中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15
- 御代田町教育委員会 1989 『根岸遺跡』
- 山下誠一 2000 「飯田盆地における弥生集落の動向ー発掘調査された堅穴住居址を基にしてー」『飯田市美術博物館研究紀要』10
- 山下誠一 2001 「飯田盆地における周溝墓の動向ー弥生時代から古墳時代墓制の一様相ー」『飯田市美術博物館研究紀要』11
- 山下誠一 2002 「飯田盆地における周溝墓再論ー集落と墓域の関係を中心としてー」『飯田市美術博物館研究紀要』12

第1表 羽場跡遺跡遺物性状(1)

遺跡名	発掘位置	法面(㎝)	長軸	平面形	壺土	出土遺物	時期	備考
<b>南竈地盤</b>								
SE04	BY08	350×260×52(80,112)	N28°W	不整形	黒色砂質土	皇宋通宝 1、不明錢 1	炭少量	
SK01	BO45	166×145×103	N70°W	不整形	黒褐色砂質土	微細削痕ある刷片(黒曜石)		
SK02	BU02	142×130×47	N42°W	不整形円	黒褐色砂質土	微細削痕ある刷片(チヤート)		
SK03	BR06	(140)×-×53	-	-	黒褐色砂質土	青磁-輪花瓶、陶-四耳壺、陶-粗製深鉢	炭少量	
SK04	BT02	190×162×73	N29°W	不整形円	黒褐色砂質土	青磁-輪花瓶、陶-不明鉄製品(刀子?)、铁条、赤-?	中世	ST04と重複。炭微量
SK05	BR08	152×129×80	N42°E	不整形円	黒褐色砂質土	青磁-輪花瓶、不明鉄製品(刀子?)、铁条、赤-?	中世	ST04と重複。炭微量
SK06	BP08	171×140×70	N20°E	不整形円	黒褐色砂質土	不明鉄製品、鰐羽口	炭微量	
SK07	BN09	158×152×84	-	-	黒褐色砂質土	青磁石(仕上版)	炭微量	ST02-ST04と重複。炭少量
SK08	BR09	178×114×62	N53°W	精円	黒褐色砂質土			
SK09	BQ10	160×128×57	N40°W	不整長方形	黒褐色砂質土			
SK10	BT11	110×57×57	N42°E	不整形円	黒褐色砂質土			
SK11	BU09	126×100×42	N45°W	不整形円	黒褐色砂質土			
SK12	BC09	136×110×35(53)(68)	N55°W	不整長方形	黒褐色砂質土			
SK13	BD09	158×130×14	N30°E	不整円形	黒褐色砂質土	陶-輪花瓶、陶-一大平鉢、不明鉄製品(赤鐵?)、中世	ST04と重複	
SK14	BS10	95×90×65	-	-	黒褐色砂質土	鐵溥-不明錢 1、陶-粗製深鉢	炭少量	
SK15	BS10	113×108×46	-	-	黒褐色砂質土	土-?		
SK16	BO08	125×-×60	-	-	黒褐色砂質土	陶-一大平鉢		
SK17	BC05	183×130×35	N33°E	不整形円	黒褐色砂質土	陶-?		
SD01	BM44	740以上×180×107	N48°E	直線状	黒褐色砂質土	陶-後期刻劃粗製深鉢	炭微量	
SD02	BR04	4360以上×270×123	北N57°W	蛇行	黒褐色砂質土	陶-指鉢・鉢皿(灰釉)・大鉢・磁-小鉢・土師 質-甕・灰-碗・陶-後期粗製深鉢・後期・粗製深鉢、 柳刃型石斧(硬砂岩)、F 2、小型打製石斧(綠色岩)、 赤-後期前半盤・敲打器(硬砂岩)	炭多い。焼骨	
SD03	BO06	1330以上×180×110	N16°E	直線状	黒褐色砂質土			
SD04	BS10	284×126×52	N47°E	直線状	黒褐色砂質土			
SH01	BN06	100×47	N25°W	不整形円	黒褐色砂質土			
SH05	AL22	210×182×60	N25°W	不整形円	黒褐色砂質土			
SK18	AK22	500×(250)×10	-	-	黒褐色砂質土			
SK19	AL23	102×90×70	N15°E	不整形	黒褐色砂質土			
SK20	AM24	98×78×35	N35°W	精円	黒褐色砂質土			
SD05	AQ27	158×102×43	N43°W	不整形	黒褐色砂質土			
		280以上×70×18	N29°W	直線状	黒褐色砂質土			
		小 54×8			炭微量			

第2表 羽翅型遗物遗物属性表(2)

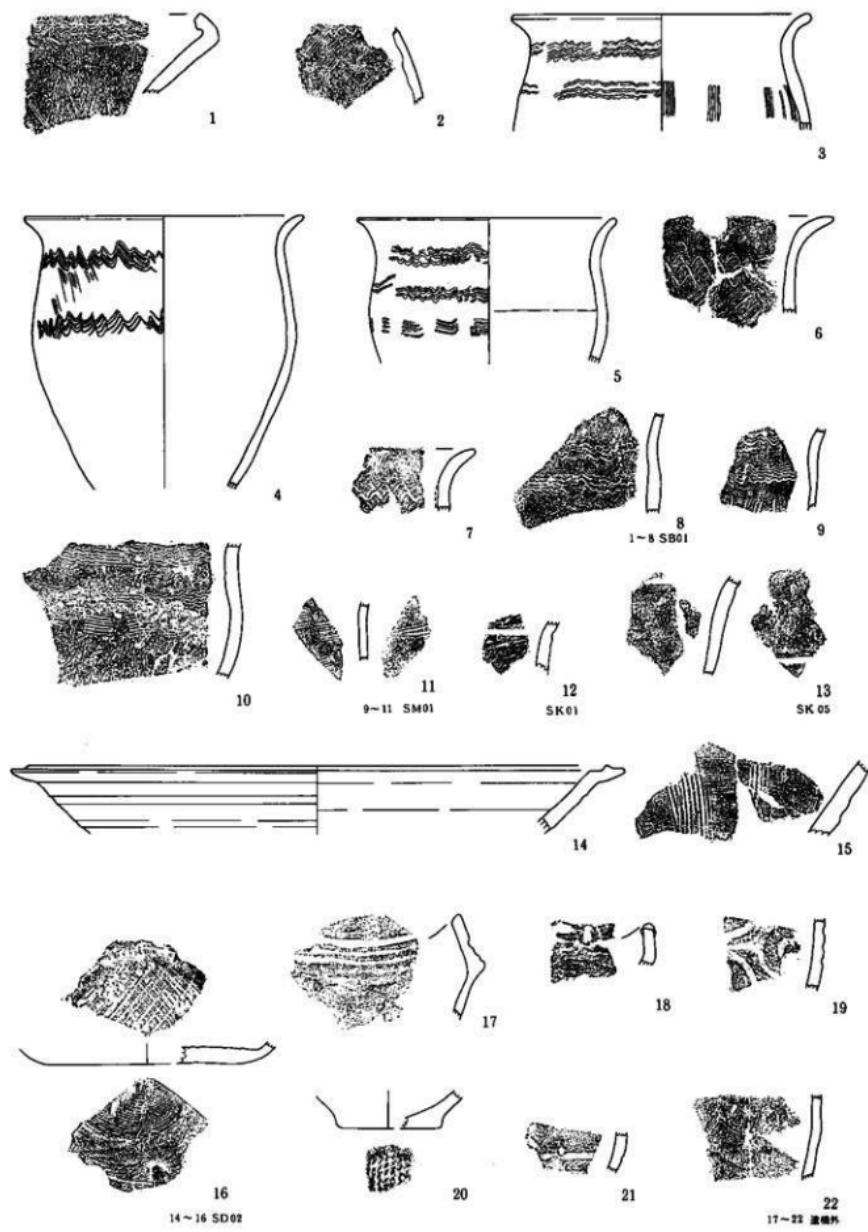
遗物名	检出位置	法量(cm)	最轴	平面形	埋土	出土遗物	时期	備考
SD06 AU31		350×76×45	N60° W	直線狀				
SD07 AO25	小	60×18 150以上×280×19	東 N108° W	弯曲				
		小	190×4	中N70° V 西N52° W				
新V地点								
SD08 AB21		590以上×62×17	N53° E	直線狀				
SD09 BS14	小	35×8 940×92×21	東N55° E 中N105° E 西N67° E	直線狀				
SD10 BT14		2780×52×15	東N78° E	弯曲				
SD11 BO07	小	22×3 1100以上×-×10	西N55° E N58° E	直線狀				
SD12 BM08	小	-×5 1600以上×-×-	-	蛇行				
新III地点								
SK21 BD44		325×85×179	N37° E	不整形				
SD13 BB47		590以上×280×146	N75° E	直線狀				
SD14 BC42	小	200×142 520以上×500×20	N53° W	直線狀				
SD15 BE45	小	420×19 540以上×-×-	-	-				

附录3表 方角秉造踏道桥圆性表

勘探序号	勘探名	检出位置 法量(cm)	黄土	平面形	层	JS標準土壤	土壤色	土性	出土遗物	时间	编号
SM03			I	耕土	II	2.5YR1.7/1	赤黑	HC			
			III		IV	7.5YR1.7/1	黑	HC			
			V		VI	5YR3/1	黑褐	HC			
			V		V	5YR1.7/1	黑	HC			
			V		VII	7.5YR3/2	黑褐	HC			
			1		1	5YR3/1	黑褐	HC			
			2		2	5YR2/1	黑褐	HC			
			3		3	2.5YR2/1	赤黑	HC			
			4		4	2.5YR1.7/1	赤黑	HC			
SK41	AB14	-<->47			-						
SK42	AB14	80×70×36	N65°W	椭円		5YR1.7/1	黑	HC			
SK43	AC14	105×100×58	-	円形		5YR1.7/1	黑	HC			
SK44	AC15	112×-×15	N8°E	椭円?		5YR1.7/1	黑	HC			
SK45	AC16	115×108×23	-	円形		5YR1.7/1	黑	HC			
SK46	AD16	105×102×40	-	円形		5YR1.7/1	黑	HC			
SK47	AE15	-<->7	-	-		5YR1.7/1	黑	HC			
SK48	AF16	-<->5	-	-		2.5Y1.7/1	赤黑	HC			
SK49	AF16	138×120×60	N55°E	不整椭円		2.5Y1.7/1	赤黑	HC			
SK50	AF16	158×-×24	N4°E	不整椭円		5YR1.7/1	黑	HC			
SK51	AG17	115×115×37	-	円形		5YR1.7/1	黑	HC			
SK52	AH18	155×142×35	N90°E	椭円		2.5Y1.7/1	赤黑	HC			
SK53	AK19	141×-×21	-	-		5YR1.7/1	黑	HC			
SK54	AL20	166×150×27	N62°E	椭円		5YR1.7/1	黑	HC			
SK55	AJ18	-<->13	-	-		5YR1.7/1	黑褐	HC			
SK56	AD14	-<->70	-	-		5YR2/1	黑褐	HC			
SK57	AB15	45×-×26	N23°E	-	b	7.5YR1.7/1	黑	SIC			
SK58	AA14	-<->34	-	-		5YR1.7/1	黑	HC			
SK59	AR01	148×148×20	-	-		2.5Y1.7/1	赤黑				

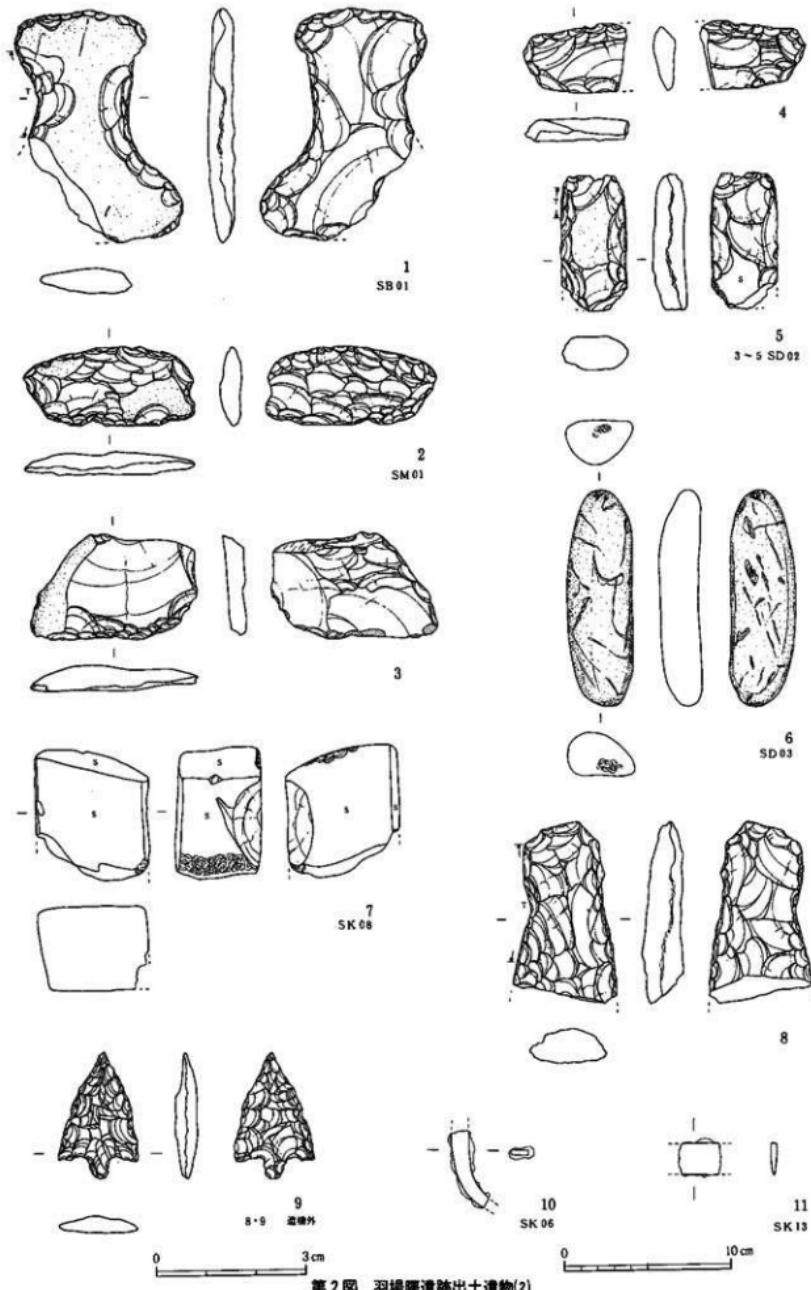
第4表 陶磁器解説表

図 番 号	出 所	分 類	形 状 特 徴	法 量 (m)			重 量 (g)	成 形 方 法	結 晶 文 様	装 飾 技 法	基 盤 材 質	計 数	印 刷 方 法	製作 地	製作 年 代	備 考
				a	b	c										
第4図 9 222 通小皿 X端反光 N平形無高台	74 15 38 —	—	底邊	透明	—	—	92 52 35	鉄輪	—	—	—	—	—	窓戸・美濃系	1700~	窓戸某村
第4図 10 222 通小皿 線彫毛	—	—	40 62	—	底邊左	底邊	—	—	—	—	—	—	—	窓戸・美濃系	—	入
第4図 11 222 通小皿	70 50 40	—	底邊	底邊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	窓戸・美濃系	—	—
第4図 12 222 陶弘景器 Ⅱ台底状込み	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	窓戸・美濃系	—	—
第4図 13 222 陶灯明受皿 I灯明受皿 油漬切立状	B 86 17 34 62	58	底邊右	鉄輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	窓戸・美濃系	—	外面に墨わ焼きの落羽痕
第6図 3 南朝 通小皿 Ⅰ織彫毛	61 44 27	—	底邊	染竹透明 花卉に鳥	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白なし	肥後系	?
第6図 4 222 通小皿 IXⅢ筒丸毛	76 50 40	—	底邊	染竹透明 外 よろけ模	—	—	—	—	—	—	—	—	—	肥後系	—	—
第6図 5 南朝 通中碗 Ⅰ織彫毛	89 58 35	—	底邊	染竹透明 外 松竹梅 内 四方彌、見込み	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白なし	肥後系	?
第6図 6 南朝 通中碗 X端反形 Ⅰ織彫毛	92 47 37	—	底邊	染竹透明 外 漢文、見込み?	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白なし	肥後系	?
第6図 7 南朝 通中碗 IXⅠ半彫形 ⅠIX 44	119 77 44	—	底邊	鉄輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	白なし	京信楽系?	—
第6図 8 南朝 通小皿 N平形無高台	104 19 35	—	底邊	底邊	—	—	—	—	—	—	—	—	—	黒灰なし	京信楽系?	—
第6図 9 222 通中皿 IC丸形底広 扁ノ目凹形高台	—	—	91	—	—	—	—	—	染竹透明 外 唐草、内 三方割緋	—	—	—	—	白なし	肥後系	1700~
第6図 10 222 磁垂竹彫直?	—	—	43	—	—	—	—	—	染竹透明 外 菊花 内 花椿草?	—	—	—	—	白なし	肥後系	—
第6図 11 222 磁神酒器引	—	—	29	—	—	—	—	—	染竹透明 外 松竹梅	—	—	—	—	白なし	波佐見系?	—
第6図 12 222 陶灯明受皿 I灯明受皿 油漬切立状	B 90 19 32 60	—	底邊	鉄輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰黄	京信楽系?	—
第6図 13 南朝 陶灯明受皿 I灯明受皿 油漬切立状	B 115 25 46 66	—	底邊	鉄輪	—	—	—	—	—	—	—	—	—	灰なし	京信楽系?	—

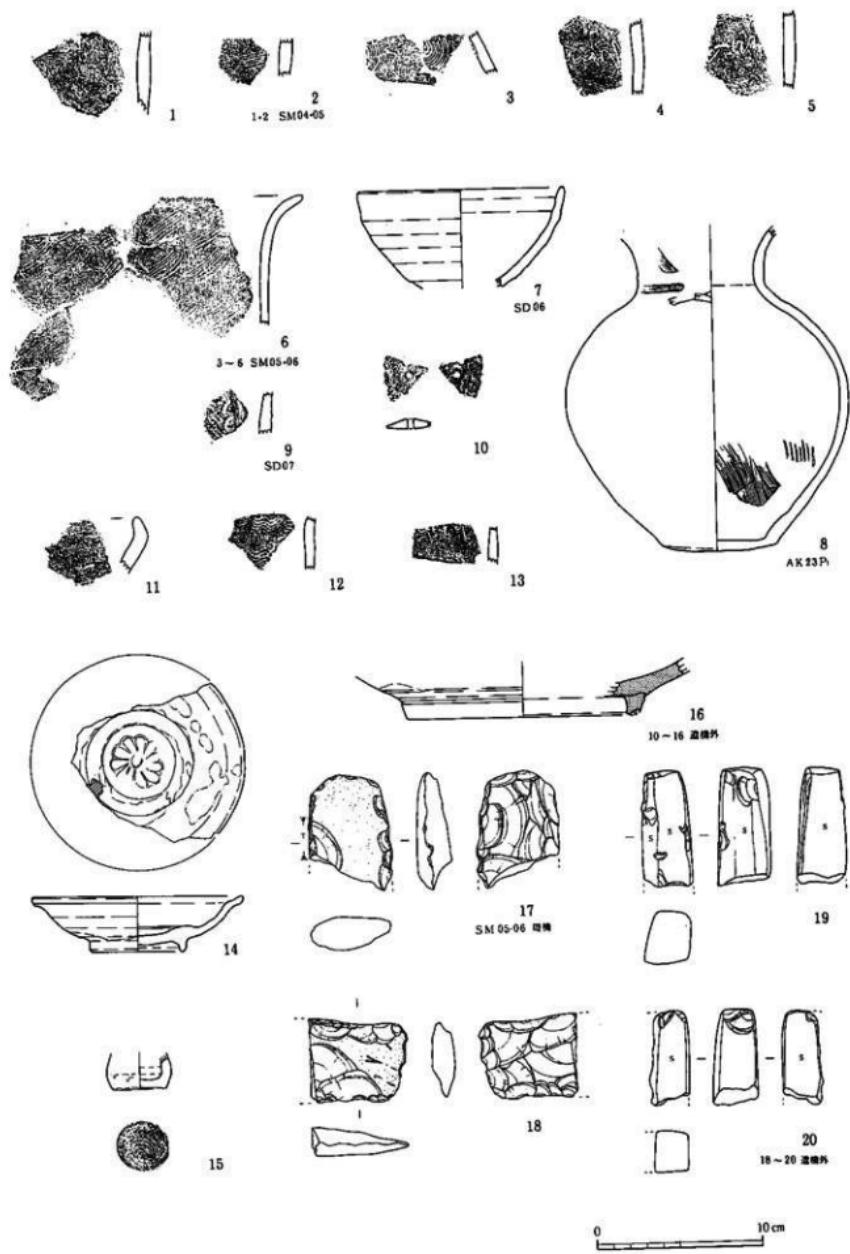


第1図 羽塔塚遺跡出土遺物(1)

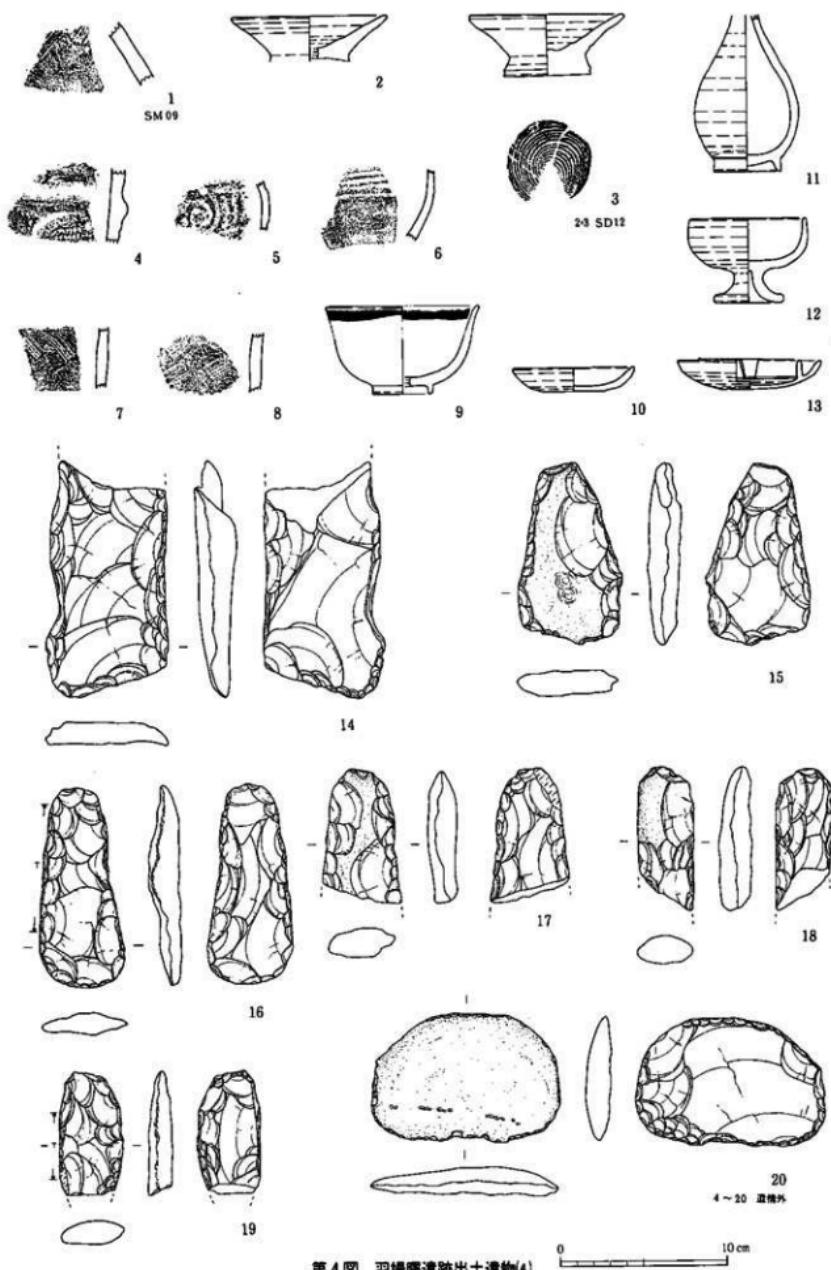
0 10 cm



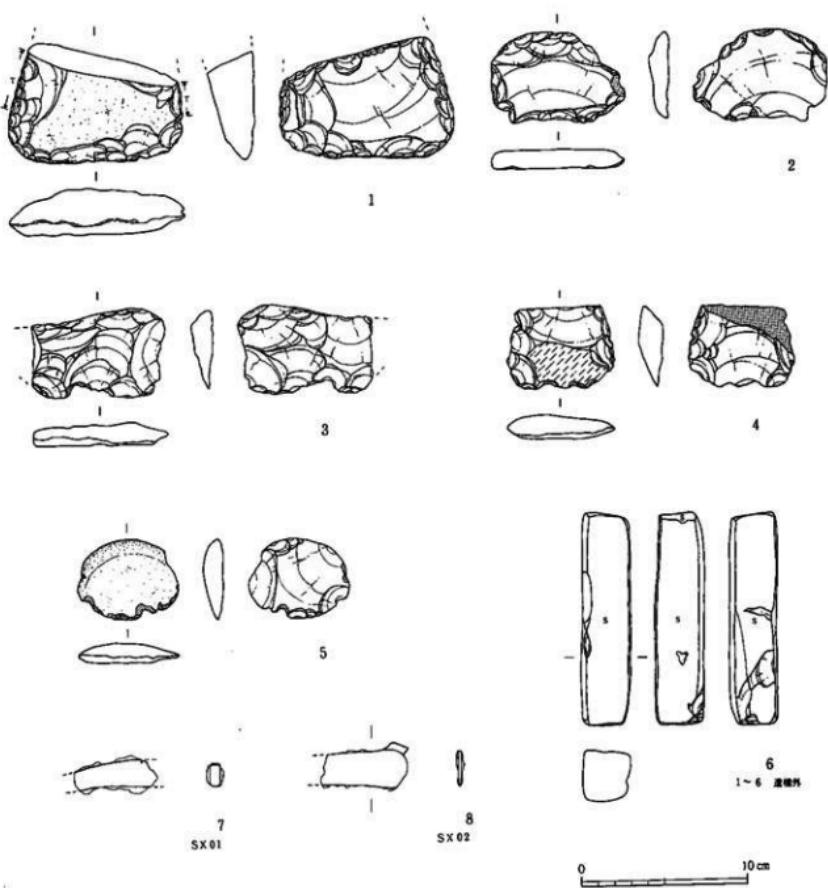
第2図 羽場署遺跡出土遺物(2)



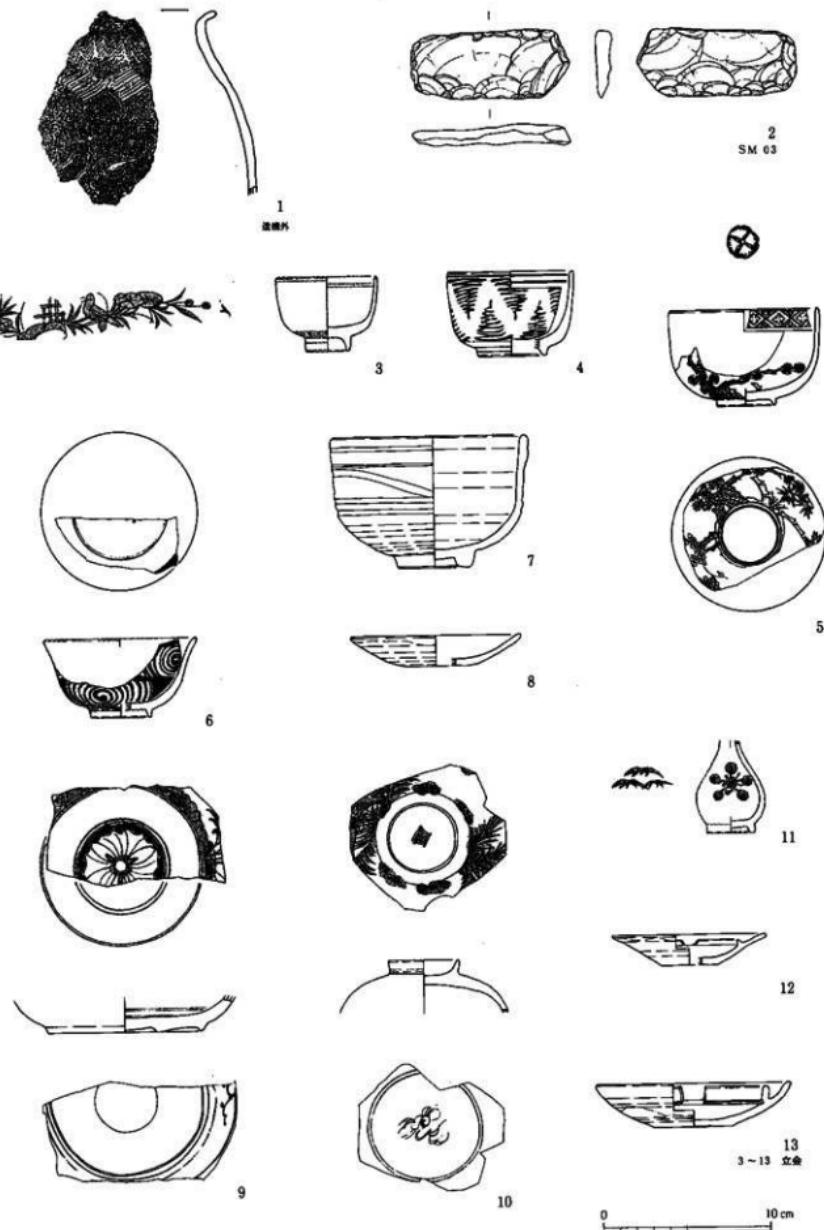
第3図 羽場跡遺跡出土遺物(3)



第4図 羽場崎遺跡出土遺物(4)



第5図 羽場塚遺跡出土遺物(5)

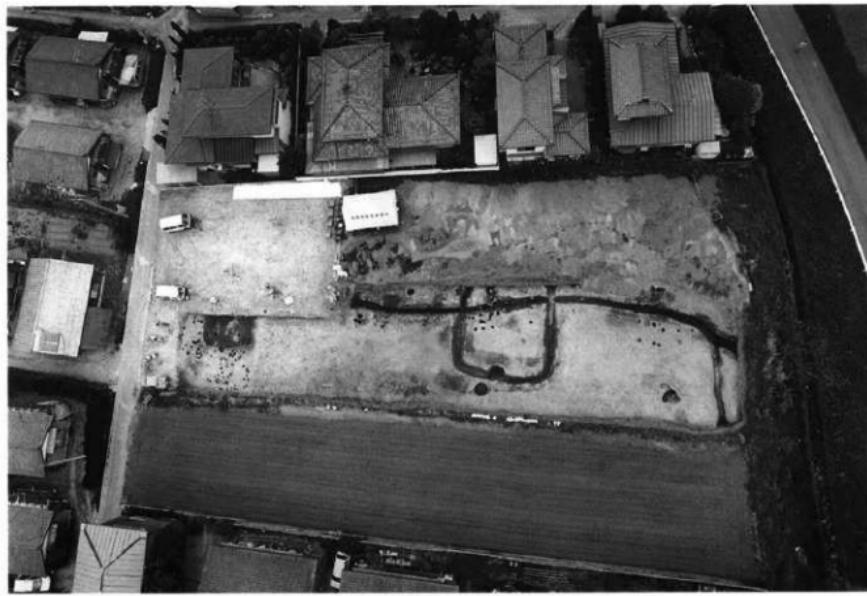


第6図 方角東遺跡出土遺物

写 真 図 版



羽場塚遺跡 第Ⅰ地点とその周辺



第Ⅰ地点 北西半



第Ⅰ地点 南東半



同上



SB01



同炉址

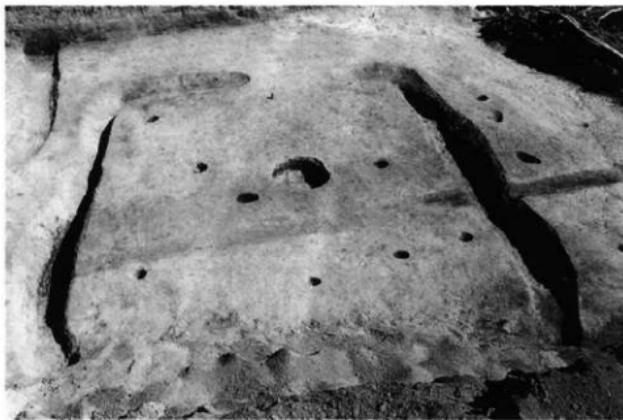




SM01・ST05



SM01・SD03



SM02





SD02 (南西から)



SD02 (北東から)



SD01 (南東から)



基準点測量



重機表土剥ぎ



遣構検出作業



同掘り下げ作業



羽場署遺跡 第Ⅲ地点全景



同（北東から）



ST03



SM04



SB05 • SD07



SK19



重機表土剥ぎ



遺構振り下げ作業



羽場署遺跡 第V地点  
全景（南西から）



SM08



SM09

図版13



SD12



SD10・11、SX02  
(北東から)



重機表土剥ぎ



遺構掘り下げ作業



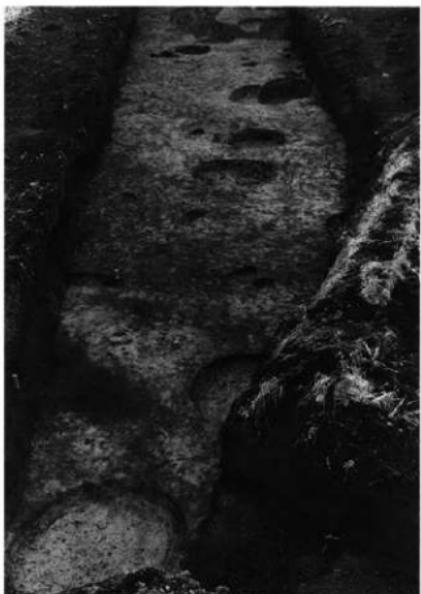
羽場塚遺跡 第VII地点  
SK21



遺構検出作業



方角東遺跡 市道6-27号線本調査 (左 南東から 右 北西から)



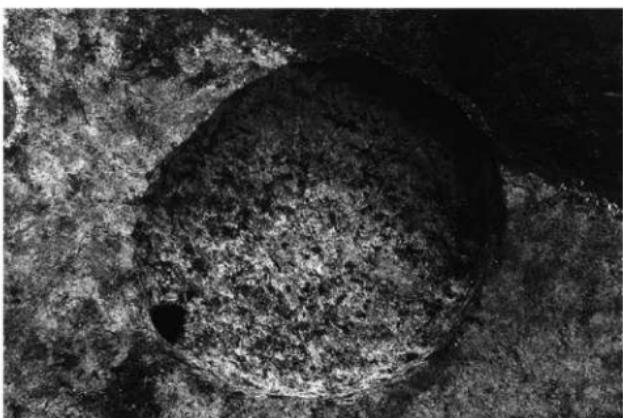
SM03



SM03周溝（南東側）



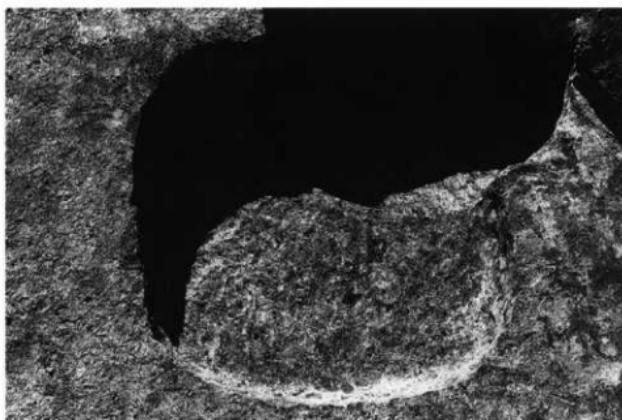
SK42他



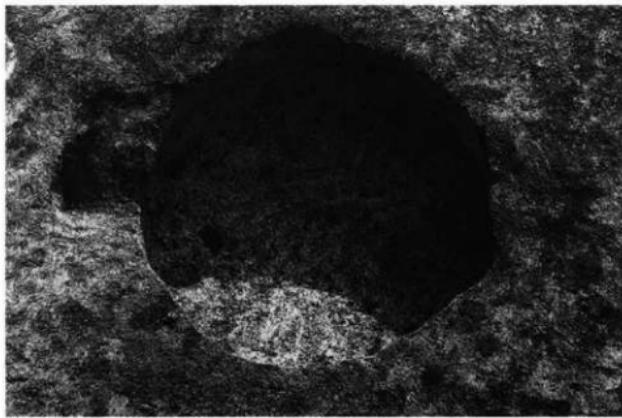
SK45



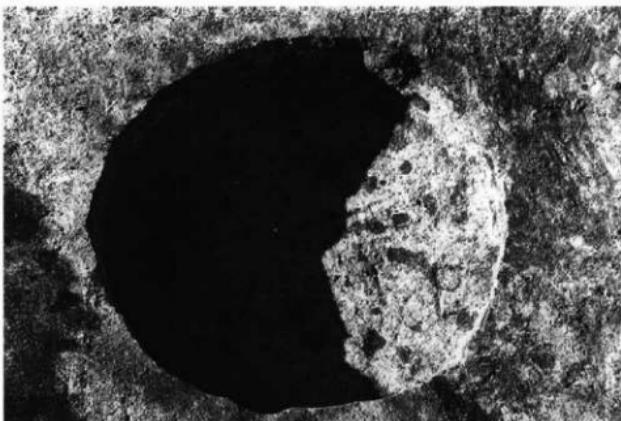
SK49



SK50



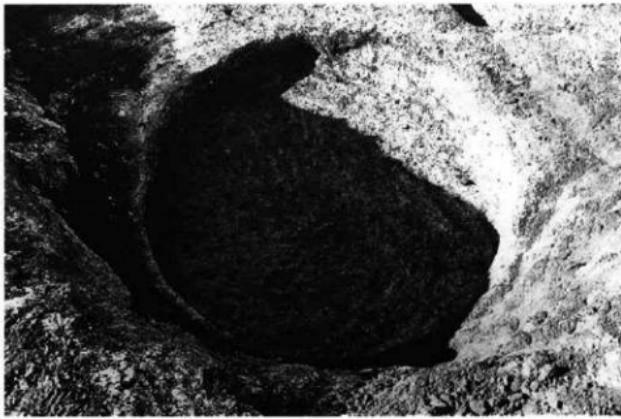
SK51



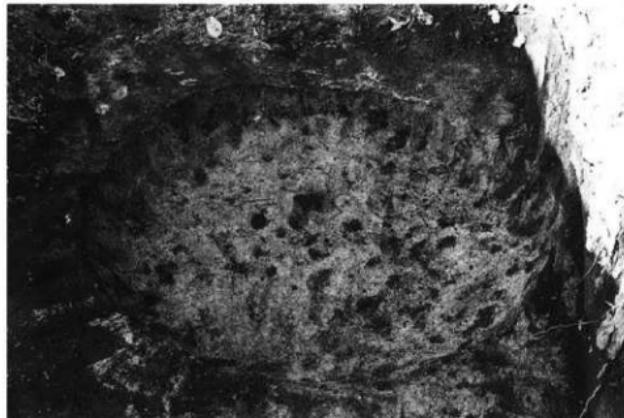
SK52



SK53



SK54



市道 6-28号線  
SK59



重機表土剥ぎ



造構検出作業



羽場曙遺跡 第I地点 SB01 出土土器



同 第Ⅲ地点 AK23P1 出土土器



# 報告書抄録

ふりがな	はばあけほのいせき・ほうがくひがしいせき						
書名	羽場曙遺跡・方角東遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	馬場保之						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 TEL.0265-53-4545						
発行年月日	平成15年3月日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
羽場曙遺跡 方角東遺跡	飯田市 羽場町・ 羽場権現	20205	35° 31' 00"	137° 48' 45"	平成5年 1月19日～ 平成15年 3月31日	1,892m <sup>2</sup> 105m <sup>2</sup>	土地区画整 理事業（丸 山・羽場第 2地区）
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
羽場曙遺跡	集落址	弥生時代 後期 中世 近世	竪穴住居址 竪穴 掘立柱建物址 方形周溝墓 柱列・杭列 土坑・土壤墓 溝址・溝状址 集石 地下室 水田址	3棟 2基 3棟 9基 1列 20基 15条 1基 1基 2	縄文土器 石器 弥生土器 石器 陶磁器	弥生時代後期の居住 域・墓域、中・近世の 墓域・生產域の一画が 調査された。 また、高位段丘上の 災害の歴史や、開発の 歴史が把握された。	
方角東遺跡	集落址	弥生時代 後期 中世 近世	方形周溝墓 土坑・土壤墓 溝址・溝状址	2基 20基 4条	弥生土器 石器 陶磁器	弥生時代後期・中世 の墓域の一画が調査さ れた。	

---

---

はばあけぼのいせき はうがくひがしいせき  
羽場曙遺跡 方角東遺跡

2003年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地  
長野県飯田市教育委員会  
印 刷 飯田共同印刷株式会社

---

---

